秋田県文化財調査報告書第452集

向 様 田 D 遺 跡（第２次）

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXI －

２０１０・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

秋田県文化財調査報告書第452集

向様田D遺跡（第2次）

2010・3　秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

向様田（むかいさまだ）Ｄ遺跡（第２次）

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXI －

２０１０・３

秋田県教育委員会

1　平成19年度の向様田Ｄ遺跡（調査前）遠景（南東から）

2　調査区全景とSM60盛土範囲確認状況（西から）

1　SQ127配石遺構とSM60盛土堆積状況（南東から）

2　SK104土坑覆土上面浅鉢形土器出土状況（南から）

59—1
59—2
59—3
60—1
60—2
60—4
60—5
60—6
60—8
60—9
60—10
60—12
60—13
60—15
60—17

1　土偶(表)

59—1
59—2
59—3
60—1
60—2
60—4
60—5
60—6
60—8
60—9
60—10
60—12
60—13
60—15
60—17

2　土偶(裏)

92—3
93—2
93—3
93—4
94—1
94—2

1　石剣・石刀

61—18
101—1
101—2
101—3
101—4
101—5
101—6
101—7
101—8
101—9
101—10
101—11
101—12
101—13
101—14
101—15
101—16
101—17
101—18
101—19
101—20
101—21
101—22
101—23
101—24
101—25
101—26
101—27
101—28
101—29
101—30
101—31
102—1
102—2
102—3
102—4
102—5
102—6
102—7
102—8
102—9
102—10
102—11
102—12
102—13
102—14
102—15
102—16
102—17
102—18
102—19
102—20

2　玉類

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、そうした自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われております。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、森吉山ダム建設事業に先立って、平成19年度に北秋田市において実施した向様田Ｄ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、盛土・配石遺構・土坑等が検出されました。盛土からは縄文時代晩期の大量の遺物も見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、北秋田市、北秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成22年３月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　　言

1　本書は、森吉山ダム建設事業に伴い、平成19(2007)年度に発掘調査を実施した秋田県北秋田市(旧北秋田郡森吉町)森吉字向様田家ノ下モ14－１外に所在する向様田Ｄ遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡は平成13(2001)年度に2,600㎡の発掘調査を行っており、平成17(2005)年３月に、『向様田Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅢ－』　秋田県文化財調査報告書第392集として報告している。今回の発掘調査対象地は遺跡北東側の工事用道路下にあった338㎡である。本報告書では、平成13年度発掘調査を第１次調査、今回報告する平成19年度発掘調査を第２次調査とする。向様田Ｄ遺跡第２次調査成果については、既にその一部を『秋田県埋蔵文化財センター年報26(平成19年度)』および発掘調査報告会資料などによって公表しているが、本報告書を正式なものとする。また、SM60盛土層序については、第１次調査の所見を一部変更した。

2　本書第１図は、国土地理院発行の１／50,000地形図・『米内沢』・『大葛』を複製して作成した。第２図は、国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所提供の１／1,000平面図をもとに作成した。

3　遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を使用した。

4　発掘調査および整理作業における以下の作業を下記に委託した。
水準測量および方眼杭設置：有限会社ダイワ技術
掘削土移動・整地：池田建設株式会社
土器実測・トレース：NPO法人歴史・環境・まちづくり　株式会社アーキジオ
株式会社シン技術コンサル
土製品実測・トレース：株式会社ラング
石器・石製品実測・トレース：株式会社アルカ
遺物写真撮影：株式会社みどり光学社

5　以下の自然科学的分析は、下記に委託した。
石器石質鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社
黒曜石産地同定：株式会社パレオ・ラボ
動物遺存体同定：株式会社パレオ・ラボ
なお、辻　誠一郎東京大学大学院教授には、東京大学大学院新領域創成科学科による受託研究「遺跡出土の植物遺体から見た東北北部の生活文化史の研究－森吉山ダム関連遺跡発掘調査に伴う環境資料調査その２(平成19年度)」の一環として、向様田Ｄ遺跡SM60盛土の土壌分析をお願いした。しかしながら、良好な結果が得られなかったため、ここでは分析結果報告は掲載しない。

6　本報告書の執筆は、第１章～第４章第２節８を簗瀬圭二が、第４章第２節９・第６章を榮　一郎が行った。第５章は委託した自然科学的分析の結果報告を掲載した。掲載にあたっては、報告書全体の整合性をとるため、文意に影響を与えない範囲で、一部の用語・表現等を変更した。編集は榮が行った。

7　発掘調査および整理作業において、国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所・北秋田市教育委員会から御援助・御協力をいただいた。また、平成17年度から平成20年度まで森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議を開催し、下記の検討会議委員の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。
岡田康博（平成20年度）　岡村道雄　高橋保雄（平成19年度まで）　辻　誠一郎　藤沼邦彦　山本暉久

凡　　例

1　本報告書に掲載した平面図の方位は、日本測地系平面直角座標第Ｘ系座標北である。NP41グリッドにおける座標北と磁北との偏角は、西偏10°20′である。本文および巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

2　遺構については検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判断したものは欠番とした。遺構に使用した略記号は以下のとおりである。

SK：土坑　　SM：盛土　　SQ：配石遺構・立石遺構
SKP：柱穴様ピット　　SN：焼土遺構　　SX：赤色顔料撒布跡

3　遺構実測図および遺物実測図には、それぞれスケールを付して縮尺を表示した。ただし、縄文土器の文様展開図のうち、縄文土器実測図(縮尺1/3)とは異なる縮尺としたものには、その縮尺のみを表記した。

4　挿図中に使用した網掛け等は以下の通りである。これ以外については、個々の頁に示した。

【遺構】

焼土　　赤色顔料範囲　　礫断面

【遺物】

土器･土製品･石製品赤色顔料付着範囲　　縄文土器文様展開図の縄文施文範囲　　アスファルト付着範囲

石器赤色顔料付着範囲　　石器磨面　　被熱痕範囲

なお、土器・土製品・石製品の赤色顔料付着範囲については、網掛けを省略した場合がある。

5　巻頭図版および図版掲載遺物写真の縮尺は任意である。また、該当する遺物実測図を指示する場合は第１図１は１－１のように略記した。

目　　次

序 …… i
例言 …… ii
凡例 …… iv
目次 …… v
挿図目次 …… vi
表目次 …… vii
図版目次 …… viii

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 2
第２章　遺跡の環境 …… 3
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　発掘調査の概要 …… 12
　第１節　遺跡の概観 …… 12
　第２節　調査の方法 …… 12
　　1　野外調査 …… 12
　　2　室内整理 …… 14
　第３節　調査の経過 …… 15
第４章　調査の記録 …… 19
　第１節　基本層序 …… 19
　第２節　検出遺構と出土遺物 …… 20
　　1　概要 …… 20
　　2　土坑 …… 21
　　3　土器埋設遺構 …… 22
　　4　配石遺構 …… 22
　　5　立石遺構 …… 23
　　6　焼土遺構 …… 23
　　7　赤色顔料撒布跡 …… 23
　　8　柱穴様ピット …… 24
　　9　盛土 …… 25
第５章　自然科学的分析 …… 179
　第１節　向様田Ｄ遺跡出土石器等の石質鑑定報告 …… 179
　第２節　向様田Ｄ遺跡出土黒曜石製石器の産地同定 …… 189

第３節　向様田Ｄ遺跡の動物遺体 ……194
第６章　まとめ ……197
報告書抄録 ……248

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置および周辺遺跡分布図 …… 6
第２図　向様田Ｄ遺跡周辺図 ……13
第３図　方眼配置と畦および土層断面位置 ……39
第４図　遺構配置図 ……40
第５図　SK104・129土坑……41
第６図　SR130土器埋設遺構・SQ101立石遺構・SN120焼土遺構・SX122・123・124赤色顔料撒布跡 ……42
第７図　SQ127配石遺構 ……43・44
第８図　SKP105・107・108・110・111・112・113・114柱穴様ピット ……45
第９図　SKP115・116・117・118・119・131柱穴様ピット ……46
第10図　SM60土層断面（１） ……47・48
第11図　SM60土層断面（２） ……49・50
第12図　SK104・SK129・SR130・SKP114出土遺物 ……51
第13図　SM60出土遺物（１） ……52
第14図　SM60出土遺物（２） ……53
第15図　SM60出土遺物（３） ……54
第16図　SM60出土遺物（４） ……55
第17図　SM60出土遺物（５） ……56
第18図　SM60出土遺物（６） ……57
第19図　SM60出土遺物（７） ……58
第20図　SM60出土遺物（８） ……59
第21図　SM60出土遺物（９） ……60
第22図　SM60出土遺物(10) ……61
第23図　SM60出土遺物(11) ……62
第24図　SM60出土遺物(12) ……63
第25図　SM60出土遺物(13) ……64
第26図　SM60出土遺物(14) ……65
第27図　SM60出土遺物(15) ……66
第28図　SM60出土遺物(16) ……67
第29図　SM60出土遺物(17) ……68
第30図　SM60出土遺物(18) ……69
第31図　SM60出土遺物(19) ……70
第32図　SM60出土遺物(20) ……71
第33図　SM60出土遺物(21) ……72
第34図　SM60出土遺物(22) ……73
第35図　SM60出土遺物(23) ……74
第36図　SM60出土遺物(24) ……75
第37図　SM60出土遺物(25) ……76
第38図　SM60出土遺物(26) ……77
第39図　SM60出土遺物(27) ……78
第40図　SM60出土遺物(28) ……79
第41図　SM60出土遺物(29) ……80
第42図　SM60出土遺物(30) ……81
第43図　SM60出土遺物(31) ……82
第44図　SM60出土遺物(32) ……83・84
第45図　SM60出土遺物(33) ……85
第46図　SM60出土遺物(34) ……86
第47図　SM60出土遺物(35) ……87
第48図　SM60出土遺物(36) ……88
第49図　SM60出土遺物(37) ……89
第50図　SM60出土遺物(38) ……90
第51図　SM60出土遺物(39) ……91
第52図　SM60出土遺物(40) ……92
第53図　SM60出土遺物(41) ……93
第54図　SM60出土遺物(42) ……94
第55図　SM60出土遺物(43) ……95
第56図　SM60出土遺物(44) ……96
第57図　SM60出土遺物(45) ……97
第58図　SM60出土遺物(46) ……98
第59図　SM60出土遺物(47) ……99

第60図　SM60出土遺物(48) ……100
第61図　SM60出土遺物(49) ……101
第62図　SM60出土遺物(50) ……102
第63図　SM60出土遺物(51) ……103
第64図　SM60出土遺物(52) ……104
第65図　SM60出土遺物(53) ……105
第66図　SM60出土遺物(54) ……106
第67図　SM60出土遺物(55) ……107
第68図　SM60出土遺物(56) ……108
第69図　SM60出土遺物(57) ……109
第70図　SM60出土遺物(58) ……110
第71図　SM60出土遺物(59) ……111
第72図　SM60出土遺物(60) ……112
第73図　SM60出土遺物(61) ……113
第74図　SM60出土遺物(62) ……114
第75図　SM60出土遺物(63) ……115
第76図　SM60出土遺物(64) ……116
第77図　SM60出土遺物(65) ……117
第78図　SM60出土遺物(66) ……118
第79図　SM60出土遺物(67) ……119
第80図　SM60出土遺物(68) ……120
第81図　SM60出土遺物(69) ……121
第82図　SM60出土遺物(70) ……122
第83図　SM60出土遺物(71) ……123
第84図　SM60出土遺物(72) ……124
第85図　SM60出土遺物(73) ……125
第86図　SM60出土遺物(74) ……126
第87図　SM60出土遺物(75) ……127
第88図　SM60出土遺物(76) ……128
第89図　SM60出土遺物(77) ……129
第90図　SM60出土遺物(78) ……130
第91図　SM60出土遺物(79) ……131
第92図　SM60出土遺物(80) ……132
第93図　SM60出土遺物(81) ……133
第94図　SM60出土遺物(82) ……134
第95図　SM60出土遺物(83) ……135
第96図　SM60出土遺物(84) ……136
第97図　SM60出土遺物(85) ……137
第98図　SM60出土遺物(86) ……138
第99図　SM60出土遺物(87) ……139
第100図　SM60出土遺物(88) ……140
第101図　SM60出土遺物(89) ……141
第102図　SM60出土遺物(90) ……142
第103図　SM60出土遺物(91) ……143
第104図　黒曜石産地分布図(東日本) ……191
第105図　向様田Ｄ遺跡出土黒曜石判別図(１) ……192
第106図　向様田Ｄ遺跡出土黒曜石判別図(２) ……192
第107図　黒曜石産地推定対象資料 ……193
第108図　向様田Ｄ遺跡出土骨角器・動物遺体 ……196

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧 …… 7
第２表　柱穴様ピット一覧 ……24
第３表　SM60盛土土層一覧 ……27
第４表　地区・層別土器出土量(１) ……28
第５表　地区・層別土器出土量(２) ……29
第６表　土製品・石器・石製品・骨角器内訳 ……31
第７表　器種別出土量(口縁部・台部) ……33
第８表　掲載土器一覧(１) ……144
第９表　掲載土器一覧(２) ……145
第10表　掲載土器一覧(３) ……146
第11表　掲載土器一覧(４) ……147
第12表　掲載土器一覧(５) ……148
第13表　掲載土器一覧(６) ……149
第14表　掲載土器一覧(７) ……150
第15表　掲載土器一覧(８) ……151
第16表　掲載土器一覧(９) ……152
第17表　掲載土器一覧(10) ……153
第18表　掲載土器一覧(11) ……154

第19表　掲載土器一覧(12) ……155
第20表　掲載土器一覧(13) ……156
第21表　掲載土器一覧(14) ……157
第22表　掲載土器一覧(15) ……158
第23表　掲載土器一覧(16) ……159
第24表　掲載土器一覧(17) ……160
第25表　掲載土器一覧(18) ……161
第26表　掲載土器一覧(19) ……162
第27表　掲載土器一覧(20) ……163
第28表　掲載土器一覧(21) ……164
第29表　掲載土器一覧(22) ……165
第30表　掲載土器一覧(23) ……166
第31表　掲載土器一覧(24) ……167
第32表　掲載土器一覧(25) ……168
第33表　掲載土器一覧(26) ……169
第34表　掲載土器一覧(27) ……170
第35表　掲載土製品一覧 ……171
第36表　掲載石器一覧(１) ……172
第37表　掲載石器一覧(２) ……173
第38表　掲載石器一覧(３) ……174
第39表　掲載石器一覧(４) ……175
第40表　掲載石器一覧(５) ……176
第41表　掲載石製品一覧(１) ……176
第42表　掲載石製品一覧(２) ……177
第43表　掲載石製品一覧(３) ……178
第44表　掲載骨角器一覧 ……178
第45表　石器類の石質鑑定結果表(１) ……182
第46表　石器類の石質鑑定結果表(２) ……183
第47表　石器類の石質鑑定結果表(３) ……184
第48表　石器類の石質鑑定結果表(４) ……185
第49表　石製品類の石質鑑定結果表(１) ……186
第50表　石製品類の石質鑑定結果表(２) ……187
第51表　石器類の器種別石材組成 ……188
第52表　石製品類の器種別石材組成 ……188
第53表　黒曜石産地(東日本)の判別群名称 ……191
第54表　産地推定結果 ……194
第55表　向様田Ｄ遺跡出土動物遺体の同定結果 ……195

図　版　目　次

巻頭図版１　１　平成19年度の向様田Ｄ遺跡(調査前)遠景(南東から)
　　２　調査区全景とSM60盛土範囲確認状況(西から)
巻頭図版２　１　SQ127配石遺構とSM60盛土堆積状況(南東から)
　　２　SK104土坑覆土上面浅鉢形土器出土状況(南から)
巻頭図版３　１　土偶(表)
　　２　土偶(裏)
巻頭図版４　１　石剣・石刀
　　２　玉類
図版１　１　平成13年度の向様田遺跡群全景(南西から)
　　２　平成13年度の向様田Ｄ遺跡全景(上が北)
　　３　平成19年度の向様田Ｄ遺跡(路盤掘削後)遠景(南東から)
図版２　１　SK104土坑確認状況(南から)
　　２　SK104土坑土層断面(南から)
　　３　SK104土坑土層断面(南から)
　　４　SK104土坑覆土上面浅鉢形土器出土状況(南から)
　　５　SK104土坑完掘状況(南西から)
　　６　SK104土坑完掘状況(南西から)
　　７　SQ101立石遺構確認状況(南から)
　　８　SQ101立石遺構土層断面(南から)
図版３　１　SQ127配石遺構確認状況(南東から)
　　２　SQ127配石遺構断ち割り状況(南東から)
　　３　SK129土坑確認状況(北西から)
　　４　SR130土器埋設遺構確認状況(西から)
　　５　SR130土器埋設遺構土器埋設状況(西から)
　　６　SM60盛土第１次調査南北断面②(西から)

7　SM60盛土第１次調査NR38区東西断面②（南から）
8　SM60盛土第１次調査NQ38区南北断面②（西から）
図版４　1　SM60盛土確認状況（南西から）
2　SM60盛土NQ38c区南北断面②（西から）
3　SM60盛土NQ39区南北断面②（西から）
4　SM60盛土NS39区東西断面①（南西から）
5　SM60盛土NQ・NR39区東西断面①（南から）
6　SM60盛土NP・NQ39区東西断面①（南から）
7　SM60盛土NQ・NR39区東西畦①北壁土層断面（北から）
8　SM60盛土NR38・39区南北断面①（南東から）
図版５　1　SN120焼土遺構確認状況（北から）
2　SX122赤色顔料撒布跡確認状況（西から）
3　SX123赤色顔料撒布跡確認状況（南から）
4　SX124赤色顔料撒布跡確認状況（東から）
5　SX124赤色顔料撒布跡土層断面（北西から）
6　SM60盛土Ｅ区（NR39b区）M17層遺物確認状況（東から）
7　SM60盛土Ａ区（NS38区）M17層遺物確認状況（南から）
8　SM60盛土Ｂ区（NQ39a・b区）M57層遺物確認状況（東から）
図版６　1　SM60盛土Ｂ区（NQ38d区）M17層土偶確認状況
2　SM60盛土Ｂ区（NQ39a区）M17層壺形土器・石鏃確認状況
3　SM60盛土Ｃ区（NQ38d・NR39a区）M17層焼骨確認状況
4　SM60盛土Ｂ区（NR38b区）M17層勾玉確認状況
5　SM60盛土Ｅ区（NR39d区）M17層壺形土器確認状況
6　SM60盛土Ｂ区（NQ39b区）M23層石刀確認状況
7　SM60盛土Ｂ区（NR38c区）M56層岩版確認状況
8　SM60盛土Ｃ区（NP38a区）M57層浅鉢形土器確認状況
図版７　1　SM60盛土Ｂ区（NR38b区）M57層小玉群確認状況
2　SM60盛土Ｂ区（NQ39b区）M57層岩版確認状況
3　SM60盛土Ｂ区（NR39a区）M57層土偶確認状況
4　SM60盛土Ｂ区（NR38b区）M57層遮光器土偶確認状況
5　SM60盛土Ｂ区（NR38b区）M57層浅鉢形土器・注口土器確認状況
6　SM60盛土Ｂ区（NR38c区）M57層有孔石製品確認状況
7　SM60盛土Ａ区（NR38b・d区）M57層深鉢形土器・壺形土器確認状況
8　SM60盛土NR39区東西畦①北壁土壌試料採取状況
図版８　1　縄文土器
図版９　1　縄文土器
図版10　1　縄文土器
図版11　1　縄文土器
図版12　1　縄文土器
図版13　1　縄文土器
図版14　1　縄文土器
図版15　1　縄文土器
図版16　1　縄文土器
図版17　1　縄文土器
図版18　1　縄文土器
図版19　1　縄文土器
図版20　1　縄文土器
図版21　1　縄文土器
図版22　1　縄文土器
図版23　1　縄文土器
図版24　1　縄文土器
図版25　1　縄文土器
図版26　1　縄文土器
図版27　1　縄文土器
図版28　1　縄文土器

図版29　1　縄文土器
図版30　1　縄文土器
　　2　縄文土器
図版31　1　縄文土器
　　2　縄文土器
図版32　1　縄文土器
　　2　縄文土器
図版33　1　縄文土器
　　2　縄文土器
図版34　1　縄文土器
　　2　有孔円盤状土製品・円盤状土製品ほか
図版35　1　石鏃・石槍
　　2　石錐
図版36　1　石匙
　　2　石匙
図版37　1　石篦・スクレイパー
　　2　スクレイパー
図版38　1　楔形石器・二次加工ある剥片
　　2　二次加工ある剥片
図版39　1　異形石器
　　2　石核
図版40　1　凹石類
　　2　敲石・石皿
図版41　1　打製石斧・磨製石斧
　　2　磨製石斧
図版42　1　石剣・石棒
図版43　1　土版・岩偶・岩版(表)
　　2　土版・岩偶・岩版(裏)
図版44　1　円盤状石製品
　　2　有孔円盤状石製品・有孔石製品ほか
図版45　1　小玉未製品(表)
　　2　小玉未製品(裏)

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

米代川は、秋田・岩手の県境付近の奥羽山脈の中岳(標高1,024m)に源流をもち、秋田県北部を東から西へ流れ、31の支流を合わせながら能代市で日本海に注いでいる。平成19年度の向様田Ｄ遺跡第２次発掘調査期間中にも災害救助法の適用を受けるほどの被害を被ったが、米代川の流域では、過去、幾多の洪水による被害を受けてきた(註１)。昭和47年７月５日～９日までの集中豪雨は米代川とその支流域に大洪水を引き起こし、特に米代川下流の旧二ツ井町や能代市の市街地などを浸水させ、甚大な被害を及ぼした(註２)。翌年、この大洪水を機に「米代川水系工事実施基本計画」が見直され、洪水調節を目的とする米代川上流ダム群の一つとして、阿仁川支流の小又川に阿仁川ダム(のちに森吉山ダムと改称)が建設されることとなった。森吉山ダムは、昭和63(1988)年に「森吉山ダムの建設に関する基本計画」が公示され、洪水調節の他、既得取水の安定化・河川環境の保全、灌漑用水の供給、水道用水の供給、水力発電などの多目的ダムとして建設されることとなった(註３)。

森吉山ダム建設に伴い、事業主体である建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)森吉山ダム工事事務所は、秋田県教育委員会に対し遺跡分布調査を依頼した。この依頼に基づき、秋田県教育委員会は、森吉山ダムによって水没する当該地域に関して遺跡分布調査を平成４(1992)年、平成５(1993)年の２か年にわたって実地し、その結果、新発見の桐内遺跡等の６遺跡が開発区域に係わることを確認した(註４)。この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は引き続いて事業区域内の確認調査を実施していくことを申し合わせた。この協議を承けて秋田県教育委員会では、平成６(1994)年から平成10(1998)年までに遺跡分布調査および確認調査を実施し、60の遺跡の存在を確認した(註５)。

森吉山ダム建設事業に係わる発掘調査については、確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事工程と調整して発掘調査を実施する合意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。発掘調査最終年の平成19(2007)年には本報告の向様田Ｄ遺跡(第２次)、森吉家ノ前Ａ遺跡(第３次)の発掘調査が実施された。秋田県教育委員会では、平成９(1997)年～平成19(2007)年までの11年間で、深渡遺跡・地蔵岱遺跡・姫ヶ岱Ｃ・Ｄ遺跡・桐内Ａ～Ｄ遺跡・桐内沢遺跡・日廻岱Ａ・Ｂ遺跡・向様田Ａ～Ｆ遺跡・砕渕遺跡・漆下遺跡・森吉家ノ前Ａ・Ｃ遺跡・深渡Ａ遺跡の計22遺跡の発掘調査を実施した。平成７(1995)年から発掘調査が実施された現北秋田市(旧森吉町)教育委員会担当分と合わせて、ダム事業区域内の全60遺跡のうち現状保存される９遺跡を除いた計51遺跡について発掘調査がすべて完了した(第１表)。

向様田Ｄ遺跡の発掘調査(第１次)は、平成13年度(2001年５月17日～10月19日)に実施した。調査の結果、遺跡北端に造成された工事用道路下に、遺跡北端部およそ500㎡が係ることが判明した。森吉山ダム工事事務所との調整の結果、平成19年度に当該地点の発掘調査(第２次)を実施することとなった。

第２節　調査要項(※職名等は当時のものである)

遺　跡　名　　向様田Ｄ遺跡(遺跡略号：2MSD－D)
遺跡所在地　　秋田県北秋田市森吉字向様田家ノ下モ14－１外
調査期間　　平成19(2007)年７月２日～10月22日
調査目的　　森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調査面積　　338㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　簗瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　学芸主事)
　　山田祐子(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　文化財主事)
　　武藤祐浩(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課男鹿整理収蔵室　学芸主事兼班長)
総務担当者　　袴田幸樹(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　主査)
調査協力機関　　国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所
　　北秋田市教育委員会
森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議委員
　　岡村道雄(奈良文化財研究所　企画調整部長)
　　高橋保雄(新潟県埋蔵文化財調査事業団　専門調査員)
　　辻　誠一郎(東京大学大学院　教授)
　　藤沼邦彦(弘前大学　教授)
　　山本暉久(昭和女子大学　教授)

註１　無明舎出版編　『秋田県昭和史』　無明舎出版　1989(平成元)年
註２　無明舎出版編　『秋田県近代総合年表』　無明舎出版　1988(昭和63)年
註３　川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年
註４　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第251集　1994(平成６)年
註５　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第259集　1995(平成７)年
　　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年
　　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年
　　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年
　　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

向様田Ｄ遺跡(北緯40°２′27″、東経140°28′30″)は、秋田県北秋田市(旧森吉町)に所在し、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅の南東約5.5㎞、森吉山の北麓を西流する小又川中流部右岸段丘上の向様田地区に位置する。向様田地区には向様田Ｄ遺跡の他に、向様田Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｆ遺跡の５遺跡が隣接して所在している。向様田遺跡群の立地する向様田地区は、森吉山ダム完成時には湛水区域となる。

遺跡の所在する旧森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、旧町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・旧仙北郡田沢湖町(仙北市)、北は旧北秋田郡鷹巣町・合川町(以上北秋田市)・比内町(大館市)、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の旧北秋田郡阿仁町(北秋田市)との境に、町名の由来となった標高1,454ｍのアスピーテ・トロイデ複式火山である森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地を挟んで、北北東に小繋森(標高1,010ｍ)、北に高烏帽子(標高764ｍ)、北西に源五郎岳(標高559ｍ)などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10～11㎞である。これらの山地は分水嶺をなし、行政区分上も旧鷹巣町や旧比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は､旧北秋田郡(北秋田市)・旧仙北郡(仙北市)・鹿角市の境界をなす三ツ又森(標高1,119ｍ)・柴倉岳(標高1,178ｍ)に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。

小又川沿いには集落や耕作地が分布する段丘面が認められ、向様田遺跡群が位置する中流部周辺では六段の段丘面が確認される(註１)。山麓の段丘面縁辺部は、一般に集村形態をとる集落の居住地として利用され、段丘面の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともにほ場整備事業が行われた。向様田遺跡群は小又川右岸の源五郎岳山地が南に張り出した山裾につながる段丘面上にある｡その段丘の最低位に向様田Ｄ遺跡と隣接する向様田Ａ・Ｂ・Ｆ遺跡は立地する。当該段丘面は東西約480ｍ、南北約200ｍにわたって広がり、標高は134～138ｍ前後、小又川との比高は10～15ｍ前後である。段丘南崖下には標高132～133ｍ前後の極めて狭小な段丘面も存在し、向様田Ｃ遺跡が立地する。また、段丘面北側の標高150～159ｍ前後のより高位の段丘面には向様田Ｅ遺跡が立地する。

向様田Ｄ遺跡が立地する最低位の段丘面上には鳥越軽石質火山灰層などのテフラ起源の堆積物は明確ではなく、完新世初頭前後に形成された段丘面の可能性が強い。向様田Ｄ遺跡が立地する最低位の段丘面は、小又川に面する南半側が微高地部となり、北半側は後背低地となっている。南半側微高地部は、大勢として西から東に向かって標高が増し、西から順に、向様田Ｄ遺跡、向様田Ａ遺跡、向様田Ｂ遺跡、向様田Ｆ遺跡が位置している。向様田Ｄ遺跡は当該地域の最も低位部に立地し、その標高は134ｍ前後である。東隣の向様田Ａ遺跡の間には南西方向に開析された埋没谷が存在し、両遺跡の比高は１～２ｍ前後である。また、本遺跡と小又川との比高は15ｍ前後である(註２)。

第２節　歴史的環境

森吉山ダム建設事業においては、ダム建設用地および貯水池用地を中心とした、小又川中流域のおよそ1,200,000㎡が直接的に事業に係わる地域であった。当該地域は、平成３年刊行の『秋田県遺跡地図(県北版)』においては鷲ノ瀬遺跡など２か所、小又川流域全体でも10数か所程度の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が掲載されていたにすぎなかった。(註３) 平成４年以降、秋田県教育委員会が実施した森吉山ダム建設事業に係る分布調査および確認調査により、現在、当該地域内には計60遺跡が確認されている。(註４) 以下では、発掘調査が行われた森吉山ダム建設事業地内の遺跡をとりあげ、住居跡の分布状況を中心に本遺跡周辺の歴史的変遷を概観する。なお、文中(　)内の数字は、第１図および第１表と対応する。

旧石器時代の遺跡には、小又川中流域左岸の標高150～154ｍの緩斜面上に立地する二重鳥Ａ遺跡(９)がある。調査では、２か所の石器集中出土地点が確認され、ナイフ形石器、掻器、石刃、剥片など、あわせて400点あまりの旧石器が出土した。主体をなす石器群は大きくは東山系石器群に位置づけられている。(註５) また、二重鳥Ｂ遺跡(10)やネネム沢Ａ遺跡(21)でも若干量であるが、旧石器時代の遺物が出土している。現時点では、小又川流域における旧石器時代資料は限定されており、当該時代の様相については不明瞭な部分が大きい。

縄文時代においては、現段階では早期になり遺跡が確認される。早期～前期初頭の遺跡として、日廻岱Ｂ遺跡(５)、森吉Ｂ遺跡(28)、桐内Ａ遺跡(33)、姫ケ岱Ｃ遺跡(37)、向様田Ｂ遺跡(47)、地蔵岱遺跡(55)などがある。地蔵岱遺跡で竪穴住居跡１軒、森吉Ｂ遺跡で土坑１基がそれぞれ確認されているほかは、遺物が断片的に出土しているのみである。向様田Ｂ遺跡、地蔵岱遺跡は小又川の最低位段丘面上に立地しており、遅くとも早期～前期初頭までには最低位段丘面は離水し、居住も含めた一定の活動の対象範囲となったものと考えられる。現在の調査結果からは、当該期には大規模な集落は未だ成立せず、小規模集団が断続的に小又川流域で活動したものと想定できよう。

前期中葉～後葉になると複数の遺跡で竪穴住居跡が確認される。前期中葉では深渡遺跡(52)、地蔵岱遺跡(55)で各６軒、二重鳥Ｃ遺跡(11)で３軒、後葉には日廻岱Ｂ遺跡(５)で２軒、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)で１軒の竪穴住居跡が確認されている。さらに、二重鳥Ｂ遺跡(10)では、中葉から後葉にかけてと推定されるいわゆるロングハウス状の大形住居跡が４軒検出されている。この頃から一定規模の集落が出現し、徐々に定住および集住化が進んでいったと考えられる。

中期になると遺跡数がより増加し、それに伴い竪穴住居跡の検出例も増加する。前葉では、桐内沢遺跡(３)で１軒、二重鳥Ｃ遺跡(11)で２軒、漆下遺跡(６)で４軒、二重鳥Ｂ遺跡(10)で５軒の竪穴住居跡が検出されている。前期中葉～後葉と同様に小規模な集落が点在していたと考えられる。中葉になると、桐内Ｃ遺跡(１)、二重鳥Ｄ遺跡(12)、水上ミ遺跡(17)、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)、桐内Ａ遺跡(33)でそれぞれ１軒、二重鳥Ｂ遺跡(10)、二重鳥Ｅ遺跡(13)、二重鳥Ｇ遺跡(15)で各２軒、漆下遺跡(６)で３軒、二重鳥Ｃ遺跡(11)で14軒が検出されおり、前葉に比べ住居数が増加する傾向を認めることができる。後葉には、上ハ岱Ｂ遺跡(８)、二重鳥Ｄ遺跡(12)、二重鳥Ｅ遺跡(13)、橋場岱Ｃ遺跡(41)、橋場岱Ｆ遺跡(44)、向様田Ａ遺跡(46)、向様田Ｄ遺跡(49)、深渡Ａ遺跡(53)、砕渕遺跡(59)でそれぞれ１軒、桐内Ｄ遺跡(２)、二重鳥Ｂ遺跡(10)、水上ミ遺跡(17)、深渡遺跡(52)で各２軒、漆下遺跡(６)、二重鳥Ｃ遺跡(11)、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)で各３軒、上ハ岱Ａ遺跡(７)で４軒、姫ケ岱Ｃ遺跡(37)で５軒、

二重鳥Ａ遺跡（９）で７軒、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)で10軒、二重鳥Ｂ遺跡(10)で13軒の竪穴住居跡が検出されており、中葉よりもさらに住居数が増加する。当該期の住居跡検出遺跡数は21遺跡を数えるが、一般に住居は段丘の縁辺に散発的に立地する傾向がある。これに対し、二重鳥Ｂ遺跡では全体で13軒の住居が台地縁辺部に環状に巡る環状集落の様相を呈し、注目される。

なお、中期後葉の住居跡は複式炉を伴う竪穴住居が特徴的であるが、このうち、深渡遺跡および隣接する深渡Ａ遺跡では、竪穴壁際に礫が巡る住居跡が各１軒存在する。住居廃絶時に複式炉を組み替え、さらに壁際に礫を巡らして竪穴を埋め戻している。埋め戻し時には壁際の礫の上半は地表面に露出しており、環状もしくは弧状の配石遺構と評価することができる。住居に伴う炉と係わる屋内祭祀が住居外の配石遺構と係わる屋外祭祀へと変質する過渡期の様相を示している可能性があろう。なお、橋場岱Ｂ遺跡(40)では、詳細な時期は特定できないが、本時期前後に属する例が比較的多い溝状平面の陥し穴が４基検出されている。森吉山ダム建設事業地内では唯一の検出例であり、本地域内では陥し穴猟は盛行しなかった可能性が高い。本地域の動物相とその狩猟法を検討する上で注意すべきであろう。

後期初頭には、桐内Ｃ遺跡（１）、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)、深渡遺跡(52)でそれぞれ１軒、姫ヶ岱Ｃ遺跡(37)で２軒、漆下遺跡（６）で５軒が検出されており、これらの遺跡の竪穴住居跡分布状況は基本的に前時期の一般的な分布状況と共通するものと考えられる。これに対し、日廻岱Ｂ遺跡（５）では、長軸約60ｍの空閑地の周囲に50軒前後の住居が環状もしくは「い」の字形に立地する。中央の空閑地には土坑等の規則的かつ集中的な分布は認められないが、中央広場の周囲に住居が集中的・累積的に巡り、前時期の二重鳥Ｂ遺跡と同じく、環状集落の一形態と評価できる。日廻岱Ｂ遺跡で環状集落が形成された時期には、約600ｍ上流の漆下遺跡で上述した数軒の竪穴住居が営まれるとともに、多数の土坑墓や配石遺構が造営され始める可能性がある。この時期には、集団の集住化と呼応するように、墓域や祭祀域を居住域とは別地点に設けるものと想定される。これ以降、墓域や祭祀域として関連する諸施設を特定の地点に集約することが遺跡構造の大きな特徴となる。

後期前葉～中葉になると、竪穴住居跡の検出例は激減する。前葉では二重鳥Ｃ遺跡(11)で１軒、桐内Ｃ遺跡（１）で３軒、中葉では漆下遺跡（６）で４軒、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)、向様田Ｄ遺跡(49)で各１軒検出されているのみである。後葉には再び竪穴住居跡の検出数が増え、二重鳥Ｄ遺跡(12)で12軒、二重鳥Ｅ遺跡(13)、二重鳥Ｈ遺跡(16)で各６軒、二重鳥Ａ遺跡（９）、桐内Ａ遺跡(33)で各５軒、橋場岱Ａ遺跡(39)で２軒、二重鳥Ｂ遺跡(10)、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)、橋場岱Ｃ遺跡(41)で各１軒が検出されている。これに対し、漆下遺跡では、後期前葉から中葉前後の多数の配石遺構のほか、70棟以上の掘立柱建物跡が分布するとともに、大量の遺物が出土している。竪穴住居跡の分布状況からは、後期前葉から後葉には小規模な集落が点在し、初頭における日廻岱Ｂ遺跡のような大規模な環状集落は継続しない。その一方で、漆下遺跡では、竪穴住居数は限られるものの、大量の遺物が出土しており、多数の掘立柱建物跡が居住施設であった可能性も想定し得る。ただし、併存する竪穴住居との関係など検討すべき問題も多く、該期の集落の様相に実態は必ずしも明確ではない。このほか、二重鳥Ｂ遺跡では、後期後葉の土製耳飾りが200点近くも出土しており、当該期の装飾品の製作と流通を考える上で注目される。

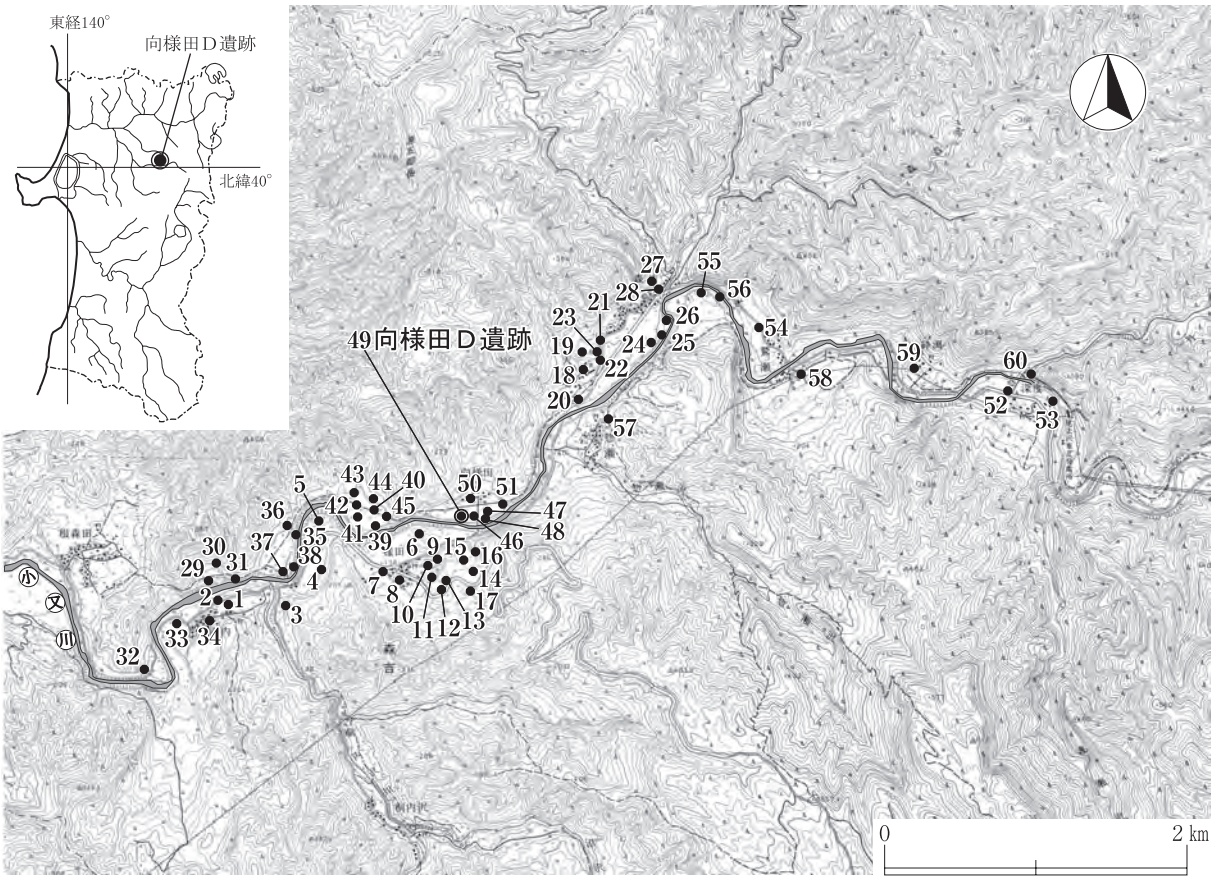
後期末から晩期になると、竪穴住居跡の検出例は減少する。後期末～晩期前葉では、日廻岱Ｂ遺跡

（５）、橋場岱Ｆ遺跡(44)、深渡遺跡(52)で各１軒、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)、向様田Ｆ遺跡(51)で各２軒、二重鳥Ｅ遺跡(13)で３軒確認されている。晩期後葉では二重鳥Ａ遺跡（９）で３軒、水上ミ遺跡(17)で２軒、上ハ岱Ｂ遺跡（８）、二重鳥Ｅ遺跡(13)で１軒検出されているのみである。一方、向様田Ａ遺跡(46)や向様田Ｄ遺跡(49)などから成る向様田遺跡群では晩期前葉から中葉にかけての大規模な配石遺構や盛土あるいは捨て場が形成され、多様かつ活発な祭祀活動等が行われたものと推定される。この時期に掘立柱形式の平地住居が一般化した痕跡は認め難く、現状の竪穴住居跡の確認状況が当時の実態をほぼ反映するものと考えられる。これらのことから、当該時期においては、小又川流域では１軒もしくは２軒程度の竪穴住居居住集団が小又川流域内に通常はそれぞれ分散居住し、特定時期に向様田遺跡群に集まり、盛んに祭祀活動等を行ったものと想定される。

弥生時代では住居は未確認であり、集落の実態は不明である。二重鳥Ｆ遺跡(14)でフラスコ状土坑４基、土坑１基、桐内Ａ遺跡(33)、日廻岱Ｂ遺跡（５）、橋場岱Ｂ遺跡(40)などで遺物が検出されている。これらの遺跡は縄文時代の遺跡と重複しており、その立地は縄文時代と顕著な違いを認めることはできない。水稲耕作の有無をはじめ、当該時代の生業活動等の詳細は不明瞭である。

古墳時代もしくはそれに併行する時代に属する遺跡は、小又川流域では確認できず、以前に存在した集落等は断絶したものと考えられる。小又川流域に再び集落が形成されるのは、古代以降のことである。

古代では、向様田Ｅ遺跡(50)で古代の竪穴住居跡３軒が検出されており、小規模な防御性集落が形



第１図　遺跡位置および周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺　跡　名	遺跡所在地(北秋田市)	主な時代	主　な　遺　構・遺　物	文　献
1	桐内Ｃ	森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、石囲炉、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、トランシェ様石器	13
2	桐内Ｄ	森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、土器埋設焼土遺構、柱穴様ピット、溝跡	15
3	桐内沢	森吉字桐内沢関下タ103	縄文	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、フラスコ状土坑、竪穴状遺構、石器	18
4	日廻岱Ａ	森吉字日廻岱65外	縄文･近世	縄文土器(前期～晩期)、土坑、焼土遺構、掘立柱建物跡(近世)、溝跡、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、陶磁器、銭貨、砥石	3・18
5	日廻岱Ｂ	森吉字日廻岱86外	縄文･近世	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、竪穴状遺構、配石遺構、土器埋設炉、焼土遺構、土器埋設遺構、柱穴様ピット、土坑、掘立柱建物跡(近世)、石器、土製品、石製品、陶磁器	31
6	漆下	森吉字漆下2-1外	縄文･中世	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、配石遺構、焼土遺構、竪穴状遺構(中世)、掘立柱建物跡(縄文･近世)、捨て場、フラスコ状土坑、土器埋設炉、石積み階段状道路、陥し穴、柱列、柱穴様ピット、土坑、石組炉(中世)、溝跡、土製品、石器、石製品	19・25・37
7	上ハ岱Ａ	森吉字上ハ岱102外	縄文･弥生	縄文土器(中期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑(縄文･弥生)、土坑、石器	16
8	上ハ岱Ｂ	森吉字上ハ岱70外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ土坑、捨て場	16
9	二重鳥Ａ	森吉字二重鳥31-1外	旧石器･縄文	旧石器、縄文土器(前期･後期･晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器	35
10	二重鳥Ｂ	森吉字二重鳥11外	旧石器･縄文	旧石器、縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設遺構、配石遺構、焼土遺構、捨て場、石器	28・43
11	二重鳥Ｃ	森吉字二重鳥93外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設炉、土器埋設遺構、焼土遺構、配石遺構、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、土偶	26・28
12	二重鳥Ｄ	森吉字二重鳥39	縄文	縄文土器(中期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、石器、土製品、石製品	20
13	二重鳥Ｅ	森吉字二重鳥65外	縄文･弥生	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、石器、土製品、石製品、弥生土器	20
14	二重鳥Ｆ	森吉字二重鳥124-1外	縄文･弥生	縄文土器(前期･後期)、土坑(縄文･弥生)、フラスコ状土坑(弥生)、石器、弥生土器	20
15	二重鳥Ｇ	森吉字二重鳥80外	縄文･近世	縄文土器(早期･中期･晩期)、竪穴住居跡、掘立柱建物跡(縄文･近世)、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、石器、銭貨、煙管	26
16	二重鳥Ｈ	森吉字二重鳥6外	縄文	縄文土器(晩期)、土坑、石器	28
17	水上ミ	森吉字水上ミ42-1外	縄文･弥生	縄文土器(中期･晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器、弥生土器	16
18	天津場Ａ	森吉字天津場15-3	縄文･古代	縄文土器(後期)、竪穴住居跡(古代)、土坑、石器	2
19	天津場Ｂ	森吉字天津場16-1	縄文	縄文土器(後期)、竪穴住居跡、石囲炉、土坑、石器	2
20	天津場Ｃ	森吉字天津場87-1外	縄文	縄文土器(中期･後期)、土坑、石器	5
21	ネネム沢Ａ	森吉字ネネム沢26外	旧石器･縄文･古代	旧石器、縄文土器(後期)、土器(古代)、竪穴住居跡、焼土遺構、土坑	2
22	ネネム沢Ｂ	森吉字ネネム沢17外	縄文	縄文土器(後期)、焼土遺構、石器	2
23	ネネム沢Ｃ	森吉字ネネム沢6-1	縄文	縄文土器(晩期)、土坑	2
24	森吉家ノ前Ａ	森吉字森吉家ノ前50外	縄文･古代･中世	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、竪穴状遺構、土坑、溝跡(中世)、掘立柱建物跡(中世)、柱穴様ピット、石器、土師器、須恵器、陶磁器(中世)、銭貨(中世)、羽口	34・40
25	森吉家ノ前Ｂ	森吉字森吉家ノ前138外	縄文･中世	縄文土器(後期)、竪穴住居跡(中世)、土坑、焼土遺構、配石遺構、石器、石冠、木器、陶器、鉄器	5
26	森吉家ノ前Ｃ	森吉字森吉家ノ前101-1外	中世･近世	縄文土器、掘立柱建物跡(中世･近世)、竪穴状遺構、炉跡、石器、陶磁器(中世･近世)	30
27	森吉Ａ	森吉字森吉95	縄文	縄文土器(後期)、土坑、石組、火葬墓、石器	2
28	森吉Ｂ	森吉字森吉69	縄文	縄文土器(後期)、石器	35
29	上悪戸Ａ	根森田字上悪戸4-1外	縄文	縄文土器(中期･後期)、土坑、焼土跡、炭化物、石器	8
30	上悪戸Ｂ	根森田字上悪戸8-12	弥生	弥生土器、土坑、石器	12
31	上悪戸Ｃ	根森田字上悪戸7外	縄文	縄文土器(前期･後期･晩期)、土坑、石器	12
32	上悪戸Ｄ	根森田字上悪戸34-33外	縄文	縄文土器(中期～晩期)、土坑、石囲炉、埋甕、石器、土製品	6
33	桐内Ａ	森吉字桐内前田5-1外	縄文	縄文土器(早期･中期～晩期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、フラスコ状土坑、土坑、溝跡、配石遺構、窯跡、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、弥生土器、陶磁器	17
34	桐内Ｂ	森吉字家ノ下16外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、土器埋設遺構、石器	15
35	姫ヶ岱Ａ	根森田字姫ヶ岱8外	縄文	縄文土器(前期～後期)、土坑、配石遺構、石器	12
36	姫ヶ岱Ｂ	根森田字姫ヶ岱14-10外	縄文	縄文土器(前期･中期)、土坑、柱穴様ピット、石器	12
37	姫ヶ岱Ｃ	根森田字姫ヶ岱12-2外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、石囲炉、焼土遺構、土製品、石器、トランシェ様石器	10・12
38	姫ヶ岱Ｄ	根森田字姫ヶ岱12-31外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、配石遺構、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、石器	14
39	橋場岱Ａ	森吉字橋場岱48外	縄文	縄文土器(中期･後期)、竪穴住居跡、土坑、配石遺構、焼土遺構、石器	38
40	橋場岱Ｂ	森吉字橋場岱69外	縄文･弥生･古代	縄文土器(後期･晩期)、フラスコ状土坑、土坑、配石遺構、陥し穴、溝跡、掘立柱建物跡(古代)、焼土遺構(古代)、木組み遺構(古代)、弥生土器、石器	41
41	橋場岱Ｃ	森吉字橋場岱42外	縄文	縄文土器(後期･晩期)、竪穴住居跡、配石遺構、土坑、溝跡、石器	38
42	橋場岱Ｄ	森吉字橋場岱110-1	縄文	縄文土器(晩期)、竪穴住居跡、配石遺構、土坑、溝跡、石器	36
43	橋場岱Ｅ	森吉字橋場岱109	縄文	縄文土器、竪穴住居跡、竪穴状遺構、配石遺構、土坑、石器	36
44	橋場岱Ｆ	森吉字橋場岱101外	縄文	縄文土器(晩期)、土坑、石器	36
45	橋場岱Ｇ	森吉字橋場岱6-1外	縄文	縄文土器(後期)、石器	38
46	向様田Ａ	森吉字向様田家ノ下モ8外	縄文	縄文土器(晩期)、土坑、土坑墓、配石墓、環状配石遺構、配石遺構、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、竪穴住居跡、捨て場、石器、土製品、石製品	21・27・42
47	向様田Ｂ	森吉字向様田家ノ下モ67-1外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、土坑、配石遺構、石器、土製品	22
48	向様田Ｃ	森吉字向様田家ノ下モ76外	縄文	縄文土器(後期･晩期)、土坑、配石遺構、石器、土製品、石製品	22
49	**向様田Ｄ**	森吉字向様田家ノ下モ14-1外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、配石遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、盛土、捨て場、石器、土製品、石製品	29・本書
50	向様田Ｅ	森吉字向様田家ノ下モ36外	縄文･古代･中世	縄文土器(早期･前期･後期･晩期)、竪穴住居跡(縄文･古代)、掘立柱建物跡(中世)、土坑(縄文･古代)、土器埋設遺構、焼土遺構、溝跡(古代)、炉(中世)、柱列(中世)、石器、土師器、須恵器、鉄製品	22
51	向様田Ｆ	森吉字向様田家ノ下モ57外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、柱穴様ピット、溝跡、石器	23
52	深渡	森吉字深渡家ノ前104-1外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡(古代以降)、フラスコ状土坑、土坑、焼土遺構、配石遺構、溝状遺構、柱穴様ピット、石棺様組石、石器	5・9・32
53	深渡Ａ	森吉字深渡29外	縄文･近世	縄文土器(中期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器、トランシェ様石器、掘立柱建物跡(近世)、陶磁器(近世)	33
54	鷲ノ瀬	森吉字鷲ノ瀬80外	縄文	縄文土器(後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、土坑、フラスコ状土坑、貝風呂、石器	7・11
55	地蔵岱	森吉字地蔵岱74外	縄文･古代･中世	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡(縄文･古代･中世)、竪穴状遺構(古代･中世)、掘立柱建物跡(古代･中世)、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、溝跡、捨て場、製鉄関連遺構、炭窯、水場遺構、石器、土製品、石製品、土師器、須恵器、羽口、木製品,鉄滓	5・39
56	地蔵岱Ａ	森吉字地蔵岱124外	縄文	縄文土器(中期･後期)、焼土遺構、土坑	36
57	惣瀬	森吉字惣瀬86外	縄文･古代	縄文土器(後期)、竪穴住居跡(古代)、土坑、石器	7
58	栩岱	森吉字栩岱74外	縄文	縄文土器(後期･晩期)	1
59	砕渕	森吉字砕渕124外	縄文	縄文土器(中期･後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、掘立柱建物跡、土坑、フラスコ状土坑、土製品(縄文･近世)、石器、石製品、陶器(近世)	3・24
60	丹瀬口	森吉字丹瀬2-1外	縄文	縄文土器(後期)	1

成されていた可能性が報告されている。また、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)でも竪穴住居跡が１軒確認されている。天津場Ａ遺跡(18)、ネネム沢Ａ遺跡(21)、橋場岱Ｂ遺跡(40)、惣瀬遺跡(57)で古代の遺構・遺物が確認されている。古代後半には、地蔵岱遺跡(55)に大規模な集落が出現する。多数の竪穴住居や製鉄関連遺構が分布するほか、総延長200m以上に及ぶ環壕を巡らすなど、小又川流域における拠点的な中心集落であったととらえることができる。

中世では、地蔵岱遺跡(55)、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)、森吉家ノ前Ｂ遺跡(25)、森吉家ノ前Ｃ遺跡(26)で集落が営まれている。地蔵岱遺跡は、古代後半から中世まで基本的に継続して営まれたと考えられる。多数の建物跡や火葬墓、荒型を含む多量の木製品が出土した水場遺構などが分布するほか、中世後半には幅２ｍの大溝で集落を区画するなど、引き続き拠点的な中心集落であったと考えられる。一方、地蔵岱遺跡の対岸に位置する森吉家ノ前Ａ遺跡でも多くの掘立柱建物跡が確認され、大規模な集落が営まれている。ここでも集落を区画すると考えられる堀状の大溝跡も検出されており、両遺跡の推定継続年代を勘案すると、地蔵岱遺跡から対岸の森吉家ノ前Ａ遺跡へ当時の中心集落が移動した可能性も想定される。

近世の遺跡では、日廻岱Ｂ遺跡(５)で掘立柱建物跡７棟、地蔵岱遺跡(55)、日廻岱Ａ遺跡(４)で掘立柱建物跡各２棟、森吉Ｂ遺跡(35)、地蔵岱Ａ遺跡(56)で掘立柱建物跡各１棟がそれぞれ検出されている。菅江真澄による紀行文をはじめとした当時の史料との対比を通じて、近世の集落の実態を検討し得る資料となっている。(註６)

註１　川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年

註２　本節全般にわたり註１文献を参考にした。

註３　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　1991(平成３)年

註４　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第259集　1995(平成７)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

註５　二重鳥Ａ遺跡での旧石器出土層準は、主として米代川水系での段丘対比を根拠として十和田八戸火砕流(鳥越軽石質火山灰)起源の泥流堆積層と推定されている。一方、小又川対岸の下位から２段目の段丘面上に立地する向様田Ｅ遺跡(標高145～159ｍ)でのテフラ分析では、やはり米代川水系の段丘対比と火山ガラス屈折率とを根拠として、向様田Ｅ遺跡が立地する段丘構成層が十和田八戸火砕流堆積物に由来するものと推定している。しかしながら、これらの推定と二重鳥Ａ遺跡での旧石器出土状況は、十和田八戸火砕流の下位が神子柴長者久保系文化の層準とする所見とは整合的ではない。二重鳥Ａ遺跡旧石器出土層とその下位層の重鉱物組成分析では、十和田八戸火砕流に相当量含まれるとされる角閃石はほとんどの試料で微量(３％未満)であり、試料によっては認められないものもある。また、向様田Ｅ遺跡採取試料の火山ガラス屈折率は、十和田八戸火砕流の火山ガラス屈折率とともに、十和田大不動火砕流のそれとも比較的近似する。これらの遺跡の基盤層は、十和田大不動火砕流などのより古い時期のテフラとも関連し、小又川流域では、地点によっては、十和田八戸火砕流よりも古期の火砕流起源の堆積物により離水するなど、段丘面を被覆する火砕流起源堆積物が異なる可能性なども想定すべきであろうか。今後、二重鳥Ａ遺跡の旧石器出土層準の位置づけについては、当該石器群の型式評価、小又川流域の段丘区分とその形成過程などもあわせて再検討する必要があろう。

パリノ・サーヴェイ株式会社　「第３章　第２節　二重鳥Ａ遺跡の層序と出土石器の年代」　北秋田市教育委員会　『森吉Ｂ遺跡　二重鳥Ａ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第２集　2006(平成18)年

パリノ・サーヴェイ株式会社　「第３章　第１節　テフラ分析」　秋田県教育委員会　『向様田Ｂ遺跡・向様田Ｃ遺跡・向様田Ｅ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第347集　2003(平成15)年

註６　本節は下記の第１表文献39の「第２章　第２節　遺跡の歴史的環境」をもとに、平成19・20年度に刊行された発掘調査報告書等により一部加筆し作成した。

第１表文献

1　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第251集　1994(平成６)年

2　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年

3　森吉町教育委員会　『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1996(平成８)年

4　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

5　森吉町教育委員会　『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1997(平成９)年

6　森吉町教育委員会　『上悪戸Ｄ遺跡発掘調査報告書　～比内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』　1997(平成９)年

7　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

8　森吉町教育委員会　『平成９年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』　1998(平成10)年

9　秋田県教育委員会　『深渡遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』　秋田県文化財調査報告書第286集　1999(平成11)年

10　秋田県教育委員会　『姫ケ岱Ｃ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』　秋田県文化財調査報告書第287集　1999(平成11)年

11　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

12　森吉町教育委員会　『平成10年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ｂ・Ｃ遺跡　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1999(平成11)年

13　秋田県教育委員会　『桐内Ｃ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第299集　2000(平成12)年

14　秋田県教育委員会　『姫ケ岱Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　秋田県文化財調査報告書第300集　2000(平成12)年

15　秋田県教育委員会　『桐内Ｂ遺跡・桐内Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』　秋田県文化財調査報告書第318集　2001(平成13)年

16　森吉町教育委員会　『平成10・11年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～　上ハ岱Ａ遺跡・上ハ岱Ｂ遺跡・水上ミ遺跡』　2001(平成13)年

17　秋田県教育委員会　『桐内Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　秋田県文化財調査報告書第334集　2002(平成14)年

18　秋田県教育委員会　『桐内沢遺跡・日廻岱Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』　秋田県文化財調査報告書第335集　2002(平成14)年

19　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　20　平成13年度』　2002(平成14)年

20　森吉町教育委員会　『平成12年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｄ・Ｅ・Ｆ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　2002(平成14)年
21　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡　遺構篇　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』　秋田県文化財調査報告書第346集　2003(平成15)年
22　秋田県教育委員会　『向様田Ｂ遺跡・向様田Ｃ遺跡・向様田Ｅ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第347集　2003(平成15)年
23　秋田県教育委員会　『向様田Ｆ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－』　秋田県文化財調査報告書第348集　2003(平成15)年
24　秋田県教育委員会　『砕渕遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XI －』　秋田県文化財調査報告書第349集　2003(平成15)年
25　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　21　平成14年度』　2003(平成15)年
26　森吉町教育委員会　『平成13年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～　二重鳥Ｃ・Ｇ遺跡』　2003(平成15)年
27　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡　遺物篇　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XII－』　秋田県文化財調査報告書第370集　2004(平成16)年
28　森吉町教育委員会　『二重鳥Ｂ・Ｃ・Ｈ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　2004(平成16)年
29　秋田県教育委員会　『向様田Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIII－』　秋田県文化財調査報告書第392集　2005(平成17)年
30　秋田県教育委員会　『森吉家ノ前Ｃ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV－』　秋田県文化財調査報告書第393集　2005(平成17)年
31　秋田県教育委員会　『日廻岱Ｂ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XV－』　秋田県文化財調査報告書第394集　2005(平成17)年
32　秋田県教育委員会　『深渡遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI－』　秋田県文化財調査報告書第407集　2006(平成18)年
33　秋田県教育委員会　『深渡Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII－』　秋田県文化財調査報告書第408集　2006(平成18)年
34　秋田県教育委員会　『森吉家ノ前Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVIII－』　秋田県文化財調査報告書第409集　2006(平成18)年
35　北秋田市教育委員会　『森吉Ｂ遺跡　二重鳥Ａ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第２集　2006(平成18)年
36　北秋田市教育委員会『地蔵岱Ａ遺跡　橋場岱Ｄ・Ｅ・Ｆ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第３集　2006(平成18)年
37　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　25　平成18年度』　2007(平成19)年
38　北秋田市教育委員会　『橋場岱Ａ・Ｃ・Ｇ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第５集　2007(平成19)年
39　秋田県教育委員会　『地蔵岱遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIX－』　秋田県文化財調査報告書第434集　2008(平成20)年
40　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　26　平成19年度』　2008(平成20)年
41　北秋田市教育委員会　『橋場岱Ｂ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第７集　2008(平成20)年

42　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸ－』　秋田県文化財調査報告書第445集　2009(平成21)年
43　北秋田市教育委員会　『二重鳥Ｂ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第11集　2009(平成21)年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

向様田Ｄ遺跡は、森吉山の北麓を西に流れる米代川の支流小又川右岸の標高134ｍ前後の最低位の段丘上に立地する。小又川との比高は約15ｍあり、段丘崖となっている。標高134～138ｍの同一段丘上には東から向様田Ｆ遺跡、向様田Ｂ遺跡、向様田Ａ遺跡があり、東側から西に向かって緩やかに傾斜している。向様田Ｄ遺跡はその西端に位置する。この段丘はかつては水田として利用されていた。また、南東側の崖下には、標高132～133ｍ前後の極めて狭小な段丘面があり、向様田Ｃ遺跡が立地する。北側の標高145～159ｍの高位の段丘上には向様田Ｅ遺跡がある。

向様田地区は平成８年度に秋田県教育委員会が対象面積63,934㎡の確認調査(註１)を実施し、上記の６遺跡が確認された。そのうち、2,800㎡が向様田Ｄ遺跡の範囲とされた。本遺跡は、平成13年度に2,600㎡の調査を実施した(註２)。調査の結果、縄文時代中期および後期の竪穴住居跡各１軒、晩期中頃の捨て場１か所、晩期前半の盛土１か所などが見つかった。特に盛土からは約20万点の土器破片や２万点余りの石器など、大量の遺物が出土した。この調査によって、北側の工事用道路下には、遺跡北端部およそ500㎡が係ることが判明した。当該地点については、第１章第１節で記述したように森吉山ダム工事事務所との調整により、今年度の発掘調査となった。

第２節　調査の方法

１　野外調査

調査はグリッド法で行った。向様田遺跡群全域は平成12年度に共通のグリッド(基準原点MA50は日本測地系平面直角座標第Ｘ系のＸ＝4,316.000、Ｙ＝－30,145.000)が設定され、平成13年度の向様田Ｄ遺跡のグリッドもそれに基づいて設定されている。本調査では、国土交通省が打設した４級基準点№45と№46から、この基準原点(MA50)を通る日本測地系平面直角座標第Ｘ系Ｘ軸(南北線)およびＹ軸(東西線)に沿った４ｍ×４ｍ方眼を調査区内に組み、その交点に方眼杭を打設した。基準原点MA50から東西方向には、Ｙ軸上西に４ｍ進む毎にMB・MC・MD・・・・と昇順に、東に４ｍ進む毎にLT・LS・LR・・・・と降順に各々Ａ～Ｔまでのアルファベット２文字の組み合わせを付した。南北方向には、Ｘ軸を北に４ｍ進む毎に51・52・53・・・・、南に４ｍ進む毎に49・48・47・・・・と増減するアラビア数字を付してある。各区の呼称は、南東隅の杭を通るＸ軸とＹ軸の組み合わせで、MA50・MB51・MC52・・・・のように呼ぶこととした。調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的な位置の把握に努めた。さらに４ｍ四方の各区は２ｍ四方の小区に４分割することとし、南東側小区にa、南西側小区にb、北東側小区にc、北西側小区にdの枝番を付けた。

遺構は、平成13年度調査と番号が重複しないように検出順に101からの通し番号を付して遺構種別を表す記号と組み合わせて呼称した。平成13年度調査で検出され、今年度調査区にも残存するSM60(盛

第２図　向様田Ｄ遺跡周辺図

土)は前回と同一番号とした。また、最終的に遺構でないと判断したものについては欠番とした。遺構の掘削は、原則として半截または十字に畦を残し、２分割法、４分割法による精査を行った。

作図は、平面図および土層断面図は、原則として20分の１の縮尺で作成した。遺物の取り上げについては、基本的に遺構外遺物には出土区・層位・出土年月日を、遺構内遺物には出土遺構名・遺構内層位・出土年月日をラベルに記入し、それぞれポリ袋に入れて取り上げた。なおSM60(盛土)では、完形土器など特徴的な遺物について、トータル・ステーションで出土位置の計測を行った。

発掘調査時の写真撮影は、遺構の検出状況・断ち割り状況・完掘状況の順で撮影し、適宜、遺物の出土状況、遺構細部の拡大撮影などを加えた。また、広範囲の撮影、俯瞰状況での撮影にはローリング・タワーを使用した。写真撮影は、基本的に35㎜判を使用し、フィルムはモノクロとカラーリバーサルを併用し、デジタルカメラでの撮影も行った。

２　室内整理

整理作業は平成19年度は埋蔵文化財センター北調査課で、平成20年度、平成21年度は埋蔵文化財センター中央調査班で実施した。但し、遺物の洗浄・注記の一部は平成19年度に埋蔵文化財センター南調査課および中央調査課男鹿整理収蔵室で実施した。各年度の担当者は以下の通りである。

平成19年度

整理担当：簗瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　学芸主事)

武藤祐浩(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課男鹿整理収蔵室　学芸主事兼班長)

総務担当：袴田幸樹(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　主査)

平成20年度

整理担当：榮　一郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　副主幹)

簗瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事)

総務担当：時田慎一(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　主任専門員)

平成21年度

整理担当：榮　一郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　副主幹)

簗瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事)

総務担当：時田慎一(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　主任専門員)

各遺構は、現場で作成した図を第１原図とし、これを基に平面図と断面図の組み合わせた図を第２原図とした。第２原図をスキャニングし、アドビシステムズ社「Photoshop」・アドビシステムズ社「Illustrator」を使用し、トレース・レイアウトまでの作業を行った。

遺物は、洗浄・注記後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に１／１で実測図を作成し、報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示している。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

また、実測・トレース(平成20年度)および写真撮影(平成21年度)の一部は、例言に記した機関に委託した。

第３節　調査の経過

調査区の本調査に先立ち、６月４日よりバックホー、キャリアダンプによる工事用道路路盤等掘削除去、その後掘削法面をシートで養生したが、21日、崩落が発生し、６月22～29日まで崩落土の除去、法面と法面周辺の補強等を実施する。発掘調査は、当初、平成19年７月２日～９月26日までの予定であったが、大雨とその被害による調査中止や当初予想を上回る遺物が出土したことから、平成19年10月22日まで延長した。各週ごとの調査経過については、以下のとおりである。

【第１週】７月２日～７月６日

調査員２名、作業員15名の体制で発掘調査を開始する。平成13年度に調査したSM60盛土の東西畦の精査と全体の現況を写真撮影。看板設置などの環境整備。調査区北側に排水溝を兼ねた東西トレンチを掘削。SM60の範囲確認を目的として、調査区上面の掘削を開始。２日、小林課長・森吉山ダム工事事務所笹木専門職による法面養生状況の確認。電話配線工事。トータルステーションの搬入。２・３日、ダイワ技術による方眼杭設置。５日、雨のため、午後作業を中止、作業員を帰す。

【第２週】７月９日～７月13日

調査区と仮排土置き場間に橋を架けるなど、発掘調査にかかわる環境整備を行う。調査区北側に排水溝を兼ねた東西トレンチの掘削を継続。SM60の範囲確認のため、調査区上面の掘削を継続。当初盛土の中心と予想される区画から移植ベラ等で２ｍ四方小区ごとに掘り下げていたが、平成13年調査の東西畦のSM60土層断面を参考にし、東西の畦側（調査区南端）からSM60上面までスコップ等で掘り下げることに修正し、作業の効率化に努めた。北側法面の３か所からの湧水は依然あるが、新たな崩落やひび割れは見られない。法面付近の作業は、調査員が法面の状況に注意をしながら進めた。９日、榮班長、現地調査指導。10日、ダイワ技術、水準測量・方眼杭打設の成果品納入。12日、小林課長、現地調査指導。12日、熊谷所長から電話で調査現場の安全管理に関する指示を受ける。

【第３週】７月17日～７月20日

バックホーとキャリアダンプにより仮の排土置き場から排土を移動整地。調査区北側に掘削した東西トレンチの写真撮影と土層図作成。調査区上面の水田造成土の掘削を継続。NR40区で、石剣が出土。非常に脆く、折損しているが、完形に復元でき、長さは約64㎝。北側法面の状況について、新たな崩落やひび割れは見られなかった。17日、重機による排土移動整地。19日、小林課長引率により、鷹巣南小学校から６年生21名来跡。発掘体験を行う。児童は事前に見せた遺物に熱心に見入り、発掘体験にも非常に熱中して取り組む。同伴の保護者にも好評。

【第４週】７月23日～７月27日

調査区上面の水田造成土の掘削を継続。調査区北側に掘削した東西トレンチの写真撮影と土層図作成。調査区の土層を再確認するため、以下の４か所にトレンチを設定し、掘削、写真撮影と土層図作成。南北方向は西側と東側の法面下、SM60の範囲外と思われる中央部。東西方向は平成13年調査の東西畦の東側延長部。調査区が段丘崖下にあるため、南端の平成13年調査東西畦の土層と北端付近の土層は予想以上に違いがあり、見極めを急ぎながら掘削作業を進める。23日、榮班長現地調査指導。25日、小林課長現地調査指導。26日、追加分のコンテナハウス・トイレの搬入、設置。

【第５週】７月30日～８月３日

ＳM60の確認写真を撮影、上面の地形を実測した後、平成13年調査の南北畦の延長ラインなど複数の畦を設け、先行して土層を確認するため畦付近から優先的に掘り下げを行う。特徴的な遺物については、写真撮影と出土地点を計測して取りあげる。SM60から、縄文時代晩期の石剣や土偶などが多量に出土。30日の朝、北側法面が部分的に崩落しているのを

発見、被害は小さく、調査に支障はなかった。被害状況を北調査課の榮班長に連絡し、引き続き調査員が注意をしながら調査を進めた。SM60の掘り下げを開始、土層が複雑で遺物の層位的な取り上げが難航。31日、小林課長現地調査指導。重機による排土移動。８月３日、熊谷所長、櫻田副所長、小林課長、現地調査視察。

【第６週】８月６日～８月10日

SM60の掘り下げを継続。平成13年度調査を参考に複数設定した畦付近を先行して掘り下げ、SM60の土層確認を急ぐ。８日午後と９日は激しい雨のため、遺物の洗浄を行う。夏期休暇を含む９日間の長期の現場休止に備え、調査区やヤード内の養生を行う。SM60から引き続き縄文時代晩期の勾玉、土偶、岩版などの遺物が多量に出土。６日の朝、北側法面下のトレンチの壁が部分的に崩落しているのを発見、被害状況を北調査課に連絡し、法面付近の調査を見合わせてしばらく様子を見た。午後から崩落したトレンチの壁面にシートを貼り、今後の降雨に対する処置を行う。SM60の土層が複雑で遺物の層位的な取り上げが難航。先行トレンチの土層を確認し、効率的に遺物を取り上げていくこととする。トータルステーションでの遺物の取り上げは、儀式道具的な石剣、石皿、岩版、土偶などや完形に近く復元できる土器に厳選。７日、大野文化財保護室長、菊池主任学芸主事、小林北調査課長、現地調査視察。８日から山田病休。10日、小林課長、現地調査指導。

【第７週】８月20日～８月22日

断続的に続く雨のため、調査区での作業箇所が限られ、作業員２名は主に遺物の洗浄。SM60の掘り下げを継続。土層畦付近を先行して掘り下げ、特に南北トレンチでのSM60の土層確認を急ぐ。一部で全体的な掘り下げも実施。SM60から緑色の約７～20㎜の小玉約50個（うち８個には製作過程の穿孔の跡がある）が半径15㎝以内に集中して出土。土坑のプランは確認できないが、周囲にはミニチュア土器などもある。完形に近い遺物の量が多く、写真やトータルステーションでの記録に時間がかかる。デジカメ写真のみでの記録を増やすこととする。20・22日、小林課長、現地調査指導。23日、職員技術研修会、24日、北調査課職員会のため両日現場休み。

【第８週】８月27日～８月31日

SM60の掘り下げを継続。土層確認用の南北・東西畦を残して全面を掘り下げ。トレンチの断面観察からSM60の広がりは約160㎡。南北・東西畦の断面記録を継続。SM60のＦ・Ｇ区の掘り下げを終え、礫群の平面分布図を作成。９月１日の現地説明会に備え、見学コースの環境整備実施。SM60から多量の土器・石器類とともに焼土塊と赤色顔料の撒布跡を隣接地で確認。SM60下で直径約1.4ｍの土坑、土層確認用の畦で数基の柱穴様ピットを確認。SM60下の精査は水の染み出しがあり、遺構の有無を慎重に確認。検討会議で指摘を受けて、平面や断面の観察等から、盛土形成（捨て方）の時間的変遷が少しでも明らかになるように調査を心がける。27日、小林課長、現地調査指導。30日、発掘調査検討会議の岡村委員長、藤沼委員、辻委員、榮班長、現地指導。31日、熊谷所長、櫻田副所長、小林課長、現地調査視察。31日、榮班長現地調査指導。簗瀬、午前、北秋田市中央公民館での森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議出席。27～30日、武藤男鹿整理収蔵室班長、調査参加。

【第９週】９月１日～９月６日

SM60の掘り下げを継続。Ｇ区と接する東西・南北畦の一部を含めて全面を掘り下げ。先行トレンチの掘り下げの終了箇所から順次、南北・東西畦の断面記録を継続。SM60下のＦ・Ｇ区の遺構精査を行い、Ｇ区は礫群平面分布図を作成。Ｆ区のSM60下で10基の柱穴様ピットが検出され、数基からは土器等の遺物も出土。南北確認トレンチのNR38b区のSM60直下から焼土遺構を検出。１日、北秋田市内合同発掘調査見学会実施、見学者60名。４日、小林課長、現地調査指導に来跡。３～６日、武藤男鹿整理収蔵室班長、調査参加。７日、台風接近のため現場作業中止。

【第10週】９月10日～９月14日

SM60の掘り下げを継続。Ｅ区とＧ区に接する南北・東西畦の掘り下げは終了、礫群平面分布図を作成。先行トレンチの掘り下げの終了箇所と調査終了区に面した南北・東西畦の断面記録を継続。SM60下のＥ区の遺構精査を継続。NR39b

区の盛土最下位層中からベンガラと思われる赤色顔料の撒布跡を検出。これまでの２か所を含めてそれぞれ遺構(SX)とした。北側法面下の東西トレンチ壁で小規模な崩落(幅３ｍ、高さ１ｍ)があった。崩落位置に近いＥ区の調査は中止したが、新たな崩落はないので、調査は法面の状況に注意をしながら進めた。11日、弘前大学藤沼教授と学生８名来跡。11・12日、榮班長、現地調査指導。11日・12日午前、簗瀬、報告書校正のため北調査課勤務。10～13日、武藤男鹿整理収蔵室班長、調査参加。14日、東京大学大学院辻教授と大学院生２名、現地で土壌サンプル採取。

【第11週】９月26日～９月28日

SM60の掘り下げを継続。Ｂ区とＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区境界の南北・東西畦以外の掘り下げ、SM60下の精査終了。調査終了区に面した南北、東西畦の断面記録を継続。完形や復元可能な土器、有孔石製品、岩版などが多数出土。28日、激しい雨が未明から降り続いたが、北側法面の新たな崩落はない。午後、調査区内での作業を行ったが、法面下の作業を見合わせた。SM60掘削土の水洗篩いを適宜行う。26日、武藤男鹿整理収蔵室班長、調査参加。26・27日、甘粛省研修員２名現地見学。27・28日、小林調査課長、現地調査指導。29日、榮班長、現地調査指導。(18～21・25日は大雨による法面の崩落等の被害を受け、その復旧のために現場休止、また調査予定日が10月22日まで延長になる)

【第12週】10月１日～10月５日

SM60の掘り下げを継続。Ｂ区の掘り下げ、礫群実測終了。Ａ・Ｄ区とＣ・Ｅ区境界東西畦掘り下げ、SM60下の礫群実測、精査終了。Ｂ・Ｅ区境界東西畦掘り下げ開始。辻教授が土壌サンプルを採取した周辺１㎡で掘削土の水洗篩いを層位ごとに行う。Ｂ区のSM60下から礫を楕円状(東西直径約1.4ｍ、北側一部東西畦下にあり未確認)に組んだ配石遺構(SQ127)を検出。Ａ・Ｄ区境界東西畦のSM60下から楕円状(直径約50㎝)に５㎝前後の小礫を、その中心部に礫(約20㎝)を配置したと考えられるSQ129を検出。８月に追加採用になった作業員が３日で退職し、発掘調査当初の15名(うち１名事務)となる。１・２日、櫻田副所長、現地調査指導。３日、小林調査課長、現地調査指導。４日、榮班長、現地調査指導。５日、静岡県榛原高校教諭福世氏現地見学。

【第13週】10月９日～10月12日

SM60の掘り下げを継続。Ｂ・Ｅ区境界東西畦掘り下げ、礫群実測終了。掘削土の水洗篩い継続。Ａ・Ｂ区境界南北畦NS区側掘り下げ開始。SM60下、SQ127精査。SM60下、SQ129精査終了。SM60下、SR130検出、精査終了。Ｂ・Ｅ区境界東西畦下にあり、一部未確認だったSQ127の配石(長径約1.9ｍ、短径約1.4ｍ)が明らかになる。約６ｍの東西畦(M57層)からは完形に近い香炉形土器や岩版、石剣等が多く出土。特にNR39a区周辺からは小玉が11個(畦以外の周辺の調査では勾玉１個、小玉10個)出土。SR130は縄文時代晩期大洞B2式期。先週に引き続き、SQ127とその周辺の施設等の精査。９～12日、利部南調査課長、現地調査指導。12日、鷹巣地方史研究会27名現地見学。

【第14週】10月15日～10月19日

SM60のＡ・Ｂ区、Ｄ・Ｅ区境界南北畦掘り下げ、SM60下精査終了。Ｂ・Ｅ区境界東西畦等の掘削土の水洗篩い終了。SM60下、SQ127精査終了。SQ127の周辺から柱穴様ピットを複数検出したが、関連は不明確である。溝状に落ち込んでいるNR38b・d区周辺のSM60最下層に完形の土器が集中して置かれていた。15～17日、利部南調査課長、現地調査指導。17日、熊谷所長、佐田・櫻田副所長、佐藤総務課長、利部・小林調査課長、時田副主幹、榮・谷口・武藤班長現地視察。18日、小林北調査課長、現地調査指導。19日、榮調査班長、現地調査指導。

【第15週】10月22日

調査区と道路との境界に単管と虎ロープで養生。遺物、発掘機材等を森吉家ノ前Ａ遺跡に移送のため、トラック積み込み。22日午後３時、文化財保護室菊池主任学芸主事立ち会いのもと、森吉山ダム工事事務所笹木専門職と現場引き渡しについて現地協議。小林北調査課長、簗瀬参加。発掘調査終了。

註１　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

註２　秋田県教育委員会　『向様田Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－』　秋田県文化財調査報告書第392集　2005(平成17)年

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

向様田Ｄ遺跡は、小又川右岸の標高134～138m前後の最低位段丘面西端部に位置する。今年度の調査区は、向様田Ｄ遺跡の北東端部分に当たり、縄文時代晩期前半の盛土(SM60)北端が延びている。調査前の現況は、森吉山ダム建設事業に係り、新たに造成された工事用道路であった。この道路は、当該段丘面背後の崖面に沿った狭い生活道路を幅約５ｍに拡幅したものである。拡幅に際しては、向様田Ｄ遺跡北東端が広がる生活道路南隣の休耕田上に廃棄岩等で厚く盛土している。本遺跡北側の標高150m前後の上位面には向様田Ｅ遺跡が立地する。(註１)

調査に当たっては背後の崖面の崩落を防ぐために、道路路盤等の掘削を崖際から１ｍ離して行った。掘削の結果、休耕田の表土・水田耕作土は廃棄岩等の荷重により圧縮・硬化が見られたが、工事に際して上面には軟弱地盤用の造成シートが敷かれており、廃棄岩等の食い込みによる攪乱は免れていた。休耕田の標高は134.4m前後で、SM60盛土上面は水田造成によって削平を受けていた。

第１次調査では、SM60盛土周辺の基本層序は推定堆積時期と堆積環境とをもとに、大きくⅠ～Ⅴ層に大別した。Ⅰ層は現表土および近現代の水田関係の層群とし、Ⅱ層はⅠ層よりも下位で、縄文時代遺跡の基盤土よりも上位の層群を一括し、さらにⅡa層からⅡd層まで細分した。Ⅲ層は遺跡北側から南西側の小又川旧河道(後背低地)を埋積するグライ化したシルト層、Ⅳ層は東隣の向様田Ａ遺跡との間に存在する支流性埋没谷の埋積層、Ⅴ層は旧小又川形成の微高地を構成する砂～シルト層とした。

今回の第２次調査では、縄文時代晩期前半のSM60盛土形成直前の、北側崖面から崩落した相対的に大規模な崖錐堆積層が存在することが新たに判明した。また、SM60盛土形成中および形成後にも小規模な崖錐堆積層が存在することも確認した。以下では、混乱を避けるために、第１次調査のⅠ～Ⅴ層の大別は踏襲し、盛土形成後の崖錐堆積層をⅡa′層(註２)、盛土形成前の崖錐堆積層をⅡe層とする。なお、盛土形成中の崖錐堆積層は部分的な確認にとどまることから、ここでは基本層序としては扱わない。また、Ⅲ層は地点によりシルトから砂へ変化することなど層相に変異があることから、新たにⅢa層からⅢd層まで細分する。さらに、Ⅴ層も主にグライ化の程度の差により、Va層とVb層とに分ける。

以下、今回の調査区周辺の基本層序について略述する。土層図および土層注記についてはSM60盛土の土層断面図(第10・11図)およびSM60盛土土層一覧(第３表)を参照していただきたい。

Ⅰ層は現表土・水田耕作土(Ⅰa層)、水田造成土(Ⅰb層)である。一定量の遺物を含んでおり、水田造成等に係わり、SM60盛土の一部を削平したものと推定される。Ⅱa′層は亜角礫が多く混じる崖錐堆積層である。縄文時代晩期前半のSM60盛土の上位で部分的に確認したのみで、同じく崖錐堆積層と推定されるⅡa層との関係は判然としない。また、本層は遺物が乏しく、その詳細な堆積時期は不明である。Ⅱe層も亜角礫および円礫が多く混じる大規模な崖錐堆積土である。調査区北半側に南に傾斜して不整に堆積し、南半側までは広がらない。本層は色調および礫の混入度などによって、さらに$Ⅱe_1$層～$Ⅱe_3$層に細分した。$Ⅱe_1$層は腐植沈着により黒色を呈する縄文時代晩期前半の旧表土層(土壌層

位Ａ層）である。縄文時代晩期遺構の確認面であり、遺物も散見される。Ⅱe2層とⅡe3層は黒褐色土や礫の混入割合の差によって細分した。本層群は縄文時代晩期初頭前後に堆積した可能性が強い。(註３) Ⅱb層はやや黒泥状の黒褐色～黒色シルトで、調査区南半側の微高地上（Ｖ層上面）を中心に分布する。第１次調査で、本層上面がSM60盛土形成時の地表面であること確認し、また、本層下面で縄文時代中期の遺構を確認していることから、本層は縄文時代後期頃の形成と推定される。このほかに、今回の調査区の東西の周辺部で、相対的にⅡb層よりも上位に当たる黒ボク土系の旧表土層と見られる層が分布する（SM60盛土の項のM10・11・15層）が、部分的な確認であることから、ここでは基本層序には含めない。Ｖ層およびⅢ層は、大きくは遺跡が立地する段丘面形成時の旧小又川起源の南側の微高地と北側の後背低地に相当するものと捉えられる。Ⅲ層はグライ化したシルト～砂層、Ｖ層は酸化傾向のシルト～砂である。Ⅲ層は地点によりシルトから砂に変化し、一部に有機物が縞状に沈着した部分もあり、Ⅲa～Ⅲd層に細分した。Ｖ層は西側から中央部は酸化傾向の褐色砂であるが、東側の埋没谷寄りは漸移的にグライ化し、シルト質に変化する。ここでは前者をVb層、後者をVa層とに分ける。Ⅳa層は遺跡東側の埋没谷を埋積するグライ化したシルトの最上位部である。一定量の縄文時代晩期遺物が出土するが、当該期には埋没谷は既に埋積されており、本層上面が縄文時代晩期の地表面であったと判断される。本層はかなり軟質であり、遺物は基本的に地表面に堆積後に沈下したものと考えられる。

今回の調査区においては、SM60盛土形成直前の縄文時代晩期前半の旧地形は、北側が北から南に傾斜する不整な起伏ある緩斜面、南側がほぼ平坦面となり、両者の間に僅かに浅い窪地状の低地が残る。北側の緩斜面ではⅡe1層上面、南側の平坦面ではⅡb層上面、両者の間の低地では僅かに露出するⅢa層上面が当該期の地表面となっている。

第２節　検出遺構と出土遺物

１　概要

調査の結果、向様田Ｄ遺跡（平成19年度第２次調査）で検出した遺構は土坑２基、土器埋設遺構１基、配石遺構１基、立石遺構１基、焼土遺構１基、赤色顔料撒布跡３か所、柱穴様ピット14基、盛土１か所の計24遺構である。盛土は、第１次調査でSM60盛土として調査したものの、北端側の残存部である。盛土以外の遺構は盛土直下もしくは盛土形成時の旧表土層中で検出した。今回の調査地点では、遺物と共に大量の土砂を積み上げて盛土を形成する直前に、大洞B2式～大洞C1式土器を中心とした大量の遺物が旧表土層に堆積する。土砂の積み上げによる盛土の形成は、大洞C1式期から大洞C2式期まで継続したものと推定される。土器埋設遺構は縄文時代晩期大洞B2式期に属し、縄文時代晩期遺構の初現である。土坑のうちの１基は大洞BC式期の土坑墓と推定される。配石遺構、立石遺構、焼土遺構は、盛土形成時の旧表土層上面で検出し、大洞BC式期から大洞C1式期前後を下限とする可能性が高い。柱穴様ピットは、検出面から、盛土の形成前かその形成初期段階に構築されたものと考えられる。

２　土坑

SK104（第５・12図）

《位 置 ・ 確 認》NO39a区に位置する。Ⅱb層で確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》長径1.40m、短径1.24mの略円形で、確認面からの深さは0.52mである。

《底 面 ・ 壁》底面はほぼ平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部で外傾する。

《覆　　土》土坑の覆土は２層（①・②層）に分層した。その上位の１層は後述する盛土上位層に相当し、２層は盛土形成途中に発生した崖錐堆積土である。３層は盛土形成前の旧表土層（盛土直下層）である。土坑覆土②層は多量の遺物と円礫が混入する黒色土で、Ⅱb層（４層）およびVa層（５層）掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。②層上面からは赤彩された楕円形平面のⅢ状の浅鉢形土器が伏せられた状態で出土した。①層は小亜角礫が多い黒褐色土で②層と同様のⅡb層およびVa層掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。①層は②層に比べ遺物が少ないことから、②層上面に浅鉢形土器を据えた後に、さらに土を埋め戻したものと推定する。掘り込みの外周に沿って大小の円礫４個がそれぞれ単独で据えられていた。

《出 土 遺 物》覆土②層上面に据えられた浅鉢形土器は大洞BC式に属する（第12図６）。土器は底部の文様を損傷しない形で割れた状態で出土したことから、供献した完形の土器が埋没後の土圧により割れたものと考えられる。このほか覆土中からは土器片が83点、剥片が700点出土した。土器は、無文または縄文のみの土器が多く、深鉢形土器の底部が３個体出土している。剥片は651点が②層でまとまって出土した（第５図）。

覆土内出土土器で型式が判明するものには大洞B2式（第12図２・３）、大洞BC式（同５）などがある。これらの土器は完形に復元できるものはなく、埋め戻し時に周囲に分布していたものが混入したものと判断する。

《時 期 ・ 性 格》本土坑は形態および覆土の特徴や覆土上面に供献されたと想定される浅鉢形土器の出土から、大洞BC式期の土坑墓であったと推定する。第１次調査ではNP37・38区で大洞BC式期の土坑墓１基（SK25）が確認されている。近接して分布し、規模・形態が類似し、本遺構と一連の遺構と考えられる。

SK129（第５・12図）

《位 置 ・ 確 認》NS39a区に位置する。SM60盛土下の、後述する盛土直下層（M57層）を掘り下げ中に礫群の一部を、$Ⅱe_1$層で礫群と掘り込み平面を確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《形 態 ・ 規 模》平面形は径20×12㎝の礫の周りに径４～12㎝の30個ほどの礫が円形に集中する。礫群の下部に長径（北西－南東）0.78m、短径（北東－南西）0.59mの楕円形の掘り込みをもつ。確認面からの深さは0.13mである。

《覆　　土》炭化物粒を少量含む単層で、$Ⅱe_1$・$Ⅱe_2$層掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。

《出 土 遺 物》覆土上面から礫群と混在して縄文土器破片が数点出土した（第12図７）。

《時 期 ・ 性 格》出土土器から縄文時代晩期大洞B2式期を上限時期とする。性格は不明である。

３　土器埋設遺構

SR130（第６・12図）

《位 置 ・ 確 認》NR39b区に位置する。Ⅱe1層下位で埋設された土器の上部を確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《埋 設 状 況》埋設土器はほぼ完形の深鉢形土器で、正位に埋設されていた。埋設のための掘り込みの平面形は直径0.26ｍの円形で、底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。土器底部は北側の周壁に接して据えられる。掘り込み埋め戻し土（裏込め土）はⅡe1・Ⅱe2層掘削土由来の埋め戻し土で、亜角礫を含む黒色土である。

《土 器 内 覆 土》Ⅱe1・Ⅱe2層由来の埋め戻し土で、多量の亜角礫を含む黒色土である。覆土上面からは直径７㎝の緑色の亜角礫が出土し、意図的に埋めた可能性もあるかもしれない。

《出 土 遺 物》埋設土器は口径12㎝、高さ15㎝の完形の深鉢形土器で大洞B2式に属する。

《時 期 ・ 性 格》埋設土器から、縄文時代晩期大洞B2式期に属する。性格は不明である。

４　配石遺構

SQ127（第７図）

《位 置 ・ 確 認》NQ38d・39b、NR38c・39a区に位置する。後述のSM60盛土下の盛土直下層（M57層）を掘り下げ中に礫群の一部を、Ⅲa層で楕円形の環状に組まれた礫群を確認した。

《重　　複》SM60盛土下に位置し、盛土形成以前の構築である。東西断面（Ａ－Ｂ断面）では、SQ127配石遺構を中心にSM60盛土直下層（M57層）の遺物包含層が落ち込み、いわゆるレンズ状堆積を呈する。

《形 態 ・ 規 模》平面形は長径（北－南）約1.80ｍ、短径（東－西）約1.30ｍの楕円形である。径約15～40㎝の安山岩の円礫と凝灰岩亜角礫を横位にしてほぼ交互に配置する。礫群上面の高さは比較的揃っている。環状に組まれた礫群の外側の東西方向にも同一平面上で主に亜角礫の広がりを確認できるが、特に意図的に置いた規則性を認めることはできない。礫群は明瞭な掘り込みを持たず、Ⅲa層上面の地表面に据えられたものと考えられる。

《覆　　土》環状の礫群の下部に掘り込みは認められなかった。

《出 土 遺 物》配石遺構直上およびその周囲には、遺物を大量に包含する盛土直下層（M57層）が堆積する。当該層堆積時には、配石遺構とその周囲は土器を中心とした大量の遺物でほぼ全面が覆われていたものと判断されるが、調査では、本配石遺構に確実に伴う遺物を認定できなかった。M57層からの出土土器は大洞B2式期から大洞C2式期に属し、そのうち大洞BC式土器および大洞C1式土器が過半を占める。

《時 期 ・ 性 格》本配石遺構直上の盛土直下層（M57層）出土土器は大洞BC式～大洞C1式土器を主体とし、本遺構の下限時期は大洞BC式期と判断する。環状の礫群には被熱痕は認められず、その内外面には、焼土や多量の炭化物も確認されていない。また、周囲に有意な柱穴なども検出されていない。SQ127配石遺構の南西およそ２ｍでSN120焼土遺構がⅡe1層上面で検出されていることと、遺物の出土状況、向様田遺跡群の他の配石遺構との共通性から祭祀関連の施設と推定する。

5　立石遺構

SQ101（第６図）

《位 置 ・ 確 認》NQ39a区に位置する。Ⅱe1層中位で柱状の亜角礫が直立に据えられていた。さらに平面的に掘り下げ、礫の先端から0.12m下、Ⅱe1層下位で掘り込みを確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《形 態 ・ 規 模》掘り込みは長径（北西－南東）0.33m、短径（北東－南西）0.27mの楕円形で、確認面からの深さは0.21mである。柱状礫はほぼ中央に据えられ、長さは23㎝である。

《覆　　土》炭化物粒を少量含み、Ⅱe1層・Ⅱe2層掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。覆土には隅丸の平板な円礫が柱状礫を支えるように垂直に置かれる。

《出 土 遺 物》なし。

《時 期 ・ 性 格》SR130土器埋設遺構と同様に、盛土直下のⅡe1層下位からⅡe2層を掘り込み、構築されていることから、大洞BC式期を下限とする可能性が高い。性格は不明である。

6　焼土遺構

SN120（第６図）

《位 置 ・ 確 認》NR38b・d区に位置する。SM60盛土直下のⅡe1層上位で斑状に混入した多量の焼土粒・塊と炭化物粒・材の分布を確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》焼土粒・塊と炭化物粒・材の拡がりは長径（北西－南東）0.72m、短径（北東－南西）0.60mの楕円形である。焼土面は長径（北－南）0.60m、短径（東－西）0.50mの不整な楕円形である。

《断　面　形》焼土粒・塊と炭化物粒・材の断面は確認面から２㎝のほぼ均一の厚さである。焼土面は第Ⅲa層内、最大厚３㎝で赤変する。

《層　　序》２層に分層した。１層は焼土粒・塊と炭化物粒・材が斑状に多量に混入した黒色土で、２層は焼土面で、上面は硬く締まっている。

《出 土 遺 物》なし。

《時 期 ・ 性 格》盛土直下のⅡe1層上位に位置することから、大洞BC式期を下限とする可能性が高い。掘り込みが認められず、周辺から柱穴等の付属施設を確認できなかったので、性格は不明である。

7　赤色顔料撒布跡

SX122（第６図）

《位 置 ・ 確 認》NQ39a区に位置する。SM60盛土下の後述する盛土直下層（M57層）中に多量の赤色顔料粒・塊の分布を確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》直径0.25mの円形である。

《断　面　形》赤色顔料の断面は確認面から1.5㎝のほぼ均一の厚さである。

《層　　序》赤色顔料粒・塊に黒色土と炭化物粒を含む単層である。

《出 土 遺 物》なし。

《時 期 ・ 性 格》盛土直下層(M57層)中に位置することから、大洞C1式期を下限とする可能性が高い。周囲から土坑等の掘り込みを確認できなかった。性格は不明である。

SX123(第６図)

《位 置 ・ 確 認》NR38d区に位置する。SM60盛土下の後述する盛土直下層(M57層)中に多量の赤色顔料粒・塊の分布を確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》長径(北東－南西)0.73m、短径(北西－南東)0.66mの不整円形である。

《断　面　形》赤色顔料の断面は確認面から1.5㎝のほぼ均一の厚さである。

《層　　序》赤色顔料粒・塊に黒色土と炭化物粒を含む単層である。

《出 土 遺 物》なし。

《時 期 ・ 性 格》盛土直下層(M57層)中に位置することから、大洞C1式期を下限とする可能性が高い。周囲から土坑等の掘り込みを確認できなかった。性格は不明である。

SX124(第６図)

《位 置 ・ 確 認》NR39b区に位置する。SM60盛土下の後述する盛土直下層(M57層)中に多量の赤色顔料粒・塊の分布を確認した。

《重　　複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》長径(北東－南西)0.22m、短径(北西－南東)0.16mの不整円形である。

《断　面　形》赤色顔料の断面は確認面から６㎝の小山状である。

《層　　序》赤色顔料粒・塊に亜角礫、黒色土と炭化物粒を含む単層である。

《出 土 遺 物》なし。

《時 期 ・ 性 格》盛土直下層(M57層)中に位置することから、大洞C1式期を下限とする可能性が高い。周囲から土坑等の掘り込みを確認できなかった。性格は不明である。

８　柱穴様ピット

柱穴様ピットは14基のすべてをSM60盛土下で検出した。確認面はⅡe1層上面か、Ⅴ層上面である。遺物を伴うものが７基あるが、帰属時期を明確に特定できるものはない。確認面からは、いずれも大洞C1式期を下限時期とする可能性が高い。これらのピット群には有意な配列が認められず、性格は不明である。各柱穴様ピットの形状・覆土等については第８・９図、個々の記述については、第２表を

第２表　柱穴様ピット一覧

遺構番号	地　区	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	確認面	備　考
SKP105	NP38c・39a	円形(推定)	28	(23)	35	133.06	Ⅱe1層確認	第１次調査後、今年度調査区縁辺部一部崩落　縄文土器片１点出土
SKP107	NQ38c	円形(推定)	26	(11)	32	133.22	Ⅱe1層確認	西側は試掘坑により削平
SKP108	NQ39b	円形(推定)	30	(15)	42	133.40	Ⅱe1層確認	北側は試掘坑により削平
SKP110	NP40a	円形	28	26	12	133.42	Va層確認	
SKP111	NP40a	楕円形	48	38	15	133.30	Va層確認	縄文土器片４点、剥片１点出土
SKP112	NP40b	楕円形	26	20	22	133.30	Ⅱe1層確認	SKP113を切る
SKP113	NP40b	楕円形	22	18	21	133.30	Ⅱe1層確認	SKP112に切られる　縄文土器片１点出土
SKP114	NP40b	円形	34	30	18	133.42	Ⅱe1層確認	縄文土器片６点、石鏃１点出土
SKP115	NP39c	楕円形	28	20	14	133.26	Va層確認	縄文土器片７点出土
SKP116	NP39c	円形	20	20	14	133.30	Va層確認	縄文土器片４点出土
SKP117	NP39d・40b	円形	40	36	16	133.40	Ⅱe1層確認	剥片２点出土
SKP118	NP39c	円形	26	26	16	133.26	Va層確認	剥片５点出土
SKP119	NP39d	楕円形	36	26	24	133.36	Ⅱe1層確認	縄文土器片３点、剥片１点出土
SKP131	NQ39a	円形	24	22	16	133.48	Ⅱe1層確認	

参照していただきたい。

9　盛土

SM60（第４・10・11・13～103図）

《位 置・確 認》第１次調査において、東端がNO37・38区周辺、南端がNP・NQ36区周辺、西端がNS36～38区周辺に及ぶ大量の土砂と遺物とを積み上げた盛土を確認し、今回の第２次調査において、その北端部分がNO39区からNS39区周辺まで広がることを確認した。

《重　　複》今回の調査で確認した盛土以外の遺構は、いずれも土砂と遺物を積み上げる狭義の「盛土」（以下の記述では、特に断りがない場合、単に「盛土」という表現は土砂の積み上げ部分である狭義のそれを意味するものとする。）形成以前の所産である。狭義の「盛土」と直接重複する遺構にはSK104土坑、SK129土坑、SR130土器埋設遺構、SQ127環状配石遺構、SQ101立石遺構、SN120焼土遺構、SX122・123・124赤色顔料撒布跡、SKP105・107・108・131柱穴様ピットがある。上述のように、いずれも盛土形成よりも旧い。

《形 態・規 模》第１次調査時には、主として遺物集中範囲をもとに、盛土は基底面積250㎡以上、体積200㎥前後と推定したが、今回の第２次調査結果から、狭義の盛土範囲はより限定されるものと判断される。現状からは、盛土は基底面積が190㎡前後、最大高0.8m、体積は100㎥前後と推定される。今回の調査対象である盛土北端部では、盛土直下の旧表土層上に縄文時代晩期前葉の遺物が大量に堆積する。さらに盛土北端周辺の旧表土層からは盛土中および盛土直下の旧表土層出土遺物と同時期の縄文時代晩期前葉から中葉にかけての遺物がまとまって出土する。第１次調査結果も勘案すると、向様田Ｄ遺跡北東端部には、縄文時代晩期前葉から中葉にかけての遺物集中地点が形成されており、その遺物集中地点形成の後半段階に遺物堆積と平行して主にその中央部に土砂の積み上げによる盛土が形成されたものと捉えられる。今回の調査区は遺物集中地点および盛土の北端に当たるものと判断される。以下では盛土と盛土直下および盛土周辺の旧表土層遺物集中範囲を含めて、広義の盛土としてまとめて扱うこととし、その場合は「SM60盛土」と呼ぶ。

SM60盛土全体としての遺物集中範囲は、土器出土重量が今回調査では５㎏以上の小区と、第１次調査では20㎏以上の４m四方区画とを便宜的に当該範囲とすると、東端はNNライン周辺、西端はNTライン周辺、北端が40ライン周辺、南端が36ライン周辺となる（第４図）。今回の調査区では、土器出土量はNR38c区の破片点数9,845点、重量138,287ｇを最高として、NR38区～NR39区周辺がその中心となり、周辺部はしだいに減少する。特にNTライン以西および40ライン以北の土器出土量は僅かである。第１次調査区では遺物集中範囲は盛土範囲より全体に一回り広がっているが、今回の調査区では、盛土北端が39ラインと40ラインの中間付近、東端がNOラインとNPラインの中間付近で、遺物集中範囲がより北東側に広がっている。

《層　　序》今回の調査では、SM60盛土には第１次調査時の南北畦の北への延長とNSラインおよびNPライン沿いとに計３本の南北畦（西側のNSライン沿いの畦から東に向かって順に南北畦①、南北畦②、南北畦③と呼ぶ）を、それらに直交するように、39ラインから１m北側に１本の東西畦（東西畦①と呼ぶ）をそれぞれ設定した（第３図）。畦幅はいずれも１mで、畦沿いの部分を先行して掘り下げて層序を確認しながら、畦の間を７区画に分けて掘り下げを行った。各区画は東西畦①南側は西か

らＡ・Ｂ・Ｃ区、北側は同じく西からＤ・Ｅ・Ｆ・Ｇ区とした。盛土の土層断面図は南北畦①東壁（南北断面①）、同畦②西壁（南北断面②）、同畦③東壁（南北断面③）、東西畦①南壁（東西断面①）で作成した（第10・11図、第３表）。なお、南北断面②は第１次調査区部分も一部修正した上で合成して掲載し、合わせて第１次調査の東西断面も一部修正して掲載する[註４]（東西断面②）。Ａ区～Ｇ区の遺物は原則として東西断面②の層位を参考にして取り上げた。畦内の遺物については、各畦の層序に基づき取り上げを行った。各畦の層序は第１次調査部分もあわせて最終的にＭ１層からM71層までの連続した層番号に統一し（第３表）、遺物取り上げ層位もこの連続した層番号に対応させた。ただし、各層位ごとに遺物を取り上げることは完全にはできていない。

以下では各層の特徴などから、盛土およびその周辺の下位層を、「盛土上位層」（M16・17層）、「盛土中下位層」（M19～55層）、「盛土直下層」（M56・57層）、「旧表土①」（M10・11・15層）、「旧表土②」（M59・62・63・65層）の層群に大きくまとめ、各層群出土土器を細別し、その重量および最大長１㎝以上の破片点数を計量・計数し、盛土形成時期検討の参考とする（第４・５表）。なお、細別等の詳細については、出土遺物の項で述べる。

第１節で触れたように、SM60盛土周辺の旧地形は、元来、南側が最低位段丘面形成時の旧小又川形成のシルト～砂基盤のほぼ東西軸の微高地（M70・71層）、北側がグライ化したシルト～砂が堆積したその後背低地（M66～69層）に相当する。この後背低地は、その上面に安山岩大形円礫・凝灰岩亜角礫などを多量に含むシルト～粘土からなる北側崖面からの崖錐堆積物（M59～61層）が不整に広がり、SM60盛土形成時には南に向かって傾斜し、裾部が樹枝状に入り組む緩斜面となっていた。また、SM60盛土形成直前には南側の微高地部では上面に主として黒色シルトから成る層厚10～20㎝前後の旧表土層（M62・63層）が分布する。第１次調査において、この旧表土層（M63層）の下面で縄文時代中期後葉の土坑（SK43N）を検出したこと、当該層上面が縄文時代晩期遺構の掘り込み面であることなどから、当該層の形成は縄文時代後期頃と推定される。一方、北側緩斜面の崖錐堆積層（M59～61層）は、既述のように縄文時代晩期初頭頃に堆積した可能性が強い。当該層は礫を多量に含む部分と砂～シルトを主体とする部分とに分層される箇所も認められるが、崖錐堆積の具体的な経過は判然としなかった。当該層上位は腐植に富み黒味が強い旧表土層を形成する（M59層）。崖錐堆積層が及ばない部分は、後背低地部を埋積するグライ化したシルト層（M66層）が旧表土層となる。SQ127環状配石遺構は、崖錐堆積層と微高地との間の、このシルト層が露出する浅い窪地状の地点に構築されている。この当該地点のM66層とM59・62・63層、さらに東側の埋没谷埋積土最上位の65層とをSM60盛土形成前の旧表土層群として「旧表土②層」とまとめると、M66層からの出土土器はないが、他の層からは、全体で大洞B2式土器から大洞C2式土器までが出土している。本層群は、大洞C2式期まで地表にほぼ露出していたものと考えられる。

SQ127環状配石遺構構築の前後に、NP38d・NP39b・NQ38c・d・NQ39a・b・NR38c・NR39a区周辺の緩斜面を中心に、大洞B2～大洞C1式土器を主体とする大量の遺物が当該地点全体を面的に覆うように堆積し、層厚10㎝前後の遺物包含層（M57層）を形成する。当該層には遺物のほか、炭化物も目立つが、遺物間を充填する基質は比較的均質な黒色シルトで、全体として上位の北北東側から下位の南南西側に傾斜する堆積状態を呈する。基質自体は、基本的には人為堆積ではなく、風成塵あるいは雨水による周辺の流出表土が自然堆積したものと推定する。本層の堆積は、遺物の集中範囲よりも北東

第３表　SM60盛土土層一覧

性格		基本層序	層番号	特徴等	土色	土性	硬度	粘性	礫量	褐色～赤褐色土粒	炭化物量	土器量(点／g)	土層断面位置	第１次調査層番号	備考
表土および造成土		Ⅰa	M1		オリーブ褐色(2.5YR4/3)	粘土	強	中	多			1,038／11,487	東西②	43	
		Ⅰb	M2		暗褐色(10YR3/4)	粘土	強	中	少			725／5,618	東西②	44	
		Ⅰa	M3		暗褐色(10YR3/3)	粘土	強	強	少			5,257／38,921	南北②・東西②	1・45	
		Ⅰb	M4		黒色(10YR2/1)	粘土～シルト	強	弱	少		多	－	南北②	3	
		Ⅰb	M5		暗褐色(10YR3/3)	粘土～シルト	強	弱	少			－	南北②	2	
		Ⅰb	M6		黒褐色(10YR2/3)	シルト～粘土	中	中			多	－	南北②	4	
		Ⅰb	M7		暗褐色(10YR3/4)	粘土～シルト	弱	強				－	南北②	5	
		Ⅰb	M8		黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	中			多	－	南北②	6	
		Ⅰb	M9		黒褐色(10YR3/2)	粘土～シルト	極強	中	少			－	東西②	46	
旧表土？			M10	黒ボク土	暗褐色(10YR3/3)	シルト～粘土	強	中		少		0／0	東西②	47	旧表土①
			M11		黒褐色(10YR3/2)	シルト～粘土	強	強				0／0	東西②	48	
崖錐(新)		Ⅱa′	M12		黄褐色(10YR5/6)	シルト～砂	強	弱	多			18／1,057	東西①		
		Ⅱa′	M13		黄褐色(10YR5/6)	シルト	強	弱	多		少	32／170	東西①		
		Ⅱa	M14		暗褐色(10YR3/3)	粘土～シルト	極強	強	中		中	0／0	東西②	49	
旧表土			M15	黒ボク土	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	強	中			多	879／8,768	東西①②	50	旧表土①
SM60盛土			M16	薄？	黒褐色(10YR3/1)	シルト～粘土	強	強				499／3,938	東西②	51	盛土上位層
			M17	厚	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	中			中	33,285／307,231	南北①②・東西①②	7・52	盛土上位層
崖錐(中)			M18		黒褐色(10YR3/2)	シルト	強	強	多	多	中	2,310／25,636	東西①②	53・54	第１次調査報告土層修正
SM60盛土			M19	薄	黒色(10YR2/1)	シルト	強	弱		中	少	561／4,337	東西①		盛土中下位層
			M20	薄	黒色(10YR2/1)	シルト	強	弱		少	中	623／5,005	東西①		盛土中下位層
			M21	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト	強	弱		少	中	399／4,413	東西①		盛土中下位層
			M22	薄	黒褐色(10YR2/3)	シルト～粘土	中	強				2,427／25,247	東西①②	56	盛土中下位層
			M23	薄	黒色(10YR2/1)	シルト	強	弱			少	937／8,450	東西①		盛土中下位層
			M24	薄	黒褐色(10YR2/3)	シルト～粘土	強	中			多	－	南北②	13	盛土中下位層
			M25	小	暗褐色(10YR3/3)	シルト	中	弱			少	－	南北②	14	盛土中下位層
			M26	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	中			中	－	南北②	15	盛土中下位層
			M27	薄	暗褐色(10YR3/4)	シルト	弱	中		多	少	－	南北②	8	盛土中下位層
			M28	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト	中	中		中	多	－	南北②	9	盛土中下位層
			M29	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト	中	中			中	－	南北②	16	盛土中下位層
			M30	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	強		少	少	－	南北②	17	盛土中下位層
			M31	小	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	強		少	少	－	南北②	18	盛土中下位層
			M32	小	黒褐色(10YR2/3)	シルト	強	弱		多		－	南北②	22	盛土中下位層
			M33	小	黒褐色(10YR2/3)	シルト～粘土	強	中		中	多	－	南北②	10	盛土中下位層
			M34	小	黒褐色(10YR2/3)	シルト～粘土	強	中		多	多	－	南北②	11	盛土中下位層
			M35	小	黒色(10YR2/1)	シルト	中	中		中	多	－	南北②	12	盛土中下位層
			M36	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	中		多	中	－	南北②	19	盛土中下位層
			M37	小	黒褐色(10YR2/3)	シルト	中	中		中	多	－	南北②	20	盛土中下位層
			M38	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	中		中	中	－	南北②	21	盛土中下位層
			M39	薄	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	強	中			多	－	南北②	23	盛土中下位層
			M40	小	黒褐色(10YR2/3)	シルト	強	弱		多		－	南北②	24	盛土中下位層
			M41	薄	黒色(10YR2/1)	シルト	強	弱			多	－	南北②	25	盛土中下位層
			M42	小	暗褐色(10YR3/3)	シルト～粘土	中	強			中	－	南北②	27	盛土中下位層
			M43	薄	暗褐色(10YR3/3)	シルト～粘土	中	強			中	－	南北②	28	盛土中下位層
			M44	薄	暗褐色(10YR3/3)	シルト	弱	強			中	－	南北②	29	盛土中下位層
			M45	薄	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	中		中	中	－	南北②	30	盛土中下位層
			M46	薄	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	強	中		中	多	－	南北②	31	盛土中下位層
			M47	小	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	中		中	多	－	南北②	32	盛土中下位層
			M48	小	黒褐色(10YR3/2)	シルト～粘土	強	強			少	－	南北②	33	盛土中下位層
			M49	薄？	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	強	強		中	多	－	南北②	34	盛土中下位層
			M50	薄	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	中	強		中	多	－	南北②	35	盛土中下位層
			M51	薄	黒褐色(10YR3/2)	シルト～粘土	強	強			中	－	南北②	36	盛土中下位層
			M52	小	黒褐色(10YR3/2)	シルト～粘土	強	強			中	－	南北②	37	盛土中下位層
			M53	薄	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	中	強		中	多	－	南北②	38	盛土中下位層
			M54	小	黒褐色(10YR3/2)	シルト	中	弱			多	50／688	南北①		盛土中下位層
			M55	薄	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	極強	強			中	487／9,942	東西②	55	盛土中下位層
盛土直下層			M56	黒ボク土系	黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	強	強			中	8,020／106,556	南北①②・東西①②	26・57	M56・57層は連続した自然堆積層界は漸移 第１次調査報告土層修正
			M57		黒色(10YR2/1)	シルト～粘土	強	強			中	54,322／754,300	南北①②・東西①②	34・58	
SK25土盛り			M58		暗褐色(10YR3/3)	シルト	弱	強		多		－	南北②	39	SK25掘削土由来か
基盤層	崖錐(古)	Ⅱe₁	M59	黒味強	黒色(10YR2/1)	粘土～シルト	強	強	中	多	少	9,024／103,282	南北①②・東西①		土壌層位A層 旧表土②
		Ⅱe₂	M60		暗オリーブ色(5Y4/3)	粘土～シルト	強	中	多			0／0	南北①②・東西①		土壌層位BC層 M59層との層界凹凸
		Ⅱe₃	M61		暗オリーブ灰色(5GY3/1)	粘土～シルト	強	強			少	0／0	南北①		
	旧表土	Ⅱb	M62	やや黒泥状	黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	強			中	3／6	東西②	59	旧表土②
		Ⅱb	M63		黒色(10YR2/1)	シルト	中	強				1,679／20,040	南北①②・東西①②	40・60	M71層直上堆積 旧表土②
	埋没谷	Ⅱd	M64		黒色(10YR2/1)	シルト	中	弱				－	南北②	41	埋没谷上面旧表土
		Ⅳa	M65		緑黒色(5G2/1)	シルト	弱	強				481／5,309	東西①②	61	埋没谷最上位層 旧表土②
	後背低地	Ⅲa	M66		黒色(10YR1.7/1)	シルト	強	強				0／0	南北①②・東西①		Ⅱe層(M59・60層)との層界はやや漸移　M71層とは漸移　一部旧表土②
		Ⅲb	M67		オリーブ褐色(2.5Y4/3)	シルト	中	弱				0／0	南北②		
		Ⅲc	M68		黒褐色(10YR3/2)	砂～シルト	強	中				0／0	南北②		
		Ⅲd	M69		オリーブ褐色(2.5Y4/3)	砂	中	弱				0／0	南北①②		
	微高地	Ⅴa	M70	グライ化気味	オリーブ黒色(10Y3/1)	シルト	強	強				0／0	東西①②	62	埋没谷側がグライ化
		Ⅴb	M71	酸化	褐色(10YR4/4)	砂～シルト	中	弱				0／0	南北①②・東西②	42・62	M66層とは漸移

第４表　地区・層別土器出土量（１）

（点／ｇ）

地　区	層	大洞B1式	大洞B2式	大洞BC式	大洞C1式	大洞C1～C2式	大洞C2式	JB群2類	縄文晩期前半
NN39	直下	1/15	7/1,716	25/265	38/574	5/95	12/62	4/76	983/12,457
	旧表土①	1/62	3/129	18/118	31/522	7/53	3/11	1/52	808/7,798
	全	2/77	10/1,845	44/400	69/1,096	12/148	15/72	5/129	1,813/21,147
NN40	直下	0/0	0/0	2/26	0/0	0/0	0/0	0/0	143/1,142
	旧表土②	0/0	0/0	1/14	0/0	1/3	0/0	3/113	159/1,214
	全	0/0	0/0	3/40	0/0	1/3	0/0	3/113	302/2,356
NN41	旧表土②	0/0	0/0	0/0	0/0	9/126	0/0	0/0	15/234
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	9/126	0/0	0/0	15/234
NO38	直下	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	16/119
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	16/119
NO39	上位	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/24	29/198
	直下	0/0	17/189	25/182	171/2,147	38/414	29/195	16/1,362	3,179/40,414
	旧表土①	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	6/18
	旧表土②	0/0	1/9	13/157	20/138	4/95	1/93	1/700	536/5,249
	全	0/0	18/198	38/338	204/2,383	60/602	31/293	19/2,091	4,128/50,743
NO40	直下	0/0	6/416	24/809	43/593	18/405	11/74	4/56	1,084/13,086
	旧表土②	0/0	1/8	1/17	19/189	6/34	1/33	0/0	358/2,783
	全	0/0	7/423	25/826	62/782	24/439	12/107	5/753	1,460/16,413
NO41	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	23/203
NP38	上位	0/0	0/0	0/0	1/3	15/268	7/274	0/0	227/1,488
	中下位	0/0	2/40	2/17	25/664	12/739	6/34	4/263	435/8,149
	直下	0/0	3/502	3/639	13/731	17/335	0/0	2/191	479/7,420
	全	0/0	5/541	7/686	46/1,503	49/1,852	16/370	8/481	1,284/19,176
NP39	上位	1/31	3/76	13/303	10/371	52/1,078	10/729	5/471	919/9,843
	直下	11/99	17/468	73/1,888	192/2,806	47/713	17/879	13/1,394	5,504/69,333
	旧表土②	0/0	2/1,677	2/16	1/3	2/36	0/0	0/0	72/2,815
	全	12/130	23/2,232	105/2,414	216/3,519	127/2,198	37/1,775	24/1,924	8,122/98,253
NP40	直下	0/0	3/28	13/112	2/10	5/40	1/9	0/0	234/2,836
	旧表土②	0/0	0/0	8/48	0/0	0/0	0/0	0/0	123/785
	全	0/0	4/62	43/580	2/10	9/87	1/9	0/0	486/4,987
NP41	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
NQ38	上位	0/0	2/10	6/316	38/511	103/1,939	86/1,476	3/552	2,577/21,057
	中下位	0/0	0/0	0/0	3/169	12/242	28/374	0/0	346/3,789
	直下	1/152	48/2,202	442/8,752	183/2,951	72/1,086	47/827	17/2,813	6,674/103,192
	旧表土②	0/0	0/0	2/6	0/0	0/0	0/0	0/0	17/50
	全	1/152	50/2,212	455/9,284	232/3,897	199/3,487	162/2,695	21/3,376	9,944/132,537
NQ39	上位	1/33	7/387	122/1,401	26/228	123/2,058	79/2,012	7/1,123	4,496/35,735
	中下位	0/0	0/0	7/78	26/303	91/1,773	35/838	0/0	1,374/12,508
	直下	0/0	46/1,647	375/7,474	330/5,353	93/2,123	140/1,829	19/1,831	8,515/106,140
	旧表土②	0/0	2/42	17/115	18/122	29/366	24/172	4/122	1,631/14,750
	全	1/33	55/2,076	521/9,068	402/6,016	339/6,601	278/4,851	32/3,091	16,145/170,182
NQ40	旧表土②	0/0	0/0	22/1,041	2/684	6/53	1/130	3/43	701/3,748
	全	0/0	0/0	22/1,041	2/684	6/53	1/130	3/43	701/3,748
NQ41	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
NR38	上位	0/0	1/8	3/16	61/979	230/4,576	268/4,876	0/0	5,934/51,103
	中下位	0/0	0/0	1/71	3/59	72/934	17/213	1/12	859/7,562
	直下	0/0	26/2,688	549/12,376	1,213/17,921	148/5,607	172/7,572	28/2,228	15,948/224,733
	旧表土②	0/0	1/7	39/1,210	89/2,645	22/195	16/123	1/273	828/9,711
	全	0/0	28/2,703	595/13,694	1,369/21,659	484/11,362	479/12,841	30/2,513	23,714/294,557

第５表　地区・層別土器出土量（２）

（点／ｇ）

地　区	層	大洞B1式	大洞B2式	大洞BC式	大洞C1式	大洞C1～C2式	大洞C2式	JB群2類	縄文晩期前半
NR39	上位	0/0	1/9	33/117	17/172	134/1,916	77/1,580	1/3	2,587/21,728
	中下位	0/0	0/0	7/57	20/495	132/2,561	55/1,092	1/513	1,905/14,478
	直下	0/0	82/1,568	447/8,307	526/8,450	120/3,988	76/1,897	26/995	9,185/95,426
	旧表土②	0/0	21/4,064	156/3,697	44/591	202/4,633	69/1,946	14/1,229	3,900/39,254
	全	0/0	104/5,640	643/12,178	607/9,707	588/13,099	277/6,514	44/3,051	17,584/170,957
NR40	旧表土②	0/0	40/1,348	33/303	2/508	23/184	8/176	1/20	791/8,903
	全	0/0	40/1,348	34/308	2/508	34/348	11/204	1/20	867/9,344
NS37	上位	0/0	1/2,176	2/56	24/291	92/1,553	24/322	1/474	1,383/11,916
	直下	0/0	0/0	1/17	0/0	0/0	0/0	0/0	4/141
	旧表土②	0/0	0/0	0/0	3/35	4/170	0/0	0/0	49/308
	全	0/0	1/2,176	3/72	28/329	96/1,724	25/328	1/474	1,481/12,608
NS38	上位	0/0	1/10	67/732	204/4,054	625/12,512	276/5,703	3/59	10,600/82,651
	直下	0/0	1/23	22/474	119/2,523	143/2,299	30/639	1/88	2,896/36,695
	全	0/0	2/33	89/1,206	323/6,577	772/14,884	307/6,357	4/146	13,599/120,664
NS39	上位	0/0	6/69	6/187	47/335	112/2,623	30/1,209	0/0	1,957/13,079
	直下	0/0	0/0	4/18	42/403	3/22	14/234	0/0	957/7,704
	旧表土②	0/0	28/274	8/53	4/17	15/179	3/127	0/0	231/1,856
	全	0/0	34/343	18/258	94/786	135/2,878	48/1,575	0/0	3,307/24,192
NS40	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
NT37	旧表土②	0/0	0/0	0/0	0/0	2/16	0/0	0/0	21/159
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	3/26	0/0	0/0	26/173
NT38	旧表土②	0/0	0/0	0/0	0/0	2/12	0/0	0/0	87/767
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	2/12	0/0	0/0	91/817
NT39	旧表土②	0/0	0/0	0/0	0/0	2/21	0/0	0/0	68/665
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	2/21	0/0	0/0	71/742
OA37	全	0/0	0/0	0/0	0/0	1/5	0/0	0/0	0/0
OA38	旧表土②	0/0	0/0	3/25	2/11	4/68	2/111	0/0	294/2,030
	全	0/0	0/0	3/25	2/11	4/68	3/117	0/0	304/2,094
OA39	旧表土②	0/0	0/0	1/5	1/2	41/593	1/4	0/0	129/1,169
	全	0/0	0/0	1/5	1/2	41/593	1/4	0/0	129/1,169
全地区	上位	2/64	22/2,744	252/3,128	428/6,942	1,486/28,524	857/18,182	21/2,706	30,709/248,799
	中下位	0/0	2/40	17/222	77/1,690	319/6,249	141/2,551	6/789	4,919/46,486
	直下	13/266	256/11,445	2,005/41,339	2,872/44,462	709/17,127	549/14,216	130/11,034	55,801/720,837
	旧表土①	1/62	3/129	18/118	31/522	7/53	3/11	1/52	814/7,817
	旧表土②	0/0	96/7,428	306/6,705	205/4,945	374/6,784	126/2,913	27/2,500	10,010/96,451
	全	16/391	408/22,096	2,778/53,953	3,755/60,128	3,999/68,993	1,841/39,321	220/18,697	111,842/1,204,637

側のNO40a・b区周辺などまで部分的に広がっている。本層の直上には、類似した基質で、遺物を多量に包含する黒色シルトが堆積する（M56層）。層厚は10㎝前後で、堆積範囲はSQ127環状配石遺構周辺の浅い窪地状地点周辺に限定される。M57層との層界は漸移し、同様に自然堆積層と推定する。両層は基本的に同一環境下の一連の堆積層であり、盛土周辺の黒ボク土系の旧表土（旧表土②）に漸移的に連続するものと判断される。両層をあわせて「盛土直下層」としてまとめると、大洞C1式および大洞BC式土器が多出し、これに大洞C2式土器、大洞B2式土器およびごく少量の大洞B1式土器が伴う。本層群の直上には人為的な盛土積み上げ層である「盛土中下位層」（M19～23・54・55層）および「盛土上位層」（M16・17層）が堆積する。両層群とも一定量の大洞C2式土器を含むことから、盛土積み上げが今回の調査地点周辺に及ぶのは、大洞C2式期前後であり、大洞C2式期まで盛土直下層上面への遺物堆積が部分的に継続していたものと判断される。なお、東西断面①西端側M57層に土器破片がまとまって分布する部分があり、調査では確認できなかったが、小形の掘り込み内に埋められた遺物であった可能性があろう。

M56層よりも上位は、既述のように基本的に人為的な盛土積み上げ層と判断される。そのうち、盛土中下位層は、畦の土層断面観察からは、ほとんどは層厚10～20㎝前後の薄層（第３表「特徴等」欄の「薄」）およびより小規模な断面凸レンズ状の小塊（同表「特徴等」欄の「小」）の累積である。前回の調査結果も総合すると、盛土中下位層の土砂積み上げはNQ37区周辺から始まり、主に北北西側と南南東側とに向かって傾斜するように堆積し、最終的に北北西長軸の長楕円形平面状に広がるものと推定される（第４図）。今回の調査区にはNQ38d・NQ39b・NR38c・NR39a区周辺に盛土中下位層北端が部分的に及んでいる。薄層としたものは、ばらつきはあるものの、多くは面積４～10㎡前後、体積0.4～２㎥前後の堆積単位かと推定される。基盤の褐色土粒等を比較的多量に含む層も存在するが、いずれも基質は黒色～黒褐色を呈する。これらの層には、炭化物が顕著であるが、焼土粒は目立たない。

第１次調査ではNQ37区周辺の盛土中心から南側にかけての範囲は、主体をなす出土土器から主として大洞C1式期に形成されたものと推定した。これに対し、今回調査した盛土中下位層では、大洞C1式土器に加えて、大洞C2式土器もまとまって出土する。土砂の積み上げと遺物の堆積は必ずしも同時に行われたとは限らないこと、盛土内に進入して土砂を積み上げる際などに表面の遺物は踏み込み等の攪乱を受ける可能性があることなどから、盛土層堆積時期をその出土土器から判断するには注意が必要であるが、盛土北端側では、当該層群の堆積は大洞C2式期まで下る可能性が強いと推測される。ただし、累積するM19～23層とは離れて堆積するM54層およびM55層は大洞C2式土器は相対的に少なく[註5]、前者より堆積時期が遡る可能性があろう。

上位の「盛土上位層」（M16・17層）は主に盛土中下位層の東側と西側に広く堆積する。その東西範囲はNOラインとNPラインの中間周辺からNTラインのやや東寄り周辺までで、北端はいずれも39ラインと40ラインの中間周辺である（第４図）。本層群のうちのM17層は東西の周辺部では層厚が30㎝以上と厚くなっている（第３表「特徴等」欄の「厚」）。本層群出土土器は、大洞C2式土器を主体に大洞C1式土器、大洞BC式土器等が混在していることから、大洞C2式期の堆積と推定される。本層群は、盛土中下位層群とは堆積成因が異なり、盛土上位を削平・整地し、周囲に埋め立てた可能性も想定される。なお、M17層の直上に堆積することから、盛土上位層としてまとめたM16層は、東西断面②では

厚さ10㎝余りの薄層状を呈する。層相はM17層と比較的類似し、また、その上位は水田造成時に削平されており、M17層と一連の堆積の可能性が高いものと推定する。

このほか、盛土中には、部分的に崖錐堆積層と推定できる箇所(M18層)があるものの、SM60盛土全体を覆うような大規模な崖錐堆積層は認められない。当該地点周辺は大洞C2式期までは比較的安定していたものと想定され、大洞B2式期から大洞C2式期まで継続して遺物が堆積している。また、盛土直下層および旧表土②よりも相対的に上位の黒ボク土系旧表土と推定されるM10・11・15層を旧表土①としてまとめると、大洞B1式土器から大洞C2式土器まで混在するが、出土量は僅かである。

SM60盛土全体では、大洞B2式期から遺物堆積が活発化し、大洞C2式期まで盛行することが認められる。遅くとも大洞A式期には、SM60盛土形成は終了する。

《出　土　遺　物》以下では、上述の「広義の盛土」(SM60盛土)出土遺物のほかに、水田造成土(Ⅰb層)出土遺物および新旧の崖錐堆積物(Ⅱa′層、Ⅱe層、M18層)出土遺物も合わせて報告する。今回の調査では水田造成土出土例等も含めて、縄文土器破片は全体で約125,000点、総重量約1,470㎏が出土した。縄文土器については、完形もしくは完形に近いものおよび類例の少ない破片を中心に約380点を選択して掲載した(第13～58図)。縄文土器の器種組成、特徴等については、後述する。

第６表　土製品・石器・石製品・骨角器内訳

	種　　別	第２次調査出土数	第１次調査出土数	合　計
土製品	土偶	28(25)	46	74
	土版	3(2)	0	3
	円盤状土製品	14(12)	17	31
	有孔円盤状土製品	3(3)	0	3
	土製耳飾	1(1)	0	1
	土玉	1(1)	0	1
	その他土製品	1(1)	8	9
石　器	石鏃	387(50)	346	733
	石槍	34(11)	8	42
	石錐	212(39)	181	393
	石匙	151(33)	232	383
	石箆	19(6)	5	24
	スクレイパー	229(33)	197	426
	楔形石器	3(2)	61	64
	二次加工ある剥片	278(30)	1,097	1,375
	異形石器	19(19)	18	37
	石核	87(9)	69	156
	凹石類	36(10)	120	156
	敲石	10(4)	2	12
	石皿	8(4)	5	13
	台石	0(0)	3	3
	打製石斧	11(3)	0	11
	磨製石斧	23(20)	25	48
	礫器	0(0)	7	7
石製品	石剣	43(7)	32	75
	石刀	2(2)	0	2
	石棒	1(1)	0	1
	岩偶	1(1)	0	1
	岩版	18(13)	19	37
	線刻礫	1(1)	0	1
	円盤状石製品	21(10)	24	45
	有孔円盤状石製品	1(1)	0	1
	有孔石製品	11(11)	17	28
	勾玉	4(3)	0	4
	小玉	55(55)	4	59
	小玉未製品	12(12)	0	12
	その他石製品	3(3)	4	7
骨角器	棒状骨角器	2(2)	0	2

(　)内の数字は掲載点数

土製品・石器・石製品および骨角器の内訳は第６表のとおりである(第59～103図)。

土製品では、土偶が小破片も含めると28点出土し、最も多い。土偶には、大洞BC式～大洞C1式期の遮光器土偶の大形破片３点がある(第59図１～３)。その他の土偶は中実の小形例がほとんどである。そのうち、Ｘ字形土偶(第60図１・２)は大洞C1式期以降に属するとみられるが、多くは詳細な時期は判然としない。また、今回の調査では、新たに土版、土製耳飾、土玉などが出土したが、いずれも僅少である。土製品全体においても、土器、石器の出土量に比べ、その出土量は極めて僅かである。

石器では、定型的な石器中、石鏃が最も多出し、これに、石錐、石匙と続く。第１次調査の石器組成と比較すると、新たに打製石斧が出土している一方、二次加工ある剥片、楔形石器、凹石類の出土量が減少している点が注意される。二次加工ある剥片と楔形石器については、第１次調査とは認定基準が結果的に変化している可能性が考えられる。凹石類の出土量の違いについては、当該石器が主として食料加工具であったとするならば、後述する盛土の性格の変容と関連するかもしれない。

第１次調査と第２次調査とを合わせた全体の石器組

成を見ると、石鏃、石錐、石匙、スクレイパーなど剥片石器が多出するのに対し、礫石器は相対的に少ない。特に石皿や台石などの大形礫石器が僅少で、かつ、これらの多くは破損品である。このほか、剥片が第２次調査で約14,400点、重量で約109㎏出土している。第１次調査分を合わせると、剥片は約34,100点で、剥片と石核との数量比はおよそ220：１となる。

なお、赤色顔料の原料となる赤色礫（赤玉）が3,533点、重量で約59㎏出土している。石皿および凹石類には赤色顔料が付着した例があり（第87図３・４、第89図２・３）、赤色礫を粉砕し、赤色顔料を生産する際に使用されたものであろう。

石製品では、小破片を含めると石剣が最多である。石剣は破片資料がほとんどであるが、そのうち、第92図１・２、第93図２は接合し、ほぼ完形となった。後二者は分割されて廃棄された可能性が強いものとみられるが、第92図１は各破片が隣接して出土しており、本来完形のまま廃棄された可能性が高い。また、石刀１点（第93図４）もほぼ完形で出土した。第１次調査でもほぼ完形に接合した石剣が２点出土しており、本遺跡では石剣類が完形となる例が目立つ。なお、第93図２の石剣および第94図１の石刀基部破片は非在地素材である緑色片岩製で、当該素材は関東地域の三波川帯に産出する緑色片岩と酷似するとされる（第５章第１節）。

このほか、NR38b区盛土直下層で主に変質流紋岩を素材とする小玉未製品約12点および同質の径10～15㎜前後の小円礫30点余りとがまとまって出土している（第103図１～12）。なお、勾玉を含めた玉類のうち、ヒスイ・碧玉素材のものは片面穿孔が優勢で、変質流紋岩系素材のものはほとんどが両面穿孔となっている。

石器・石製品の素材の推定産地等については、第５章第１節および第２節を参照されたい。

骨角器は２点出土した。いずれも被熱した棒状骨角器の破片である（第103図13・14）。このほか、微細な焼骨を若干採取している。そのうち２点はイノシシ、１点はシカと同定され、その他の資料も多くはシカまたはイノシシの可能性が高いとされている（第５章第３節）。これらの焼骨は食糧残渣であったと考えられよう。

以下では、出土縄文土器について、その器種組成や特徴などをまとめる。

SM60盛土出土縄文土器は、ごく少量の縄文時代前期～後期土器破片を除き、そのほとんどが縄文時代晩期前葉から中葉に属する。ここでは、縄文時代晩期土器をJB群として特に群別する。JB群は大洞B1式から大洞C2式の大洞諸型式に属すると判断されるものが大半を占めるが、これら以外に、大洞諸型式とは異なり、単位文様を点対称に規則的に繰り返す傾向に乏しく、個別の文様および文様構成のみだれが著しく、ミガキ調整をほとんど施さない、一見して「粗雑」な印象を受ける特徴的な一群が存在する（第51～58図）。ここでは、前者の大洞諸型式に属するものをJB群１類（以下、場合によっては単に「１類」と呼ぶ）、後者の一群をJB群２類（同じく「２類」と呼ぶ）として分ける。

１類は、大洞B1式、大洞B2式、大洞BC式、大洞C1式、大洞C2式の各型式に細別する。ただし、大洞C1式と大洞C2式については、特に口縁部に横位沈線のみを巡らす深鉢形もしくは鉢形土器等の細別判定が困難なものは、大洞C1～大洞C2式としてまとめた。

なお、粗製の深鉢形土器は、詳細な型式比定が困難であり、大半をJB群（縄文晩期前半）として一括した。現時点での見通しとしては、概ね晩期前葉はLR縄文を横位～斜位回転施文する例が優勢であり、晩期中葉になると、RL縄文が縦走する例が顕著となり、僅かに横位回転の非結束羽状縄文を施すもの

が伴うようである。津軽地方の深鉢形土器に特徴的な縦位の条痕調整を施す例はほとんど認められない。[註6]また、いわゆる九年橋型深鉢形土器や秋田県南部に分布する結節回転文を施す例も認められない。

２類は、岩手県久慈市所在の大芦Ｉ遺跡の発掘調査報告書において、北海道道南の土器との影響関係が想定される、縄文時代晩期前葉～中葉段階の「異系統土器」とされた土器群[註7]や北海道松前町所在の東山遺跡出土土器をもとに関根達人が「東山１b式」と型式設定した土器群[註8]に類似資料が存在する。なお、本類は、第１次調査報告書のSM60盛土の報告で「不整例」としたものに相当する。[註9]

上述したようにJB群を類別および大洞諸型式に細別後、器種については、深鉢形土器(器高／口径比１以上)、鉢形土器(器高／口径比0.5以上１未満)、浅鉢形土器(器高／口径比0.5未満)、壺形土器(口頸部最小径／体部最大径比0.75未満)、注口土器、香炉形土器および台部に分け、さらに口縁部、体部、底部等の部位ごとに分けた。なお、出土土器には極めて小形のいわゆるミニチュア土器も存在する(第50図２～18)。しかし、破片資料では判別が困難なものも多いため、ここでは分離せず、上記の各器種に分類した。各分類資料は、総重量および単純最大長１㎝以上の破片の点数をそれぞれ計量・計数した。計数に当たっては、同一個体と判断した破片はまとめて１点とした。分類においては、小破片資料の器種判定の確実性は低く、特に体部破片では、鉢形土器や縄文地文の壺形土器破片の多くを深鉢形土器と判定した可能性が高い。ここで、口縁部を含む破片資料および台部破片について、各細別ごとの器種別出土量を集計する(第７表)。深鉢形土器は既述のように細別不明な例が過半を占め

第７表　器種別出土量(口縁部・台部)　(点／ｇ)

	深鉢形土器	鉢形土器	浅鉢形土器	壺形土器	注口土器	香炉形土器	台　部
大洞B1式	16／391	0／0	0／0	0／0	0／0	0／0	0／0
大洞B2式	99／10,008	197／8,211	21／1,273	7／33	4／67	0／0	0／0
大洞BC式	43／1,689	502／8,110	305／7,424	124／4,051	310／12,917	4／862	14／490
大洞C1式	18／489	1,308／15,194	759／21,137	233／6,048	28／1,837	0／0	33／1,053
大洞C1～C2式	592／16,786	1,505／18,941	179／1,644	187／7,982	0／0	0／0	1／4
大洞C2式	12／931	388／7,133	837／22,717	71／1,507	14／768	0／0	2／15
JB群２類	161／16,213	24／1,638	1／13	4／153	0／0	0／0	0／0
縄文晩期前半	5,079／122,141	686／15,055	154／1,802	1,010／28,207	7／31	4／323	675／21,857

るが、各細別を通じ、器種組成の主体を占め、また、鉢形土器も一定量伴うものと予想される。定量的に提示することはできないが、深鉢形土器および鉢形土器の過半には、コゲや煤などの煮沸痕跡が顕著であり、調理用具として使用されたものと判断される。他の器種では、大洞BC式に注口土器が目立ち、大洞C1式、大洞C2式では激減すること、逆に大洞BC式より大洞C1式から大洞C2式で浅鉢形土器が点数比・重量比とも倍以上に増加することが注意される。香炉形土器は僅少である。また、２類では、深鉢形土器が過半を占め、少量の鉢形土器、僅かな浅鉢形土器、壺形土器が伴い、注口土器は認められない。

なお、壺形土器(第37図１・７、第39図８)、注口土器(第47図１)、台付浅鉢形土器？(第50図１)などには、焼成後に加撃による穿孔を施した例が存在する。また、精製の壺形土器には被熱により表面がはじけた例も認められる(第39図１～４)。

次に、２類について、その主体を占める深鉢形土器および鉢形土器の属性を検討する。

深鉢形土器・鉢形土器の器形については、ともに、口縁部が外反するもの(Ａ器形)、口縁部が直立もしくは体部から緩やかに内湾するもの(Ｂ器形)、口縁部が内屈するもの(Ｃ器形)とに大別する。Ａ器形については、口縁部の外反の程度や体部と口縁部との境界の屈曲の程度などにかなりの変異があ

り、Ｃ器形例は僅少である。また、大きさには大小があり、深鉢形土器では口径10㎝前後の小形例(第54図９)から口径30㎝を越す例(同８)まである。

本類の縄文以外の文様施文は一部を除き、口縁部もしくは口縁部から体部との境界部分までに限定される。体部および一部資料の口縁部には縄文が施文されるが、LR縄文が優勢である。以下、口縁部文様をもとに分類する。ただし、本類の文様は１類と異なり、個々の土器によって変異が大きい。また、第１次調査出土資料を含めた総合的、体系的な検討ができないため、下記の分類は暫定的なものである。

分類では口縁部文様に一定の系統関係を仮定し、Ⅰ系(連弧文系)、Ⅱ系(入組三叉文系)、Ⅲ系(刺突文系)の３系統を設定する。ただし、他系統の文様要素や構成等を取り入れたと想定される例も認められ、実態としては各系統を截然とは分け難い。さらに、各系統に対比し難い例も存在し、今後の検討が必要である。

Ⅰ系(連弧文系)

弧状の沈線を連ねた「連弧文」、あるいは「連弧文」と組み合わされる文様と関係すると推定する文様を施すものをまとめる。連弧文の形状、文様の構成等からa種～c種に細分する。

a種(第51図１～16、第58図１～３)：口縁部に弧線を連ねて連弧文を描き、口縁部体部境界に横位沈線もしくは刺突列を充填した横位平行沈線を巡らす。Ａ・Ｂ両器形が主体を占めるが、例外的にＣ器形も存在する(第51図16)。また、Ａ器形には、体部上位が丸みを帯びて内湾し、口縁部が直立気味に立ち上がる台付鉢形土器がある(第58図２)。連弧文の各弧線は連続して一筆書き状に描くのではなく、弧線ごとに描き分ける。弧線は上側が開くもの(「上向き連弧文」と呼ぶ)と逆になるもの(「下向き連弧文」と呼ぶ)とがある。前者では弧線が二重となる例が多く、さらに多重となるものもある(第51図11、第58図１)。後者は一重である。また、口縁部体部境界の横位平行沈線間に充填する刺突列は短沈線に近い横長の横位刺突が一般的であるが、縦長で横に刺突による粘土盛り上がりが残る例もある(第51図１)。本種の文様構成では、部分的に刺突をさらに加える例(第51図２・３・14～16、第58図２)、口縁部に縄文地文がある例(第51図４)などのほか、口唇部に角状の瘤を付けた小突起が付き、小突起から口縁部に連弧文と円形透かし穴および円形刺突を加え、体部に下向きと上向きの連弧文を入り組むように施した鉢形土器(第58図３)もある。口縁端部の形状には、波状口縁(第51図１)、頂部が分かれる小山形突起が連なるもの(同２)、小山形突起間に刻み目列を施すもの(第58図２)、平縁で口唇部に刻み目列を施すもの(第51図14)、平縁のもの(同15、第58図１)などがある。

b種(第52図１～８)：口縁部上半に上向き連弧文を施し、下半にも文様を施すもの。多くは口縁部体部境界には横位沈線あるいは刺突列を充填した横位平行沈線を巡らす。Ａ器形深鉢形土器がほとんどである。口縁部下半の文様には、横長の楕円形区画内に縄文を充填したもの(第52図１)、横方向の横長の曲線状の沈線を施したもの(同２)、末端が渦巻く下向きの弧線と上向きの弧線を入り組ませたもの(同３)、下向き二重連弧文と口縁部体部境界の横位沈線に連結する刺状の山形沈線を施したもの(同４・５)、弧線が連結した波形の沈線を連ねたもの(同８)などがある。口縁端部の形状は、低波状口縁(第52図１)、小山形突起が付くもの(同４・５)、頂部が分かれる小山形突起が付くもの(同７)などがある。

c種(第53図１～11、第58図４・５)：口縁部に渦巻き状～Ｃ字状の曲線文を施すもの。深鉢形土器に

はＡ・Ｂ両器形があり、鉢形土器はＢ器形である。Ａ器形深鉢形土器では外反する口縁部と体部との境界が屈曲して稜をなす特徴的な形態のものがある（第53図１・２）。連弧文は施されないが、第53図１では、b種の第52図３の口縁部下半の弧線を入り組ませた文様と類似した弧線の両端が渦巻く文様を施したり、第53図２では、b種の第52図４・５などと類似する口縁部体部境界の横位沈線に連結する山形沈線を施すなど、基本的にb種の口縁部下半の弧線等を組み合わせた文様と関係すると想定される。ただし、b種の文様と比較するとより変容が著しい。口縁端部の形態には、小山形突起が付くものが多い（第53図１・２・４など）。

Ｉ系の特徴の一つである連弧文は、東北北部の大洞B1式の山形波状口縁深鉢形土器の口縁端部に施される弧状沈線の系譜を引くものと想定される。第52図1は大洞B1式の影響を残す例であろう。このように、連弧文を前時期の大洞B1式からの系譜を引くものと想定するならば、c種には連弧文が消失することと文様の変容が著しいことから、Ｉ系の中では相対的に後出的な特徴を認めることができようか。

Ⅱ系（入組三叉文系）

入組三叉文もしくはその変異と想定される文様を施すものをまとめる。a種～e種に細分する。

a種（第53図12～14、第54図１）：入組三叉文を施すもの。JB群１類とは異なり、いずれもミガキ調整を施さない。ほとんどがＡ器形の深鉢形土器である。一般に横位沈線もしくは刺突を充填した横位平行沈線で口縁部の上下端を区画する[註10]。東北北部の大洞B2式に一般的な、点対称に三叉部同士が入り組む形の入組三叉文と異なり、三叉部とは反対側の末端が湾曲する三叉文が、それぞれ三叉部と末端とが入り組む形で連続するものがある（第53図12）。また、縄文地に入組三叉文と刺突列を充填した二重の弧状沈線とを施すもの（第54図１）もある。口縁端部は頂部が分かれた小山形突起が付く例が多い。

b種（第54図２～９、第58図６）：末端が入り組むように連続する横位逆Ｓ字もしくはＳ字状沈線（以下、「入組Ｓ字文」と呼ぶ）を施すもの。この入組Ｓ字文は、第53図12等の三叉部と末端とが入り組んで連続する特徴がある入組三叉文の三叉部分の分岐を省略したものと同一形であり、当該入組三叉文が簡略化したものと想定される。深鉢形土器はＡ器形、鉢形土器はＢ器形である。本種には、横位沈線などで口縁部の上下端を区画する例（第54図２）のほか、口縁部下端のみを区画する例もある。後者には入組Ｓ字文に刺突列を加える例があり（第54図８・９）、より変容したものと評価できるかもしれない。口縁端部の形態では、平坦な口唇部に刻み目列を加える例が多い。また、第54図９は台付の小形の深鉢形土器である。

c種（第55図１～３）：横位Ｓ字状沈線～渦巻き状沈線を入り組ませた文様を施すもの。b種の入組Ｓ字文から変化したものと考えられる。Ａ器形の深鉢形土器が認められる。口縁部上下端は横位沈線で区画する例が多い。第55図１は横位沈線で区画した口縁部上端に縄文を施す。口縁端部は平縁が多い。一部に刻み目を加える例がある（第55図１）。

d種（第55図４～13）：波状の沈線文（以下「波状文」と呼ぶ）を施すもの。波状文は連弧文とは異なり、原則として一筆書き状に連続して描かれる。Ａ器形深鉢形土器のほか、僅かにＢ器形深鉢形土器も存在する（第55図６・11）。口縁部下端のみを横位沈線で区画する例がある（第55図９）が、口縁部上下端を横位沈線で区画する例が優勢である。このほか縄文地口縁部の上下端を横位刺突列で区画する例（第55図11）もある。口縁端部は、小突起が連続するもの（第55図４・９）もあるが、平縁のものが多く、

一部に口唇部に刻み目を施すものがある(同５など)。本類で優勢な口縁部下端とともに上端も区画する例は、Ⅰ系の連弧文系資料では比較的少なく、Ⅱ系の入組三叉文系資料に顕著である。このことから、本類の波状文は、連弧文からの変化した可能性も想定し得るものの、ここでは入組Ｓ字文から変化したものとして、本類をⅡ系に含めておく。ここでの入組Ｓ字文から波状文への変化を認めるとすると、本種は相対的に後出の可能性があろう。

e種(第55図14・15、第56図１・２)：一部が入り組む横方向から斜め方向の曲線状の沈線に部分的刻み目もしくは刺突を加えるもの。本類は一部に入組状の沈線が認められることから、Ⅱ系に含めたが、例数が乏しく、かつ、口縁部が縄文地となるものがある(第56図１・２)など変異が大きい。Ａ器形深鉢形土器のほか、Ｂ器形深鉢形土器もある(第56図１)。口縁端部は、小山形口縁もしくは小山形突起が連続するものが多い(第55図15、第56図１・２)。本種は、第55図14のように入組状の沈線に一部刻み目列を加えて単位となる文様を構成する点は羊歯状文と共通すると考え、相対的に後出のものと想定することもできようか。

Ⅲ系(刺突文系)

横位の刺突列もしくは刻み目列および横位平行沈線を主要な文様とするものをまとめる(第56図３～13、第57図１～５、第58図７～12)。深鉢形土器、鉢形土器ともＡ・Ｂ両器形がある。

刺突の形状は、三角形状のもの(第56図10)、方形の押し引き状のもの(同12)、横位の短沈線状のもの(同４、第57図２)、縦位の刻み目列状のもの(第58図９)など多様であり、また、文様の構成にも、口縁部上下端を横位沈線で区画するもの(第56図３)、口縁部下端を横位沈線で区画し、口縁部に複数の刺突列を充填するもの(同４)、横位沈線間に刺突列を充填するもの(同10)など変異が著しい。また、鉢形土器には、横位沈線間に刻み目列を充填したもの(第58図９)のほか、口縁部に横位平行沈線を施した例があり(同10～12)、多様である。ここでは、文様等の系統的な変遷を明瞭に認定し難いことから、細別は行わず、一括しておく。口縁端部は２連から３連の小山形突起が付く例がある(第56図３)が、平縁で、口唇部に刻み目列を施すものが多い。

Ⅰ系・Ⅱ系も含め、口縁端部の突起の形状の違いや口唇部の刻み目の有無などはある程度時期差を反映していると想定されるが、現時点では具体的根拠を欠く。

このほか、類例が乏しいために、ここでは系統認定しなかった例には、口縁部上下端に横位沈線のみ施し、沈線間は無文の深鉢形土器(第57図６)、口縁部から体部全面に不整な曲線文様を施す深鉢形土器(同７・８)、口縁部が無文のＣ器形深鉢形土器(同９)などがある。

以上の深鉢形・鉢形土器のほかに、僅かに浅鉢形土器および壺形土器を確認している。第58図13は赤色塗彩された椀形の浅鉢形土器破片である。口縁部には横位沈線と刻み目列を施し、体部には渦巻き状？の磨り消し縄文を施す。ここでは２類の浅鉢形土器としたが、小破片であり、必ずしも確実ではない。壺形土器は、いずれも破片資料で全体の器形が判明する例はない。口縁部破片では、短い口縁部が外反する小形の器形が認められる。文様には連弧文と刺突列・入組三叉文(第58図14)、渦巻き状の曲線文(同15)、刺突列を充填した横位平行沈線(同16)など多様であるが、深鉢形・鉢形土器の文様種別に大きくは対比可能であろう。

２類は、例えばⅠ系a・b種の連弧文やⅡ系b種の入組Ｓ字文など、上述した東山1b式と類似する要素が認められる。関根は、東山1b式は大洞B2式期(晩期1b期)に併行する土器型式として設定しており(註11)、

これらの土器群も、入組三叉文を施すⅡ系a種も含め、大きくは大洞B2式に併行する可能性が高いものと推定される。Ⅰ系c種、Ⅱ系c・d・e種などについては、上述した文様要素の系統的な変遷等を認めるならば、大洞BC式期前後まで下る可能性も予想されるが、現状では確実な根拠を欠く(註12)。また、Ⅲ系は大きくはⅠ系・Ⅱ系と併存するものであろう。

大洞B2式とJB群２類の出土量を見ると、深鉢形土器については、点数および重量とも比較的近似している(第７表)。おそらく大洞B2式期には２類はある程度まとまった量が出土し、大洞BC式期以降、２類例は減少し、大洞系(精製)土器が主体を占めるものと推定される。

既述のように、２類と東山1b式とには、文様要素やその構成に共通要素も認められる。その一方で、２類には、東山1b式に特徴的な縄文地文の口縁部に刺突列を施す深鉢形土器は認められず、東山1b式にはⅠ系c種に対比可能な例は顕著ではない。さらに、２類の器種組成では、ほとんどが深鉢形土器・鉢形土器で占められ、関根達人が東北地方にはみられないか、極めて稀と指摘する東山1b式に存在する体部が屈折し口頸部が短く直立する浅鉢形土器や上面観が舟形などの異形を呈する浅鉢形土器が認められないなど相違点も少なくない(註13)。現時点では、津軽地方など本遺跡の周辺地域の状況が不明瞭であるが、北海道南西部～東北北部の中で地域差があるものと考えられる。

《時 期・性 格》第１次・第２次調査結果を総合すると、盛土およびその直下の堆積層は、大きくは以下のように変遷する。まず、縄文時代晩期当初の地表面直上には、大洞B2式期から大洞C2式期にかけて大量の遺物が堆積する。特に相対的に浅い窪地に位置するSQ127環状配石遺構周辺では大洞BC式期から大洞C1式期にかけて遺物が集中的に堆積し、遺物包含層を形成する(盛土直下層)。遺物包含層としての分布は、SQ127環状配石遺構周辺の浅い窪地状地点とその北側の緩斜面が中心である。本層中には、大量の遺物のほかに赤色顔料撒布跡のように儀礼的行為の痕跡と想定されるものも存在する。遺物包含層は、SQ127環状配石遺構周辺全面を覆うように形成されており、SQ127環状配石遺構をはじめとした周辺の諸施設と関わる儀礼的廃棄行為の所産と想定することが可能であろう。その後、もしくは遺物包含層形成の後半段階と平行して、NQ37区周辺から周囲に向かって、主として厚さ10～20㎝前後の薄層状となる0.4～２㎥程度の土砂のまとまりが人為的に繰り返し積み上げられて累積する。積み上げは盛土中央部から南側では大洞C1式期に盛行し、北端側では大洞C2式期まで継続したものと推定される(盛土中下位層)。積み上げのための土砂は北側の崖錐堆積層(Ⅱe層)から採取したと想定することが現時点では妥当であろう。本層群中には、明確な遺構は確認できず、また、赤色顔料撒布跡のような儀礼的行為の痕跡も認められない。出土遺物の主体をなすのは、深鉢形土器および鉢形土器で、これに一定量の浅鉢形土器が伴うと推定される。調理具および飲食具を主体とした遺物が廃棄されるとともに、土砂が繰り返し積み上げられたと想定され、その性格は前時期とは変容している可能性が強い。調理・飲食などと関わる大量消費行為の痕跡と評価することもできよう。その後、大洞C2式期のうちに、盛土頂部を削平し周囲の低位部分を埋め立て、あるいは、北側の崖錐堆積層などから土砂を採取し、盛土周囲の低位部を埋め立てたと判断される(盛土上位層)。このような埋め立て行為は、盛土上面とその周囲を平坦に造成する、さらには、その造成面に何らかの施設を構築する意図があったとする想定もあり得るかもしれない。盛土上面で遺構は未確認であるが、盛土上位は水田造成により削平されていることから、現状ではその当否については断定できない。

このように、SM60盛土は、大洞BC式期から大洞C1式期にかけて、周辺に造成された儀礼的施設な

どを覆うように大量の遺物が堆積し、その後の大洞C1式期から大洞C2式期にかけて、遺物廃棄とともに土砂積み上げが繰り返し行われ、最終段階の大洞C2式期に盛土周辺が埋め立てられるという、大きくは３段階の変遷をたどるものとみられる。上述のように、当初の段階の遺物堆積は儀礼的施設に関わる儀礼的廃棄行為の所産の可能性が強く、その後の大量の遺物を伴う盛土形成は調理・飲食などと関わる大量消費行為の所産であったと想定される。最終段階の盛土周辺の埋め立てについては、現時点ではその性格は判然としない。

註１　当該面は、大きくは上位の段丘面に相当するものと推定されるが、全体に起伏に富み、明瞭な平坦面を形成しない。本面の形成過程については、なお検討する必要があろう。

註２　第１次調査で盛土より上位の崖錐堆積の可能性ある層としたⅡa層に大きくは対応する可能性も想定されるが、連続性を直接確認していないため、Ⅱa′層とする。

註３　現在所在不明であるが、調査時にⅡe₂層相当層で縄文時代晩期前後の縄文土器破片を確認した。

註４　今回の調査所見から、南北断面②では、第１次調査報告の34層は今回の調査区寄りで南側の土砂積み上げ部分（M49層）と北側の遺物が集中する旧表土部分（M57層）とに上下に分かれるものとして修正した。さらに、東西断面②では、同報告57層は分布が断面中央付近に限定され（M56層）、その下位の58層が東西方向に広がるもの（M57層）として修正した。また、同断面②東側の第１次調査報告53・54・57・58・60層には、NP39方眼杭を挟んだ部分の対応にずれがあったため訂正した（M18・M57・M63層）。

註５　M54層からは大洞C2式土器は出土しておらず、M55層では、全体で487点9,942ｇの縄文土器が出土し、そのうち、大洞C2式土器は６点34ｇである。

註６　当該例は、第１次調査でごく少量確認している（第１次調査報告書第55図６など）。

註７　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書　ふるさと農道緊急整備事業大芦地区関連発掘調査』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第306集　1999（平成11）年

註８　関根達人　「大洞系・類大洞系・非大洞系土器の検証　－道南・道央における縄文晩期初頭の土器型式構造－」　東北大学大学院文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退任記念論文集刊行会編『考古学談叢』　2007（平成19）年

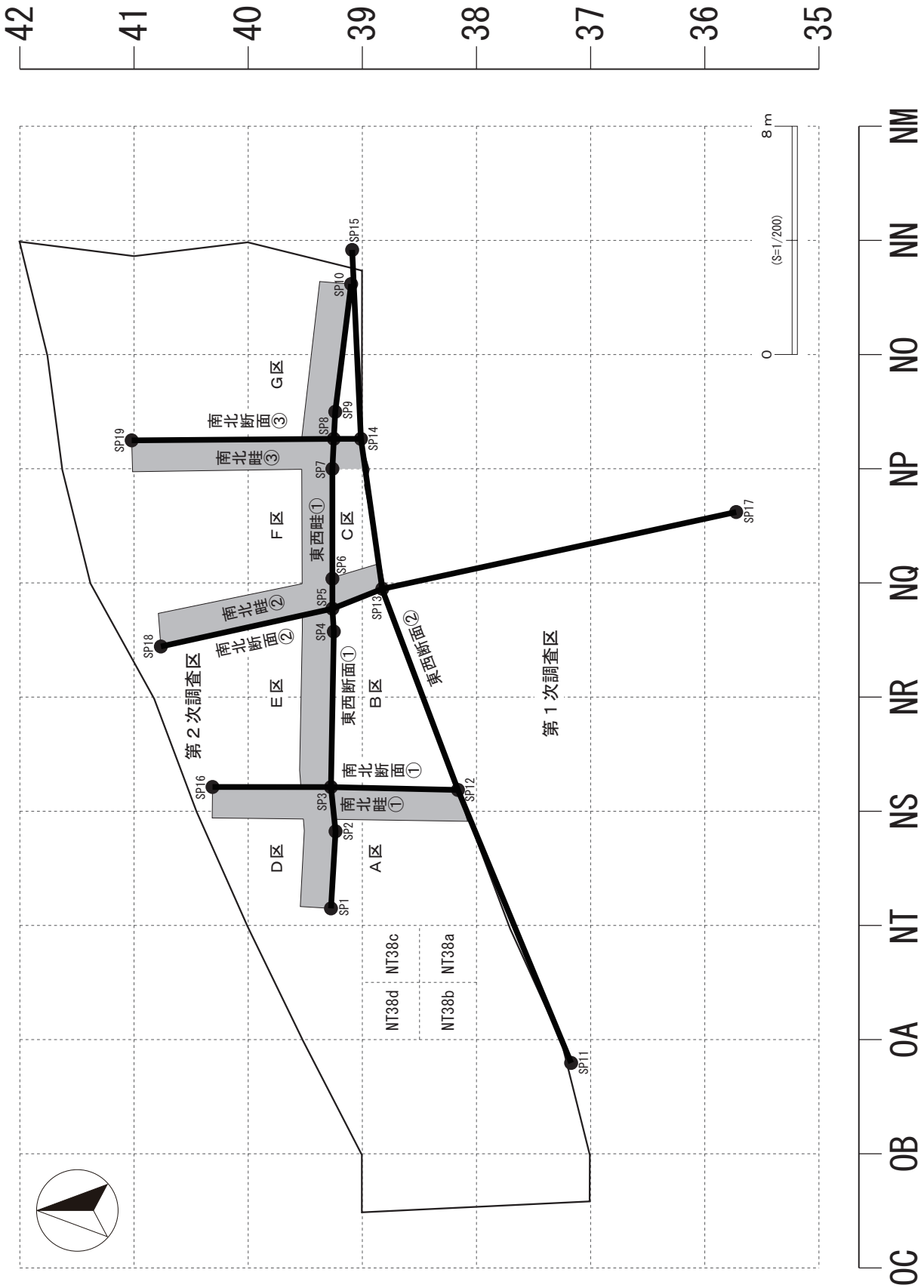
註９　JB群２類の類例は、向様田Ａ遺跡などの森吉山ダム建設事業地内の遺跡でも出土しているほか、北秋田市白坂遺跡などでも散見される（報告書第34図110、第35図116、第44図209など）。
秋田県教育委員会　『白坂遺跡発掘調査報告書　－県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第244集　1994（平成６）年

註10　第１次調査報告書第41図13・第69図11は口縁部上半に連弧文、口縁部下半に入組三叉文を施し、口縁部下端は横位平行沈線で区画する。Ⅰ系b種とⅡ系a種の文様要素の供伴個体と捉えるならば、両種が併行することを示唆するものであろう。

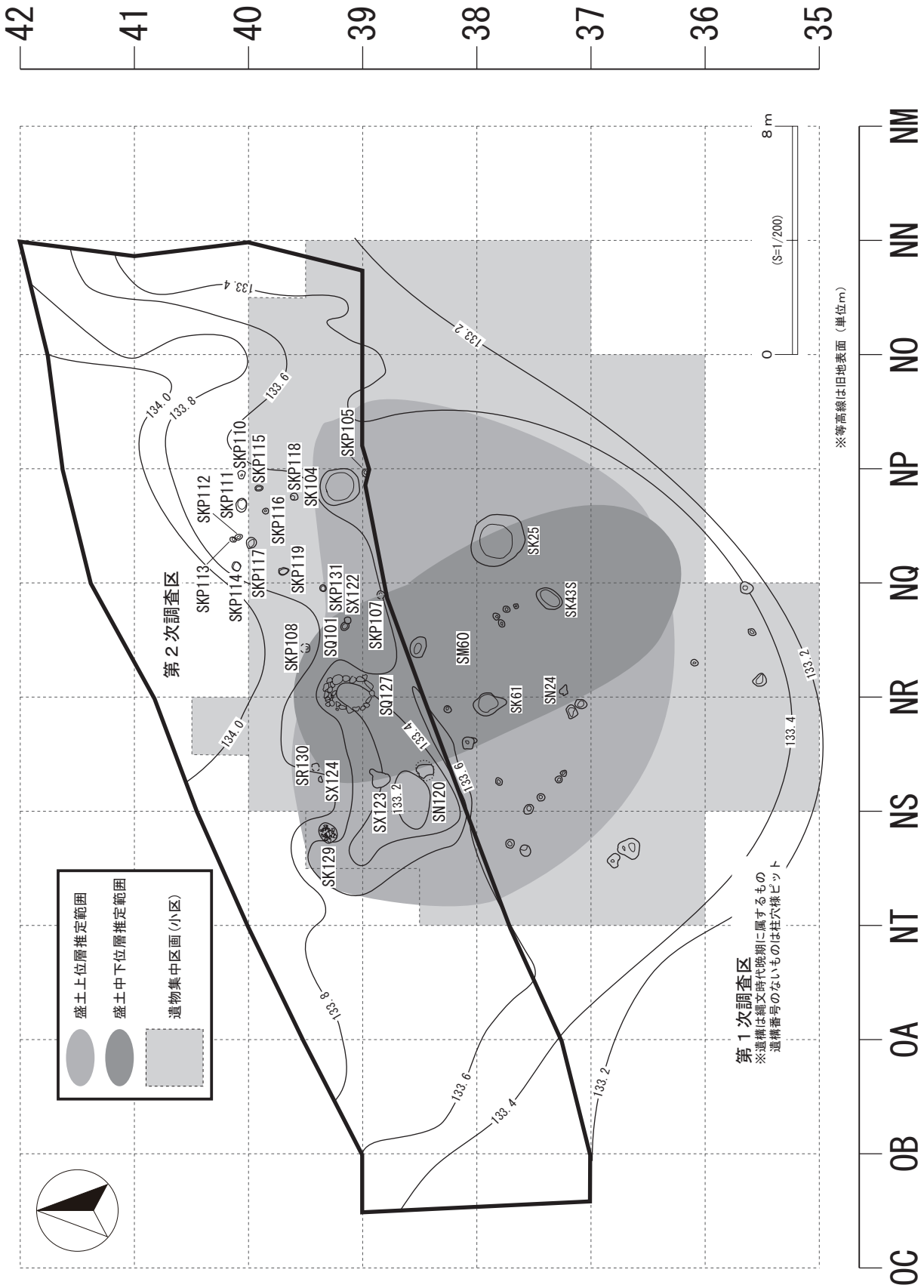
註11　東山1b式については、今後、その一括性の検証や大洞系注口土器との併行関係の検討が必要であろう。

註12　関根は、註８文献で東山1b式には大洞BC式～大洞C1式に併行する上ノ国式が後続するとし、東山遺跡出土土器から該当する資料を提示している。本遺跡のJB群２類土器と比較すると、Ⅱ系d種の波状文などは類似するが、総体として、相互に直接対比可能な資料は少ない。

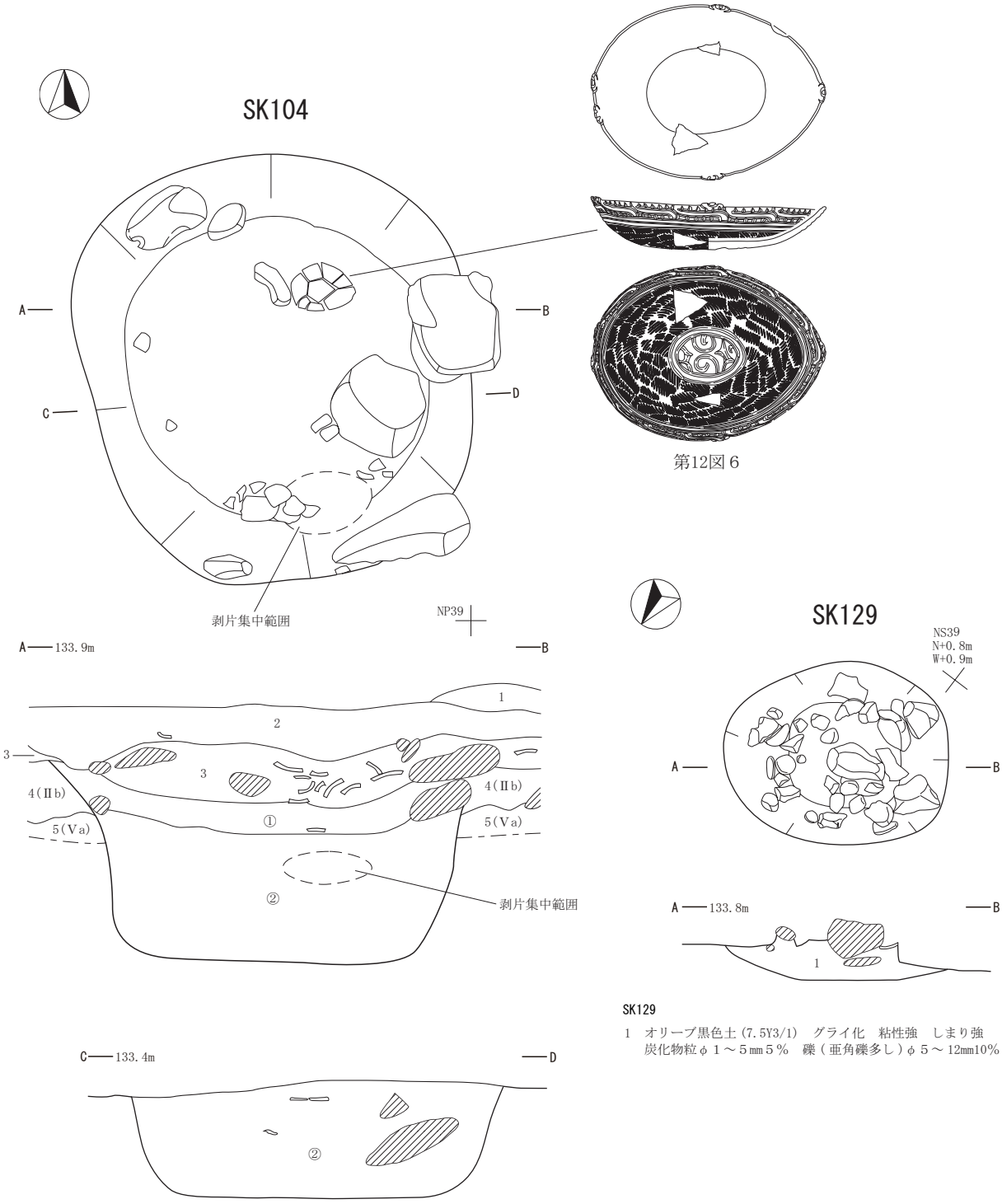
註13　註８文献
さらに、関根が註８文献で、大洞BC式併行期（上ノ国式）において東北地方の晩期縄文土器にみられない特徴として指摘している台部の抉り込みをほとんどもたない台付（浅）鉢形土器や体部が筒状を呈し口縁部が直線的に開く台付鉢形土器、あるいは有段広口壺形土器などもJB群２類には認められない。



第３図　方眼配置と畦および土層断面位置


42
41
40
39
38
37
36
35
OC
OB
OA
NT
NS
NR
NQ
NP
NO
NN
NM
0
(S=1/200)
8 m
※等高線は旧地表面（単位m）
第２次調査区
第１次調査区
※遺構は縄文時代晩期に属するもの
遺構番号のないものは柱穴様ピット
盛土上位層推定範囲
盛土中下位層推定範囲
遺物集中区画（小区）
SKP110
SKP115
SKP118
SKP104
SKP105
SKP112
SKP111
SKP116
SKP113
SKP114
SKP117
SKP119
SKP131
SX122
SKP107
SKP108
SQ101
SQ127
SR130
SX124
SX123
SN120
SK129
SM60
SK61
SN24
SK25
SK43S
133.4
133.2
133.6
133.8
134.0
133.9

第４図　遺構配置図



第12図６

SK129

1　オリーブ黒色土(7.5Y3/1)　グライ化　粘性強　しまり強
炭化物粒φ１～５mm５％　礫（亜角礫多し）φ５～12mm10％

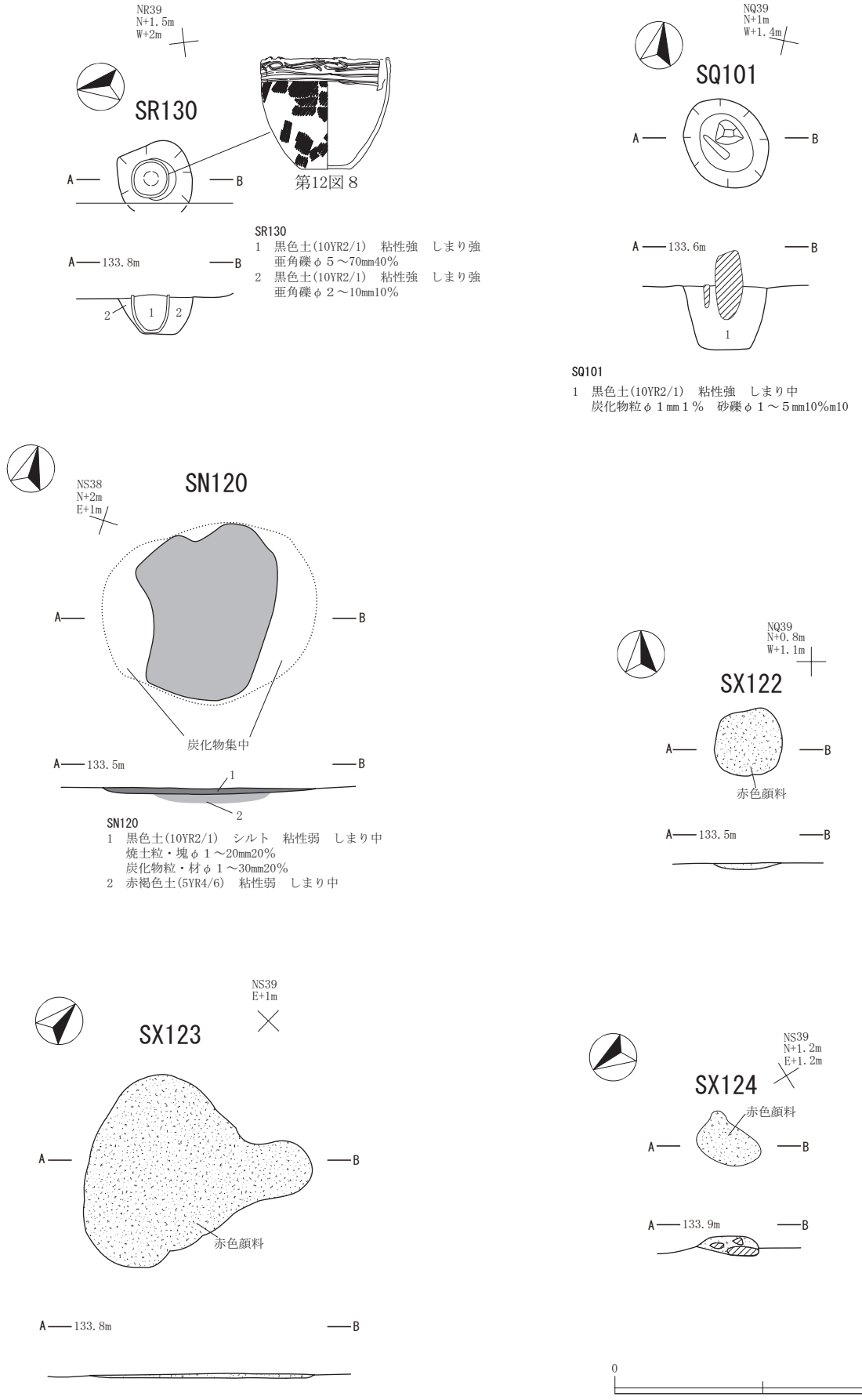
SK104
①　黒褐色土(10YR3/1)　粘性中　しまり強　炭化物粒φ１～５mm５％　砂礫(亜角礫多し)φ１～10mm20％
②　黒色土(10YR2/1)　粘性強　しまり強　炭化物粒φ１～10mm５％　砂礫φ１～400mm20％

1　M17層
2　M18層
3　M57層
4　M63層
5　M70層

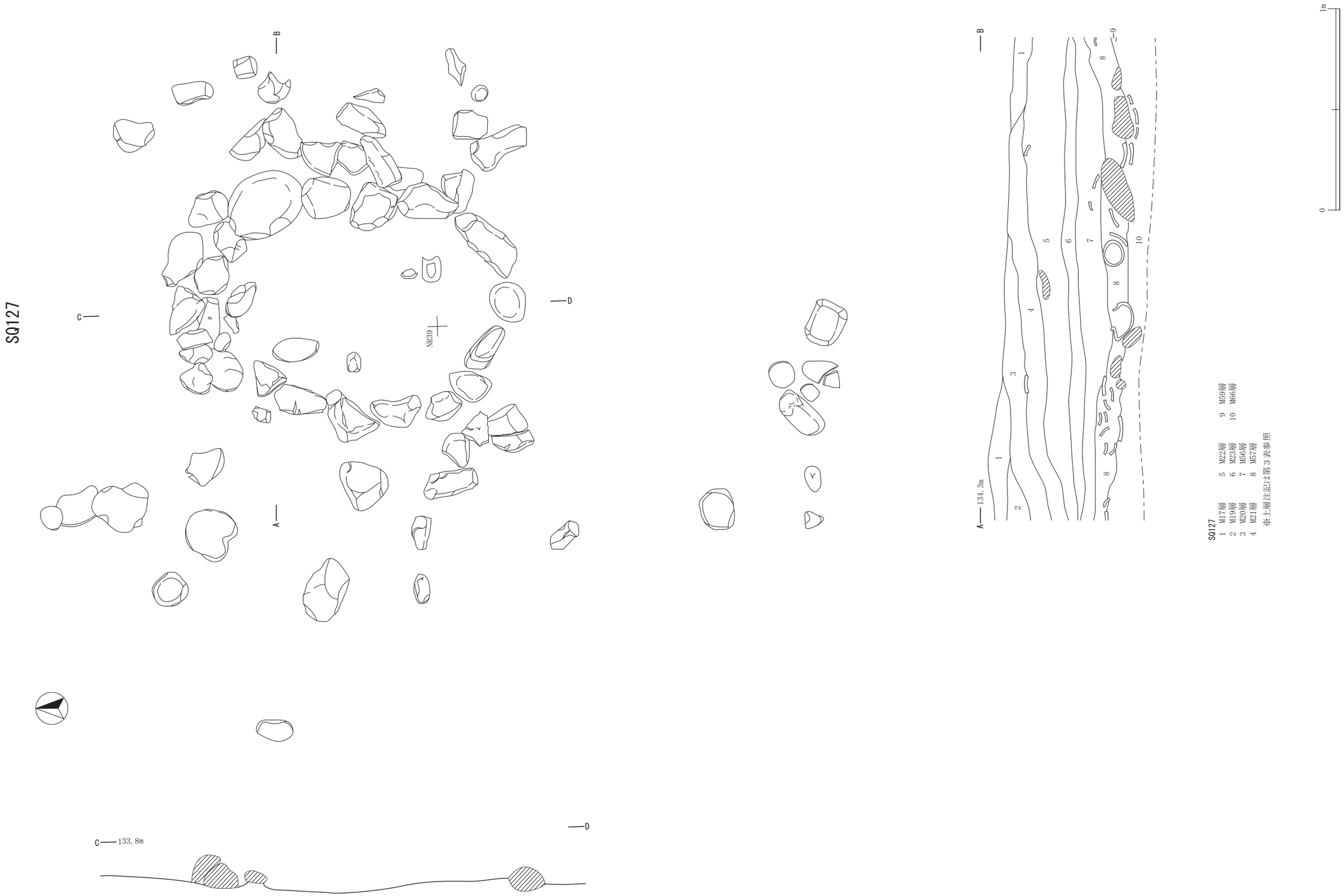
※１～５層土層注記は第３表参照

0　1m

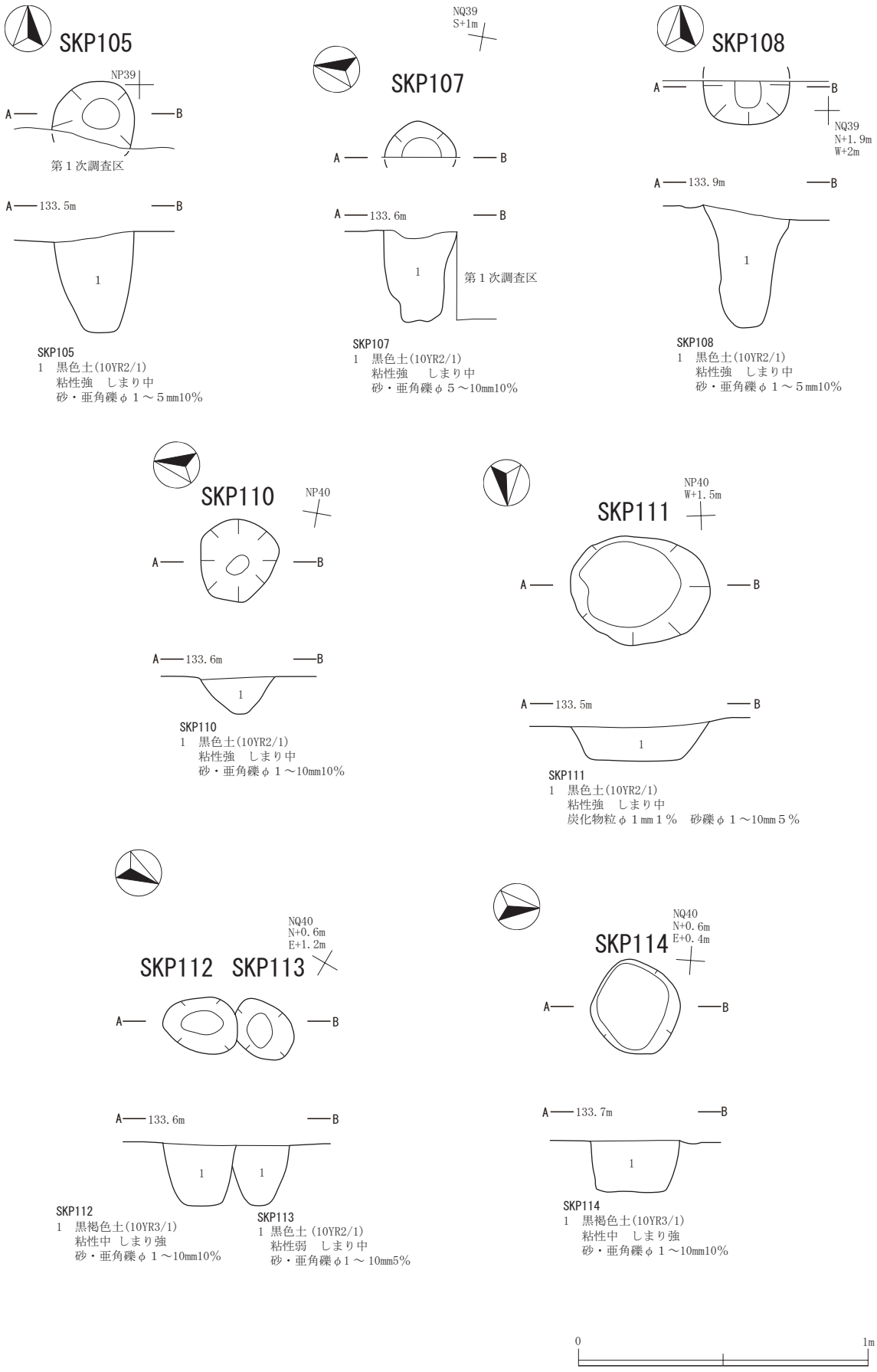
第５図　SK104・129土坑



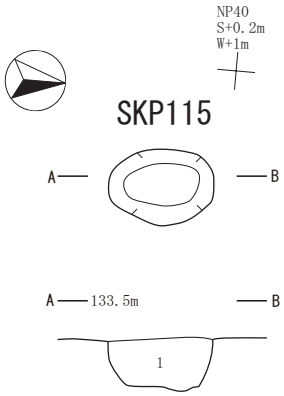
第６図　SR130土器埋設遺構・SQ101立石遺構・SN120焼土遺構・SX122・123・124赤色顔料撒布跡



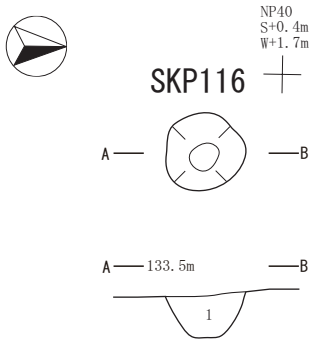
第７図　SQ127配石遺構



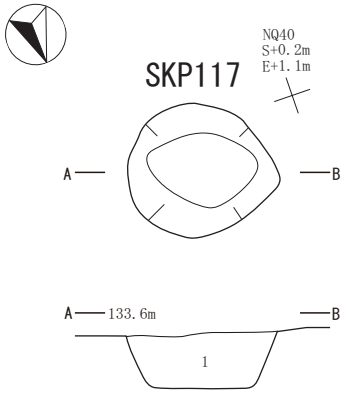
第８図　SKP105・107・108・110・111・112・113・114柱穴様ピット



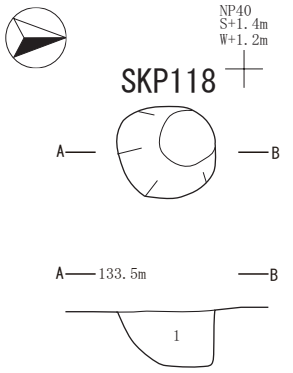
SKP115
1　黒色土(10YR2/1)
　粘性強　しまり中
　砂・亜角礫φ１～10mm10%



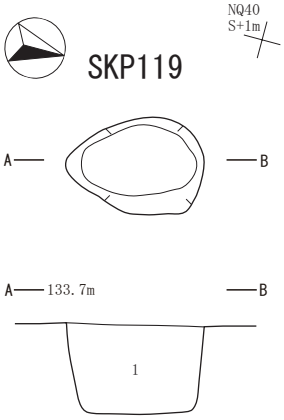
SKP116
1　黒色土(10YR2/1)
　粘性強　しまり強
　炭化物粒φ１mm１%　砂・亜角礫φ１～５mm10%



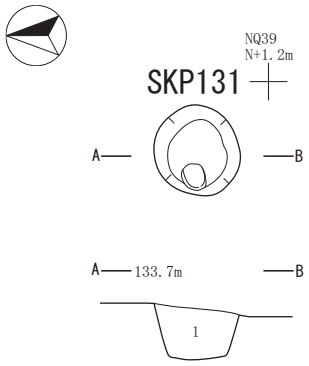
SKP117
1　黒色土(10YR2/1)
　粘性強　しまり強
　炭化物粒φ１～２mm１%
　砂・亜角礫φ１～10mm10%



SKP118
1　黒褐色土(10YR3/1)
　粘性強　しまり中
　砂・亜角礫φ１～30mm10%



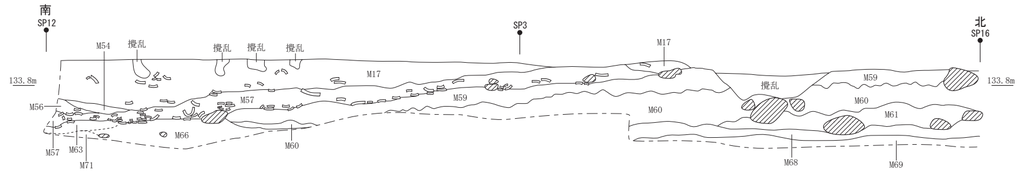
SKP119
1　黒色土(10YR2/1)
　粘性強　しまり強
　炭化物粒φ１mm１%
　砂・亜角礫φ１～10mm20%

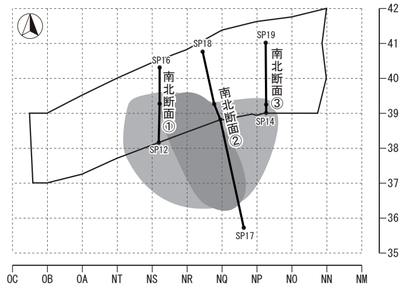


SKP131
1　黒褐色土(10YR3/1)　粘性中　しまり強
　砂・亜角礫φ１～10mm10%

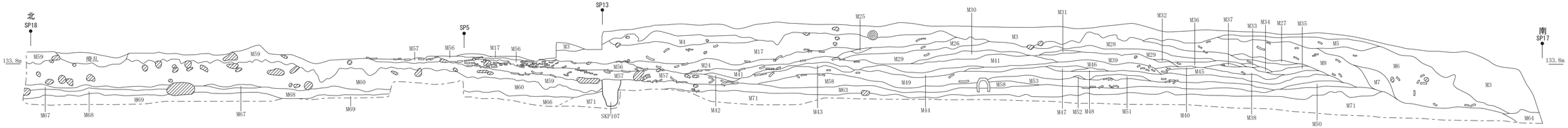
第９図　SKP115・116・117・118・119・131柱穴様ピット

南北断面①

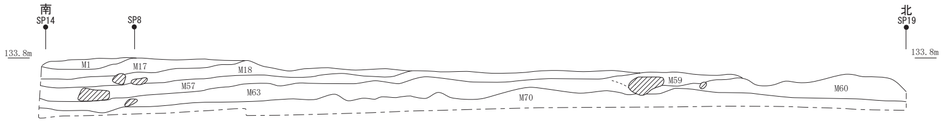




南北断面②



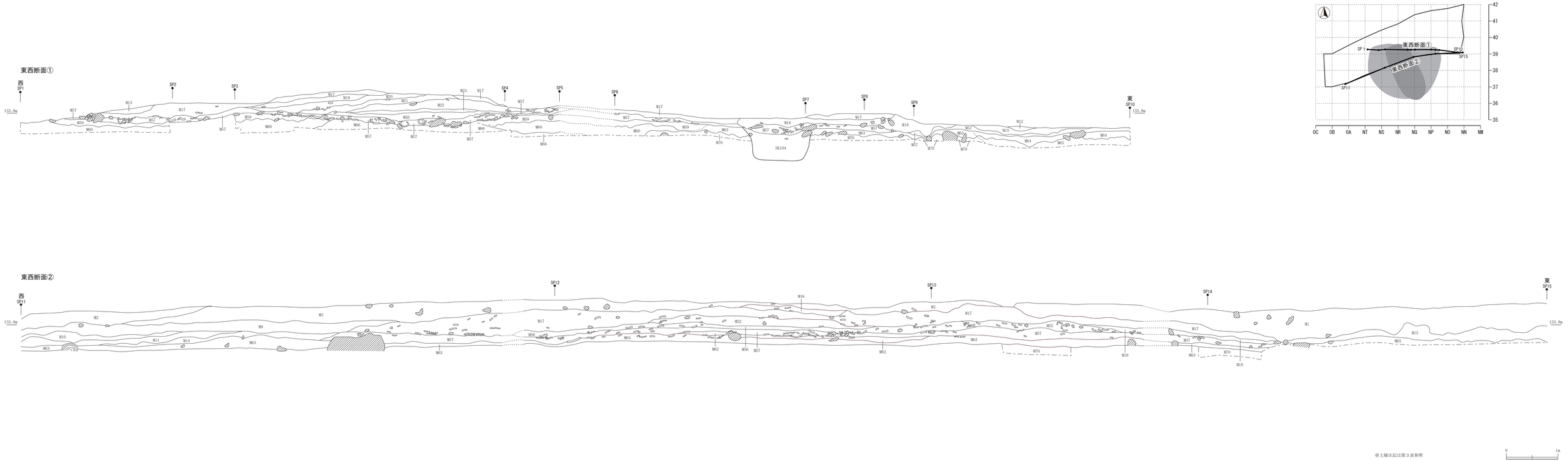
南北断面③



※土層注記は第３表参照

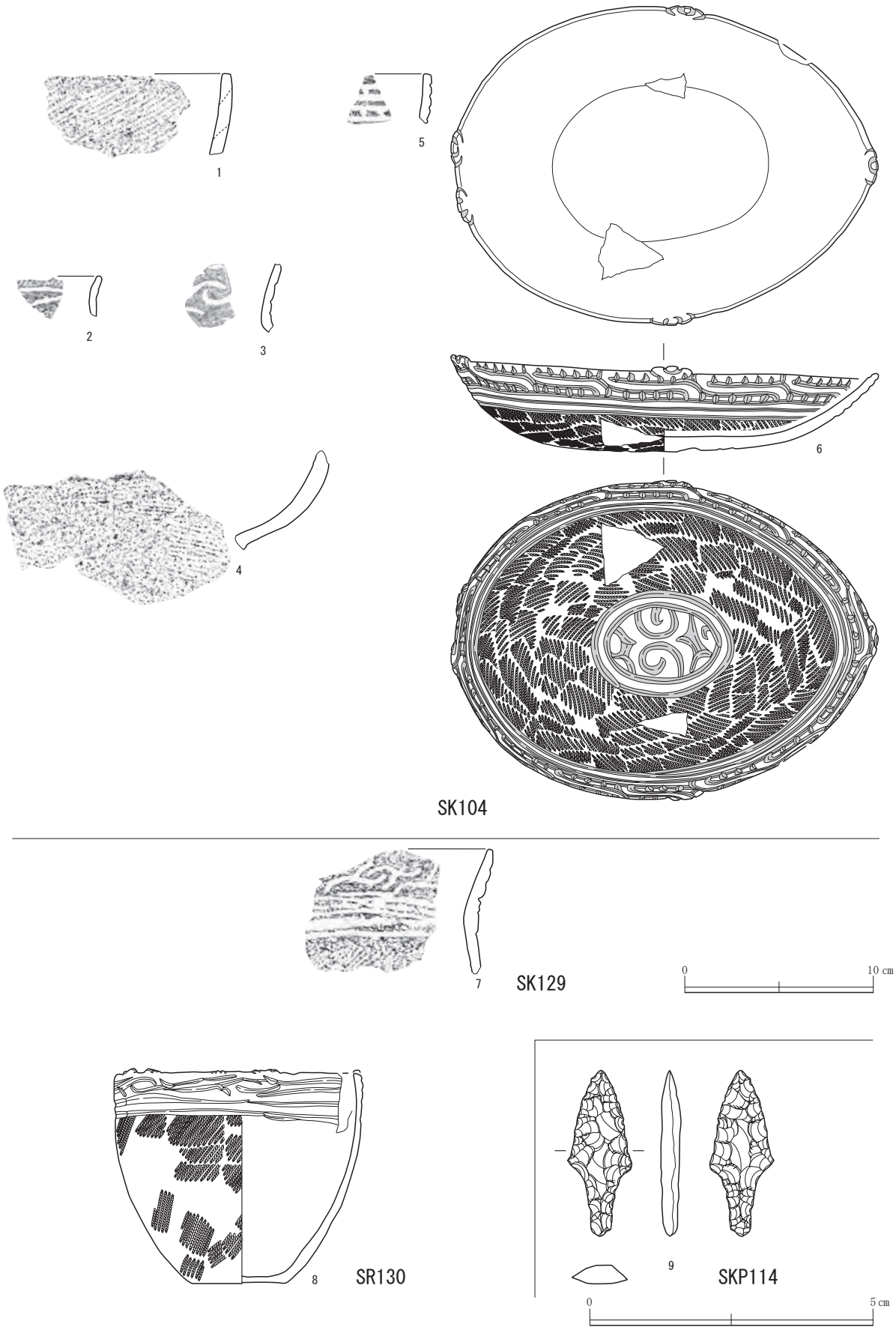
0　1m

第10図　SM60土層断面（１）

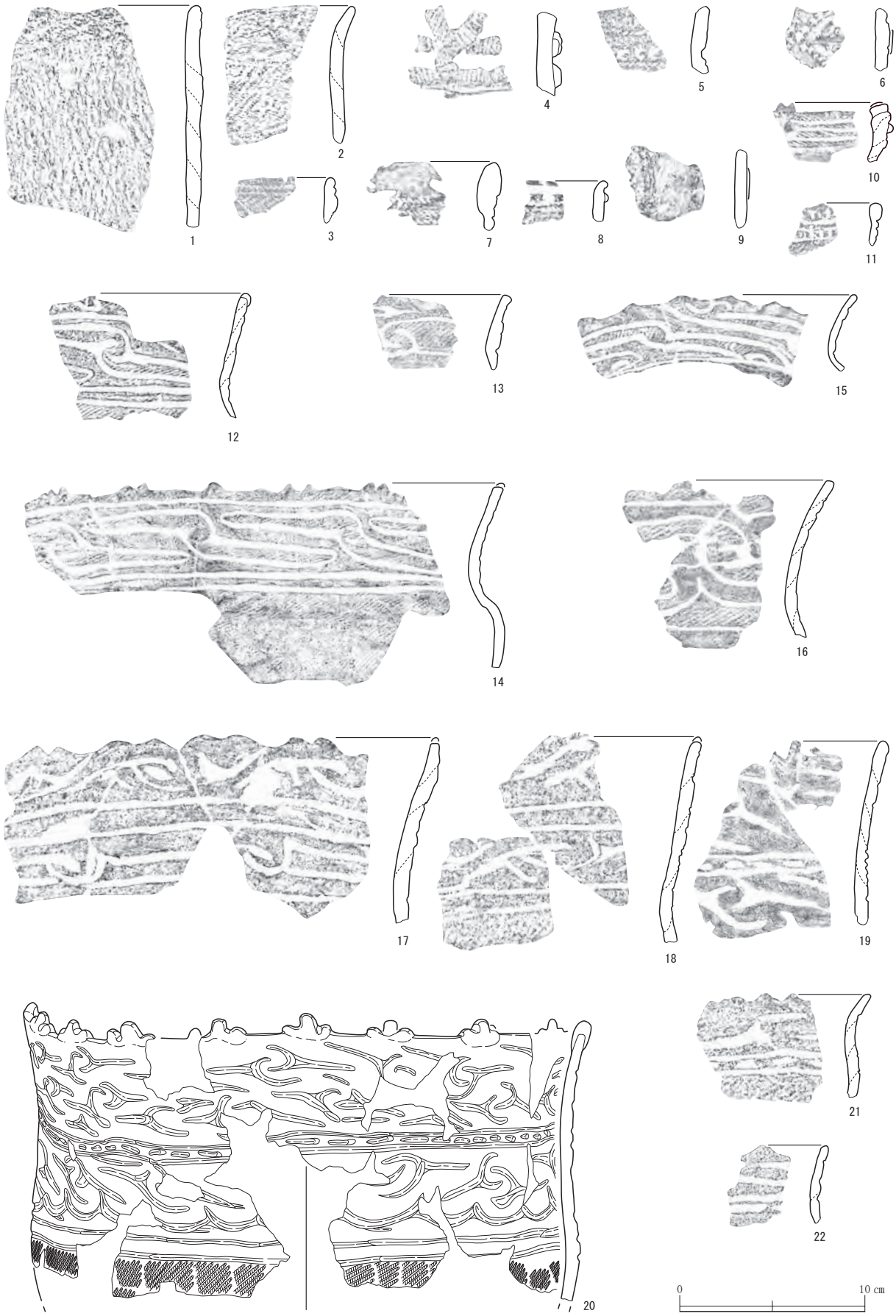


※土層注記は第３表参照

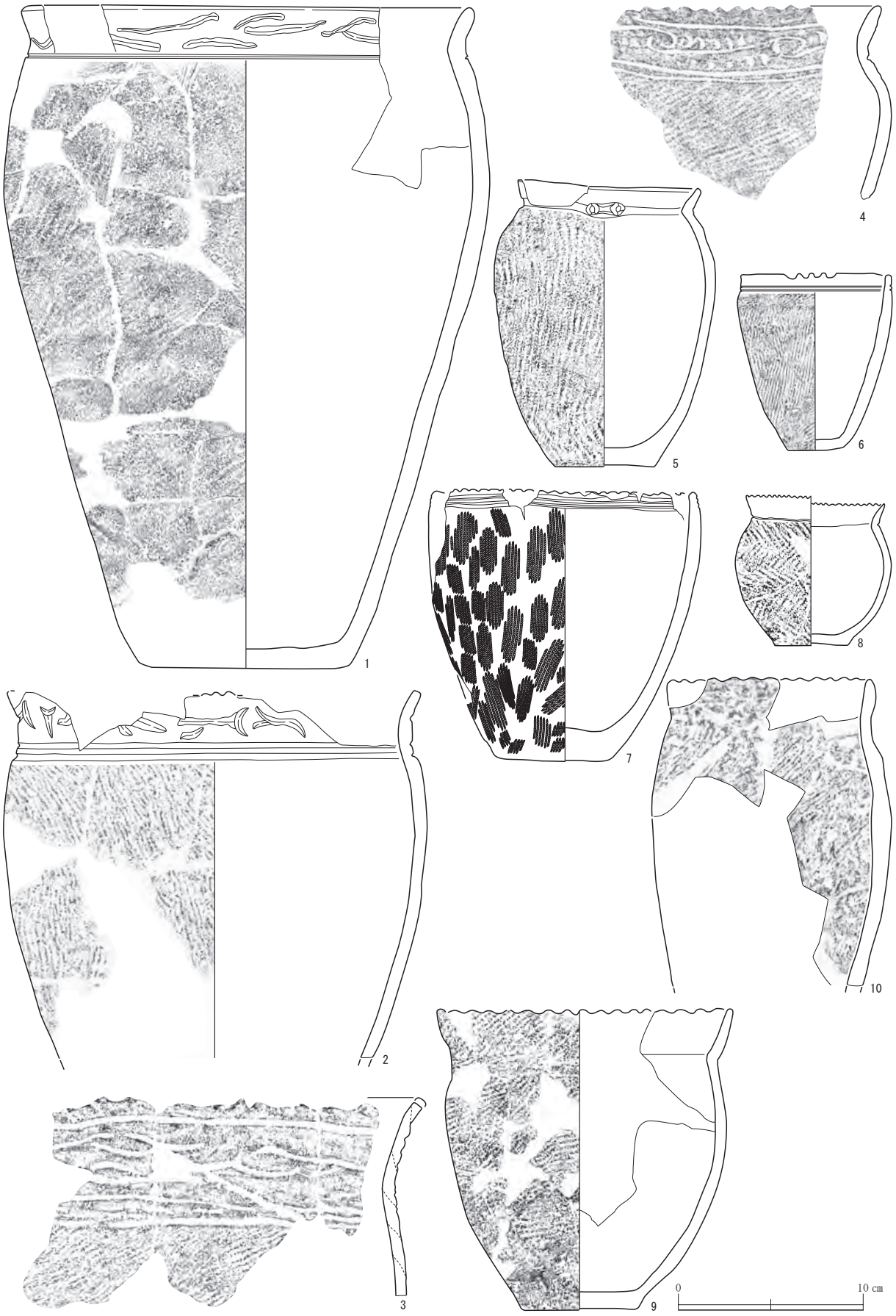
第11図　SM60土層断面（２）



第12図　SK104・SK129・SR130・SKP114出土遺物

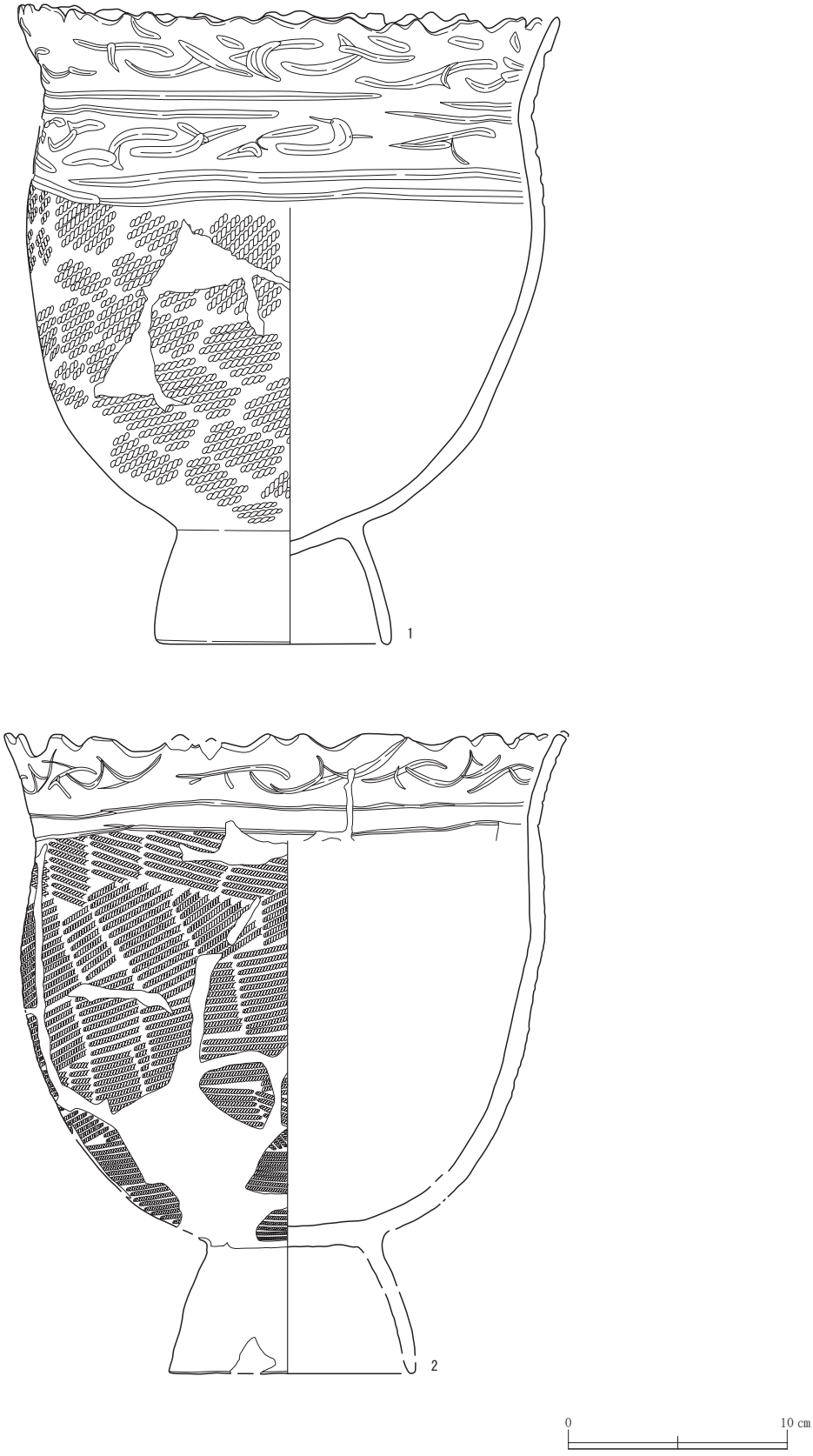


第13図　SM60出土遺物（１）



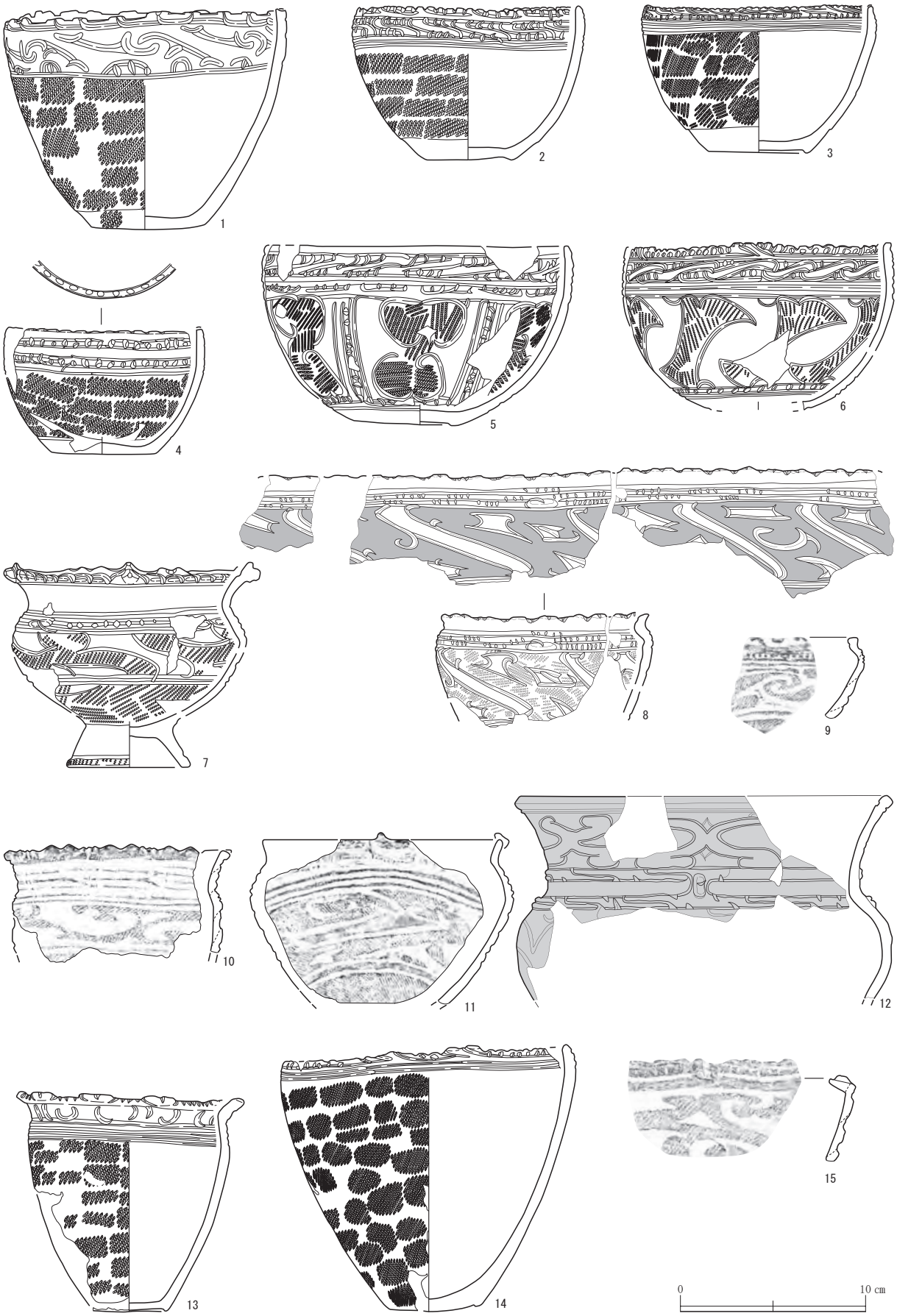
第14図　SM60出土遺物（２）

第15図　SM60出土遺物（３）

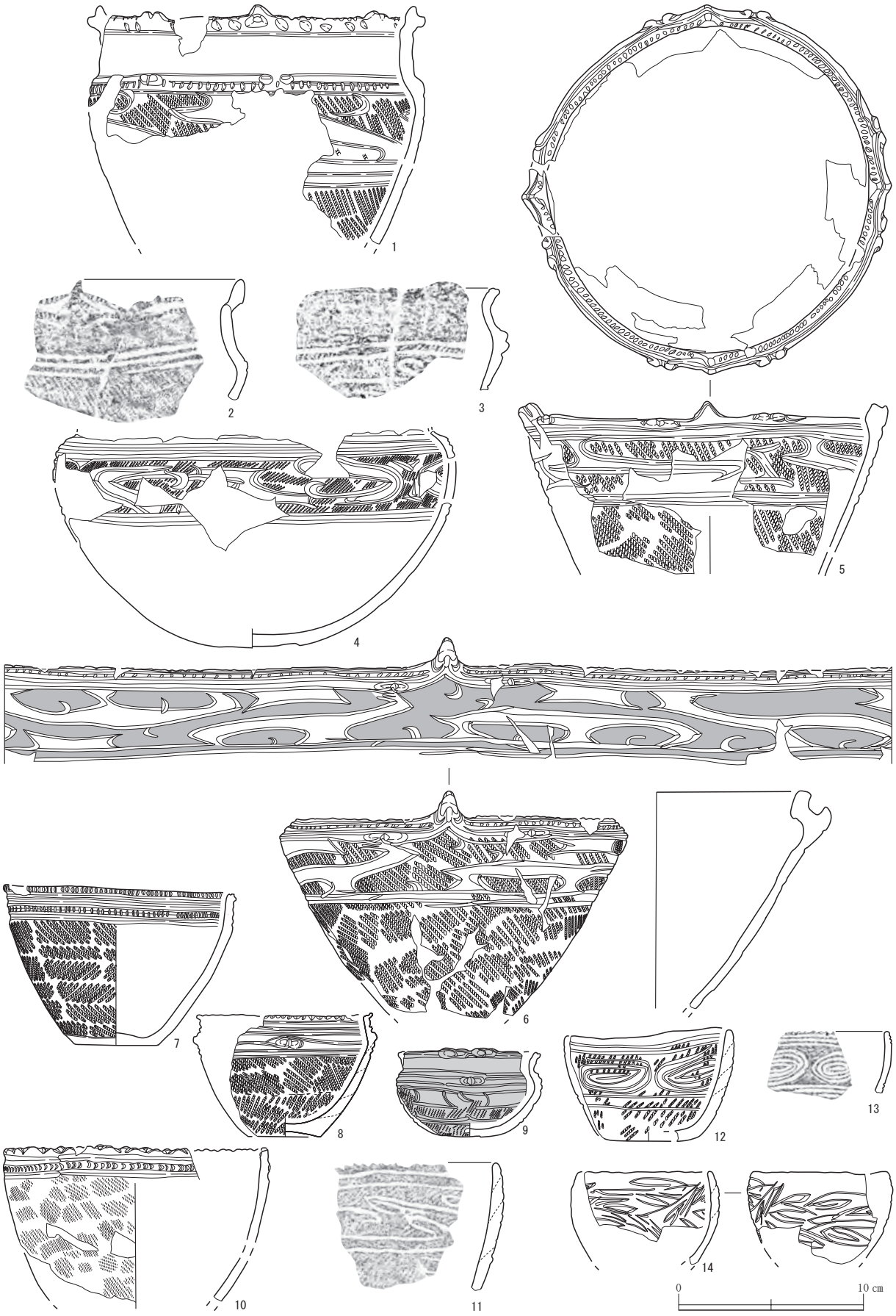


第16図　SM60出土遺物（４）

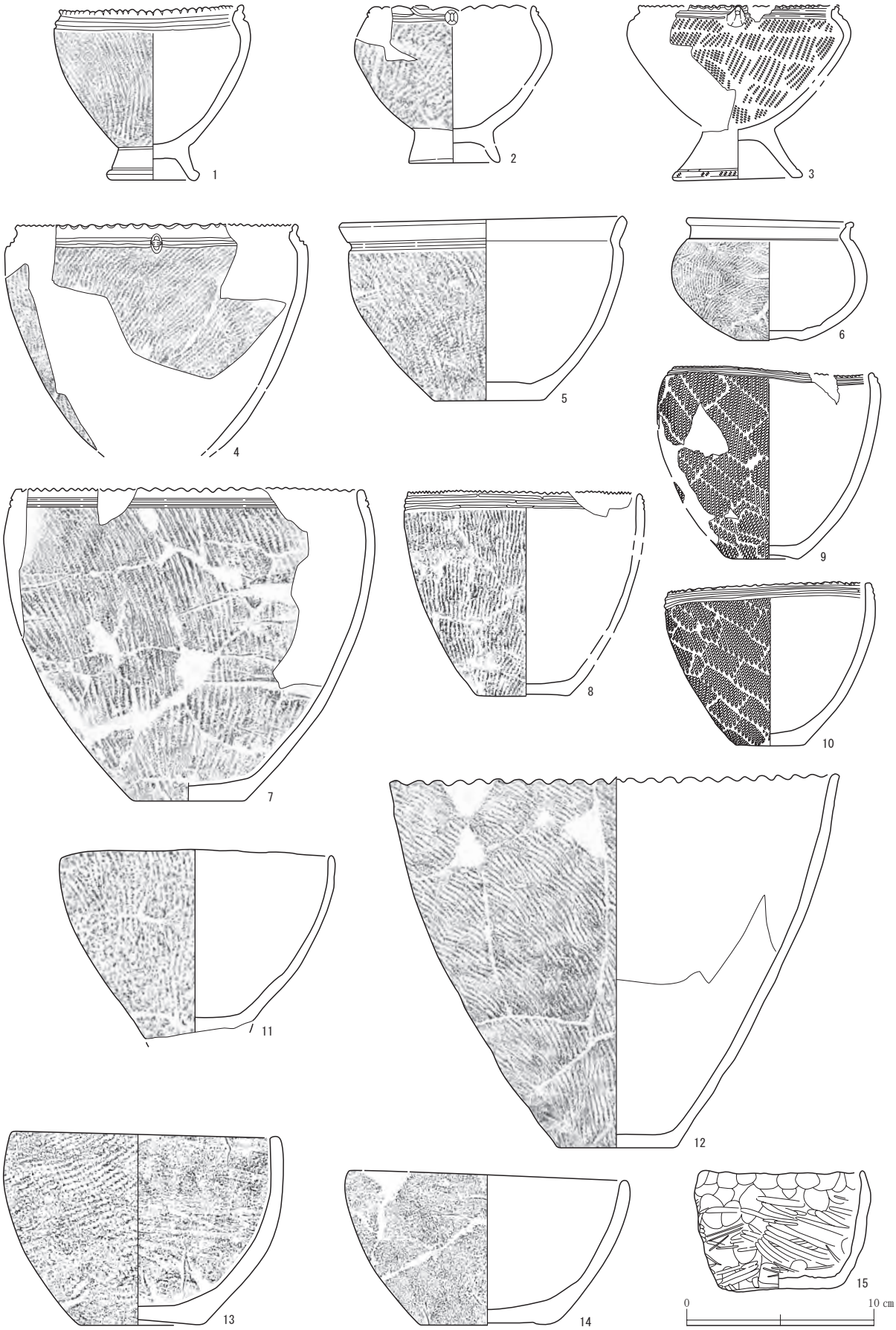
第17図　SM60出土遺物（５）



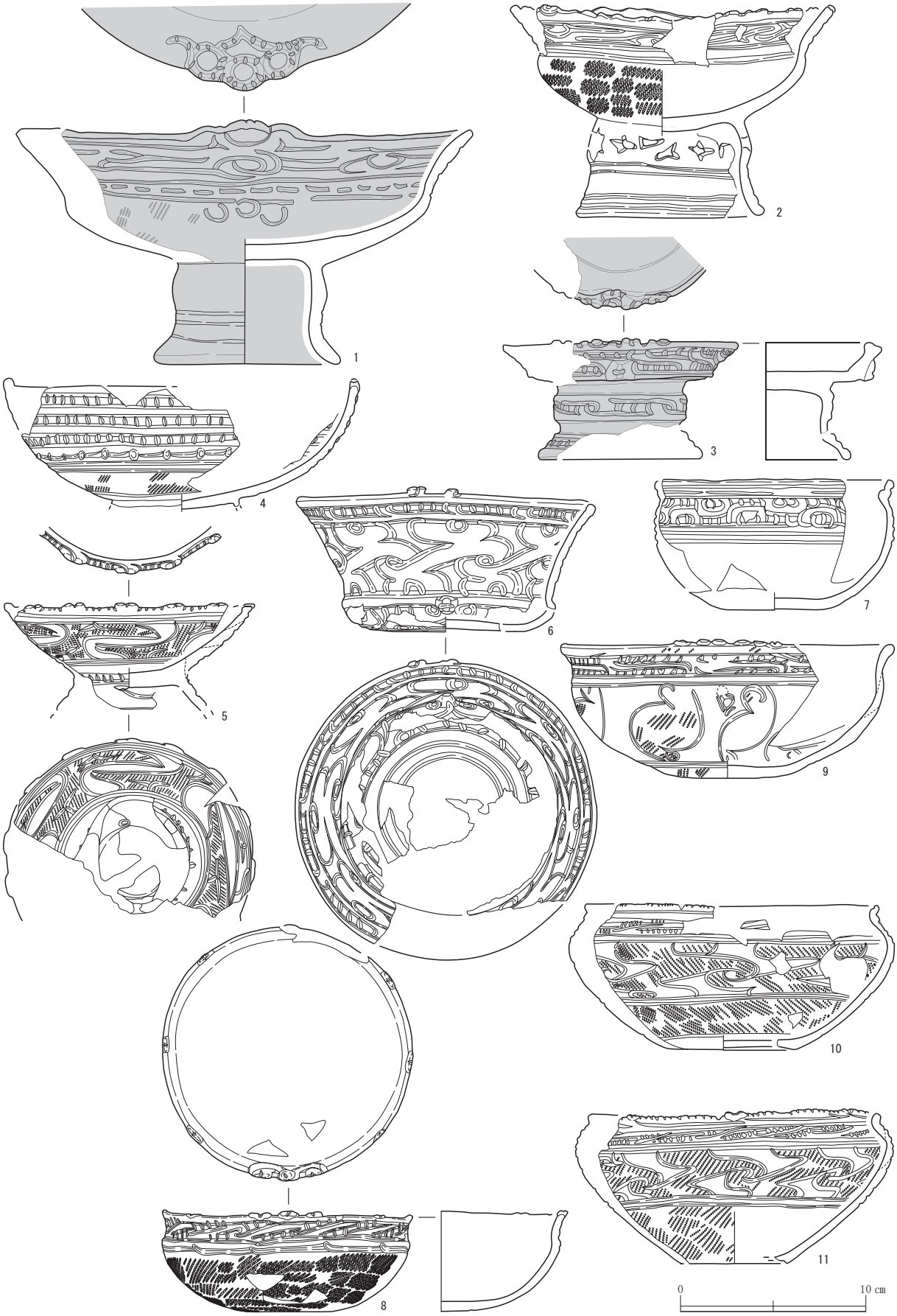
第18図　SM60出土遺物（６）



第19図　SM60出土遺物（７）

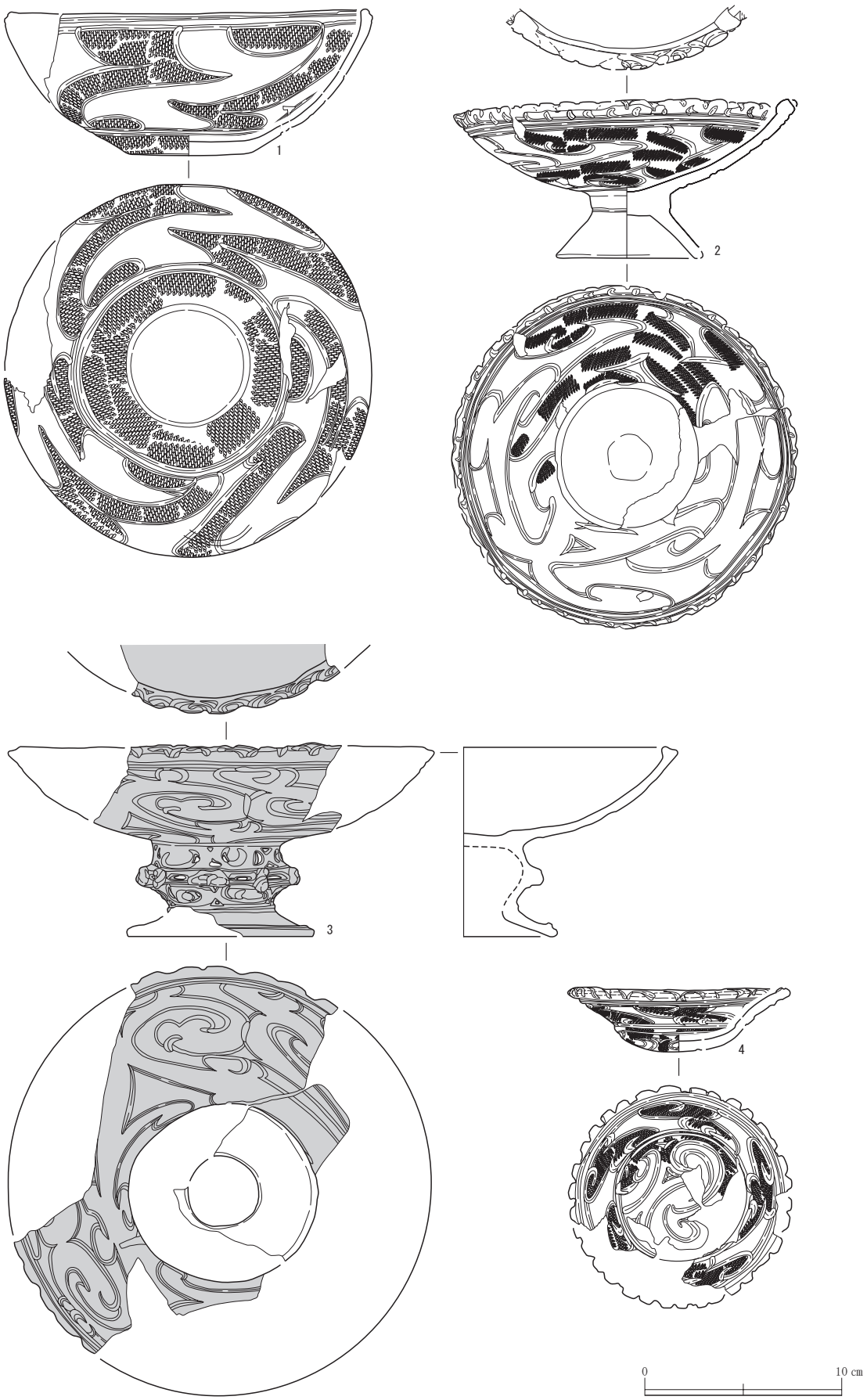


第20図　SM60出土遺物（８）

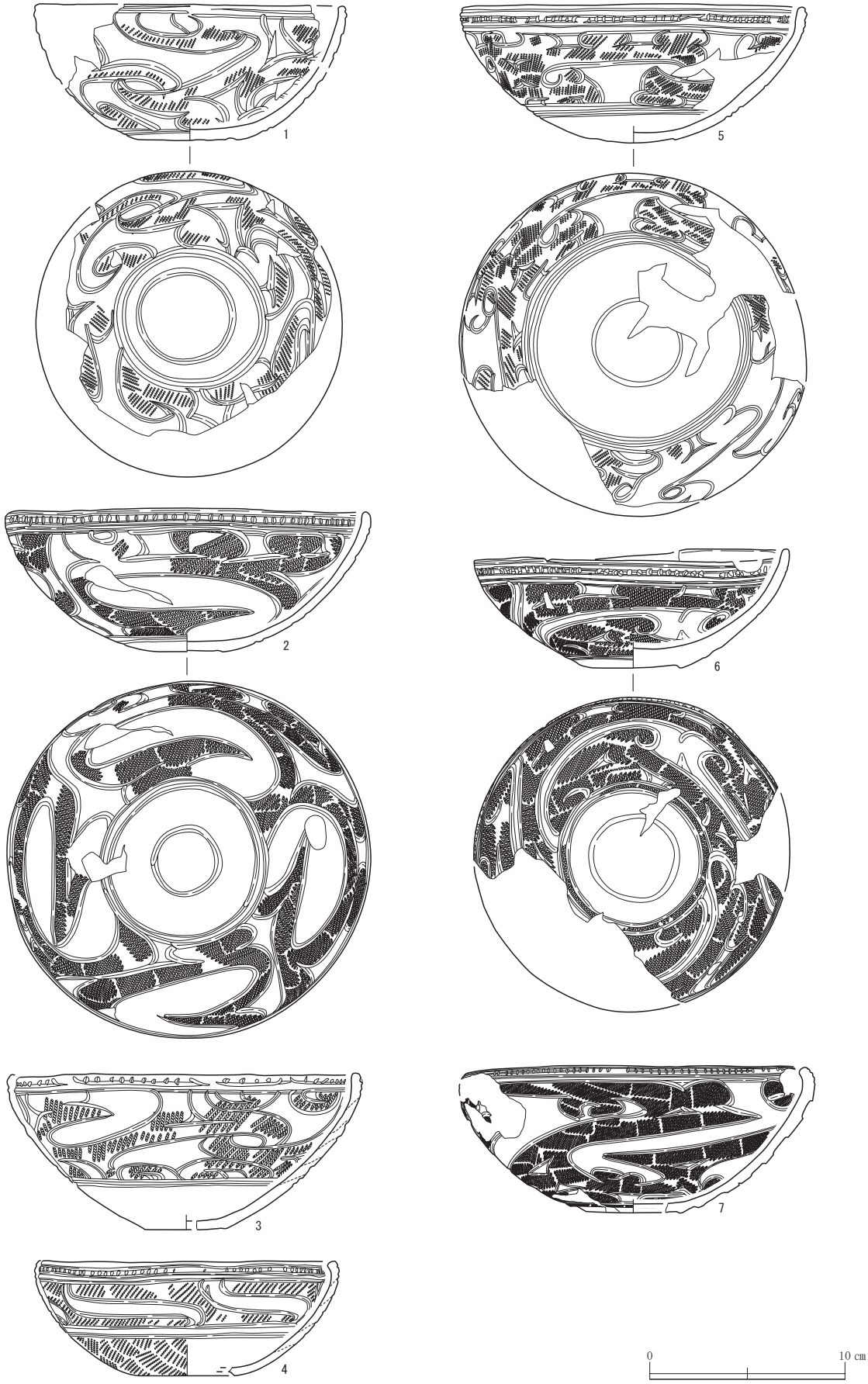


第21図　SM60出土遺物（９）

第22図　SM60出土遺物(10)

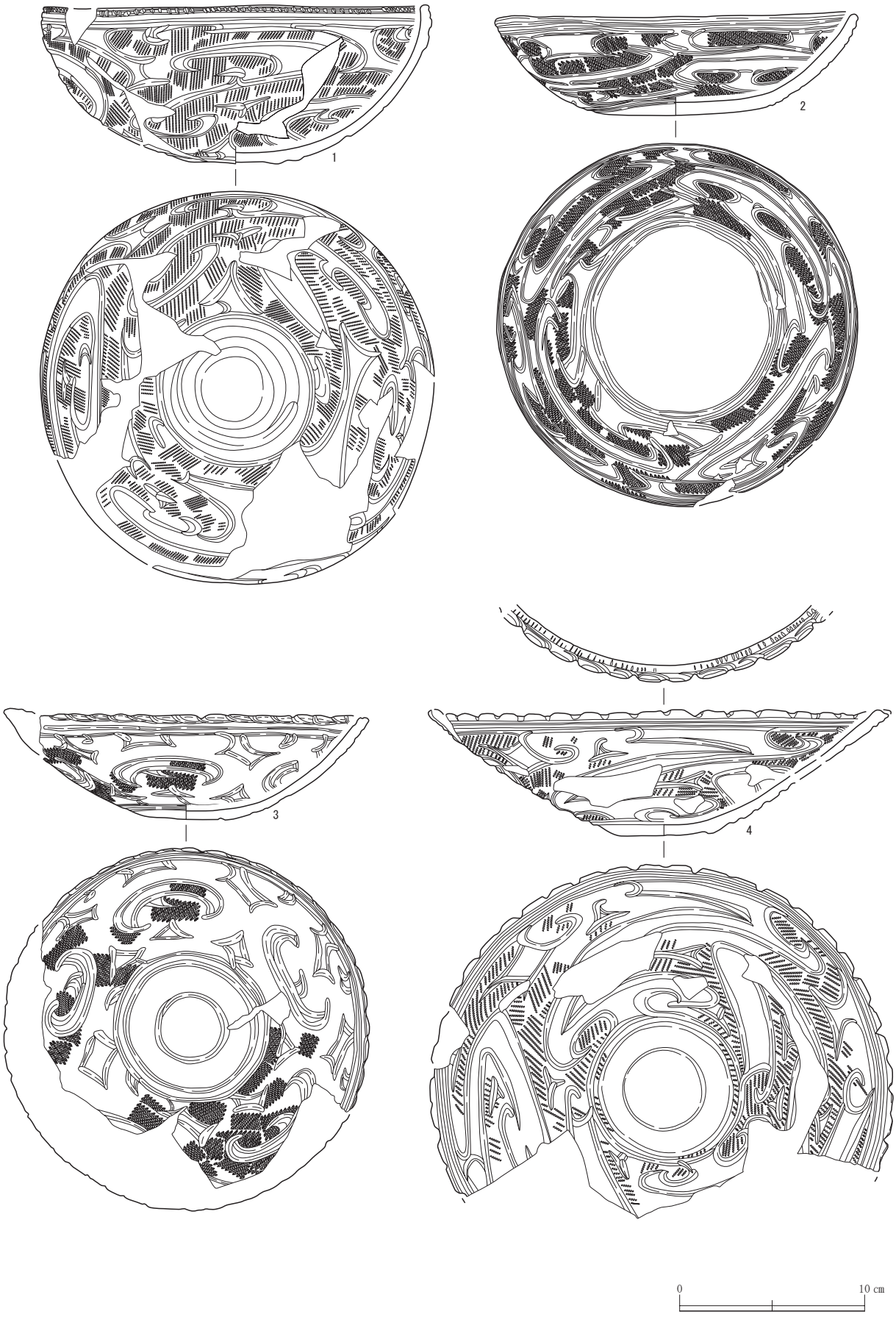


第23図　SM60出土遺物(11)

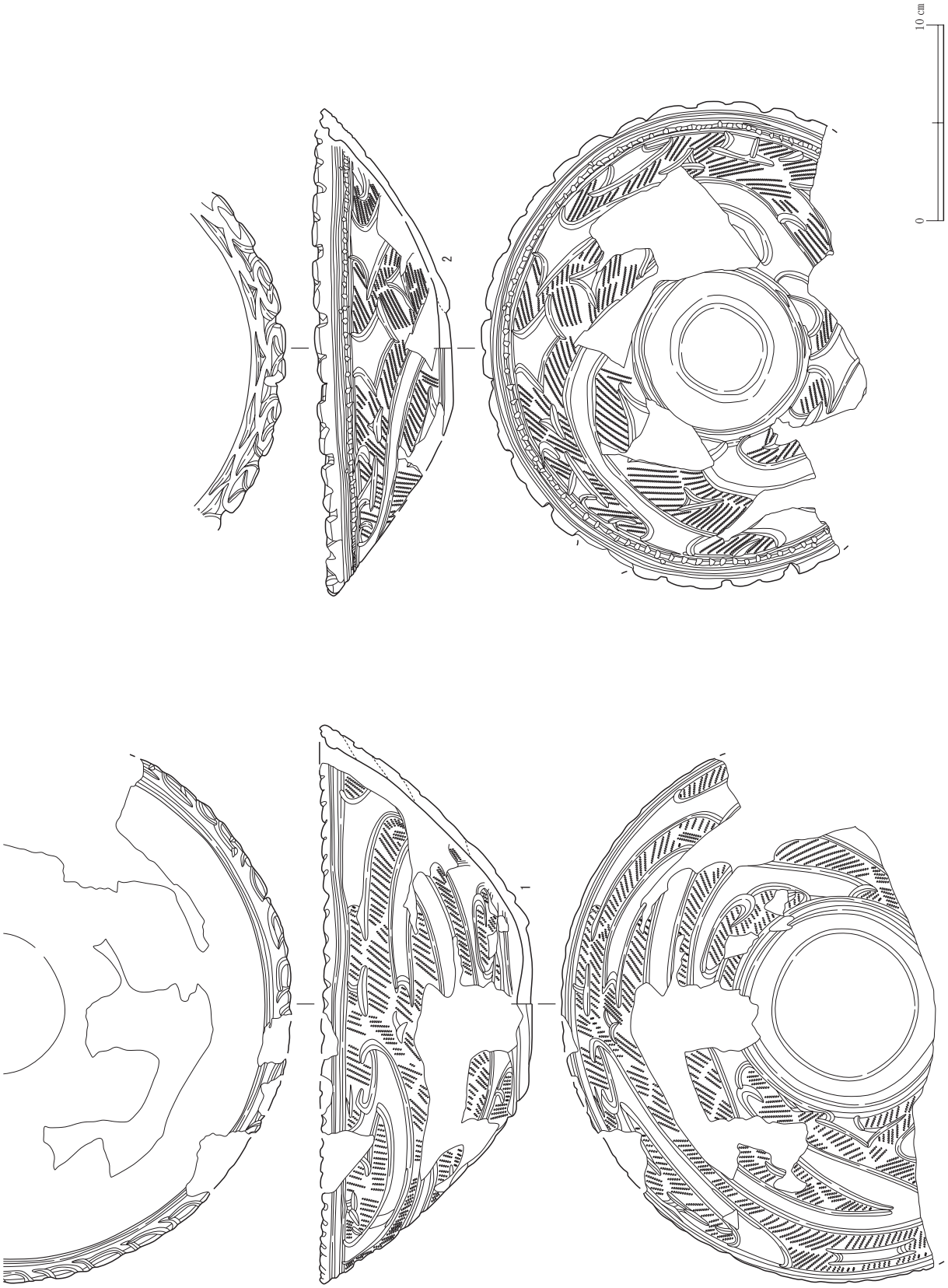


第24図　SM60出土遺物(12)

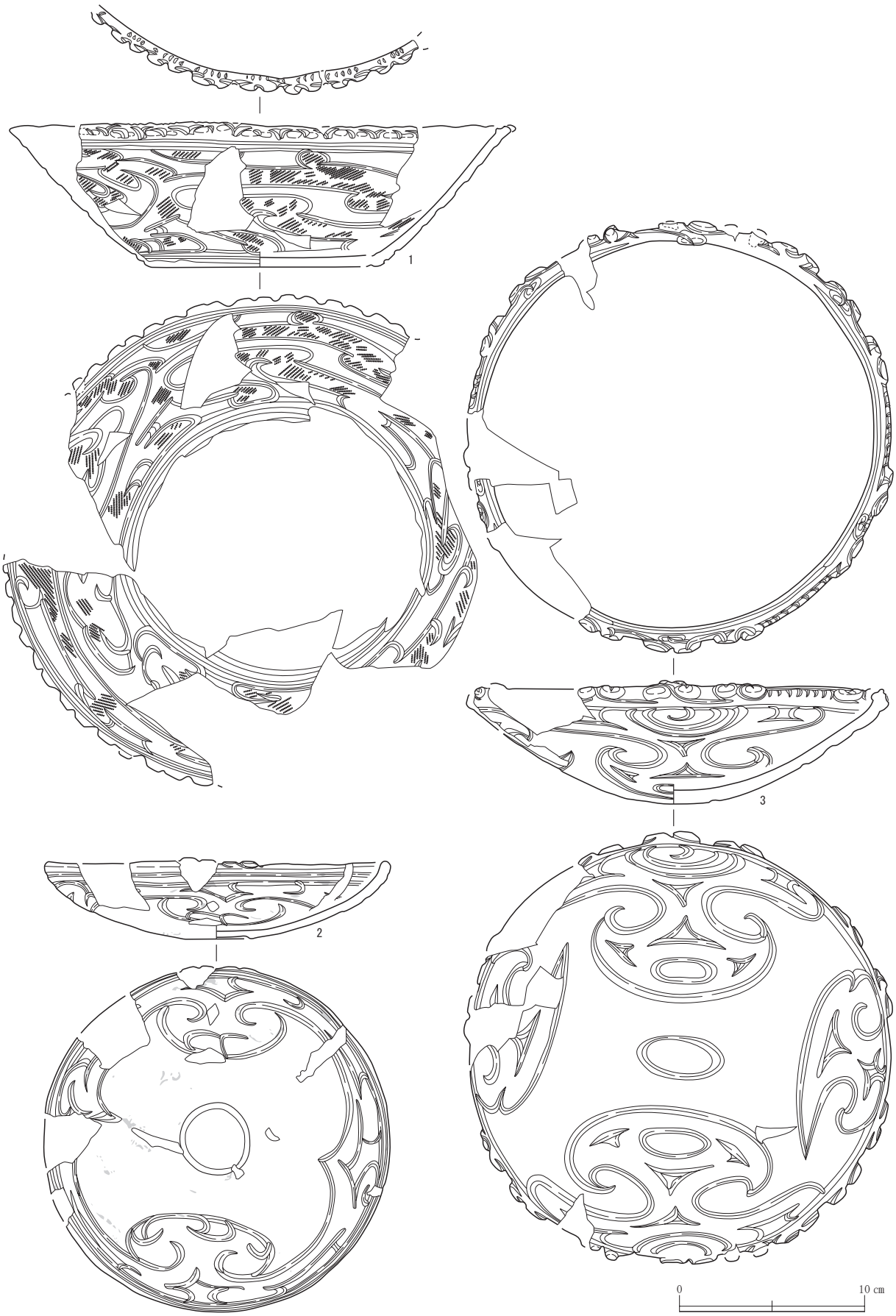
第25図　SM60出土遺物(13)



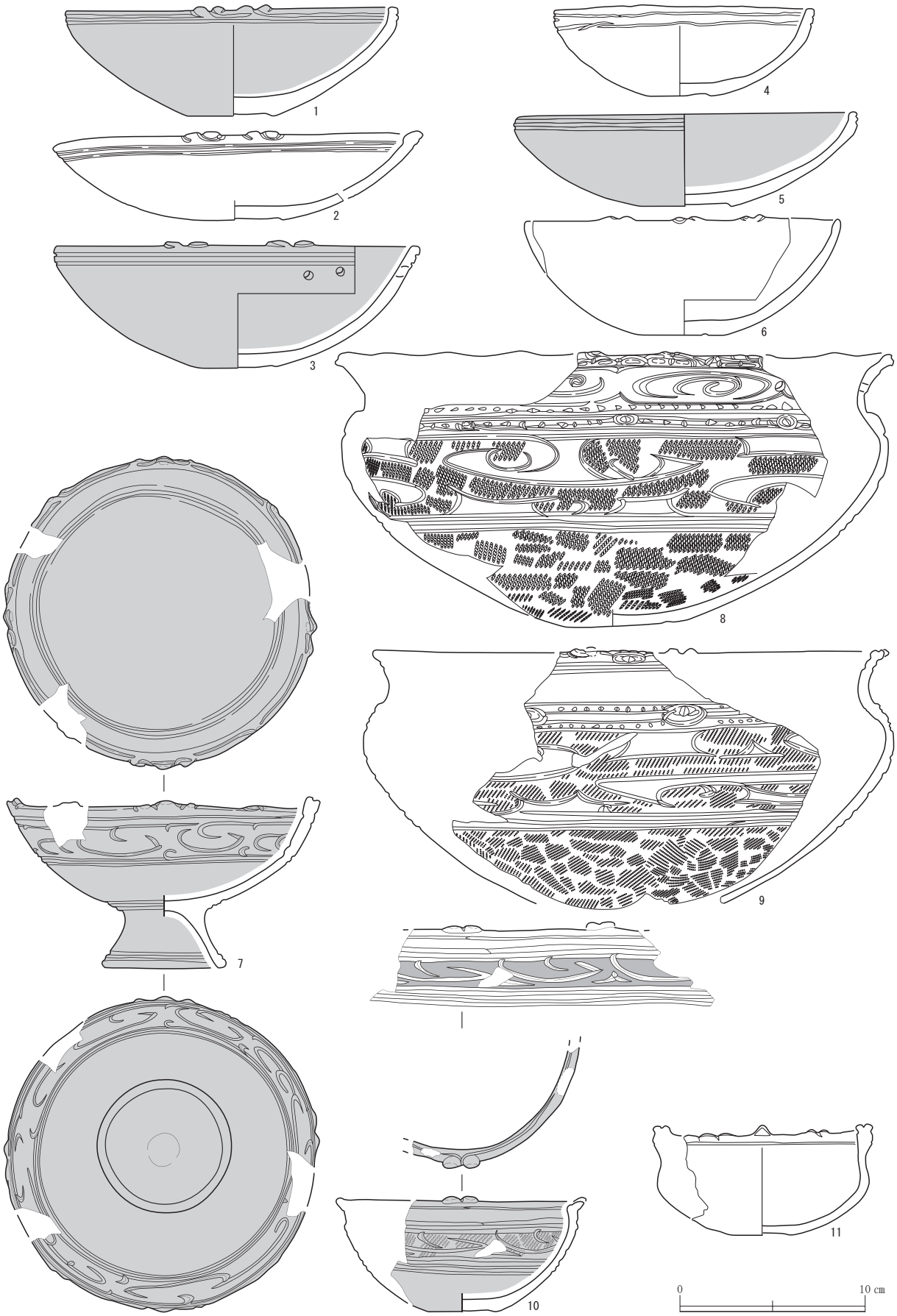
第26図　SM60出土遺物(14)



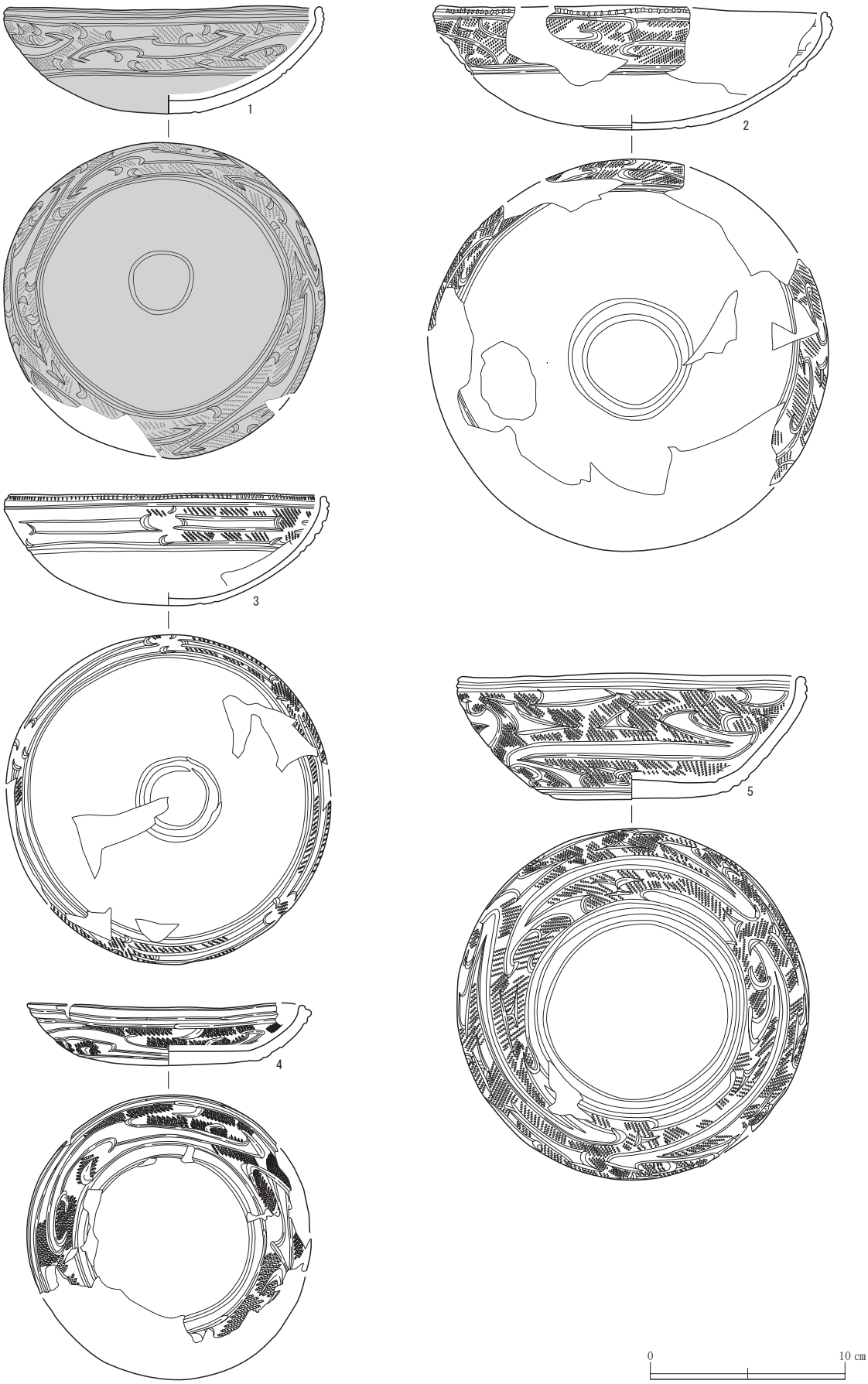
第27図　SM60出土遺物(15)



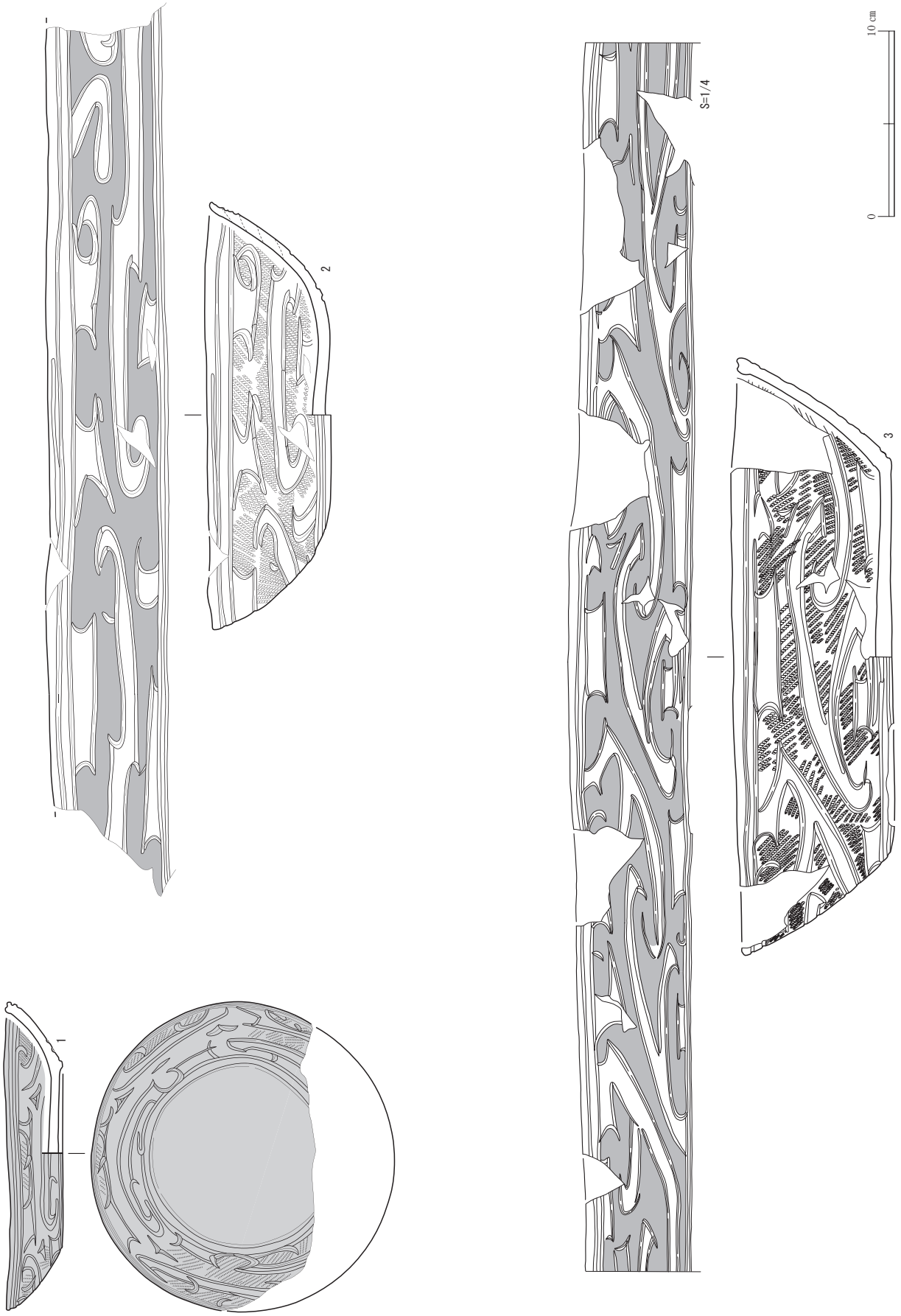
第28図　SM60出土遺物(16)



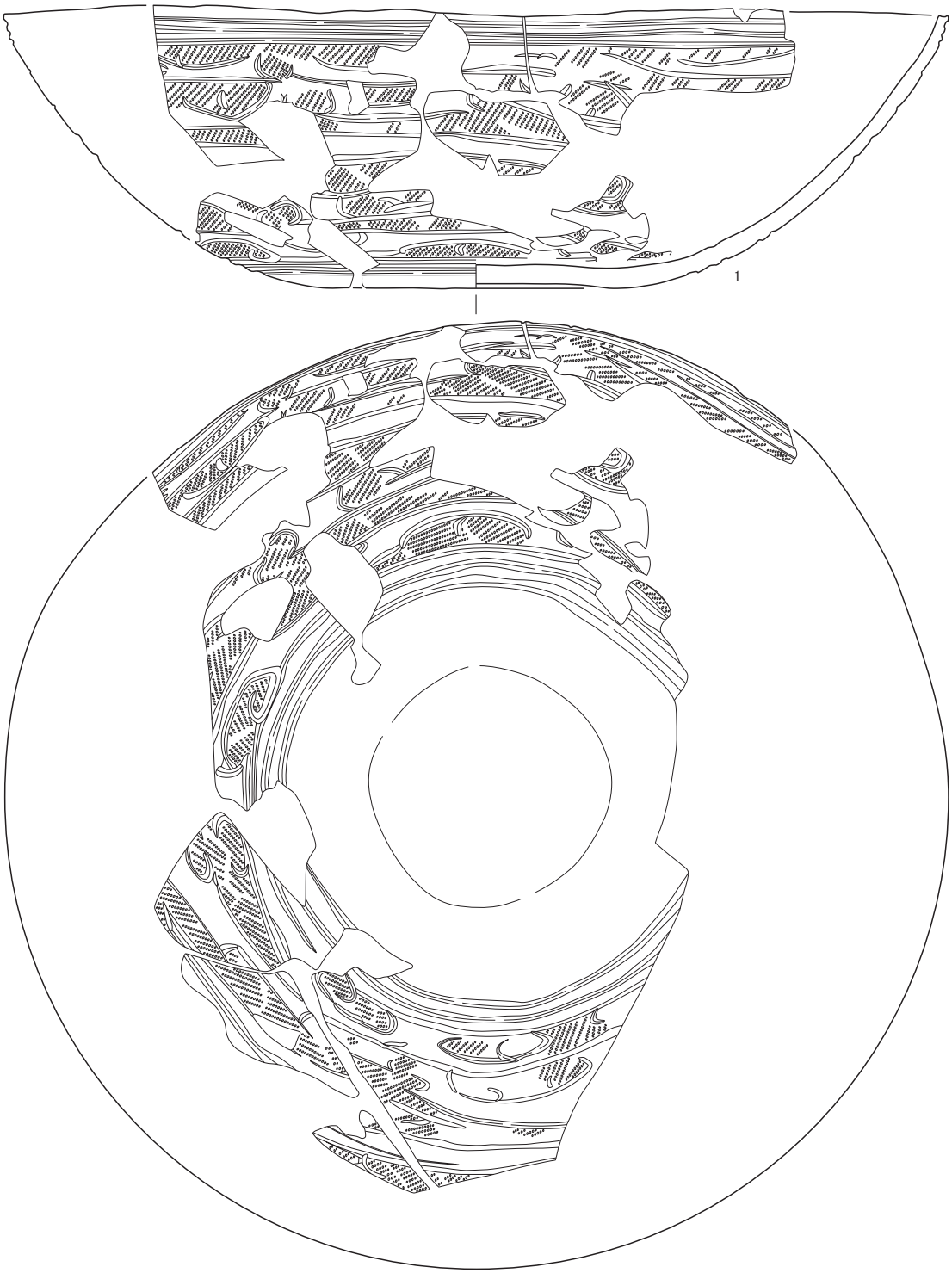
第29図　SM60出土遺物(17)



第30図　SM60出土遺物(18)

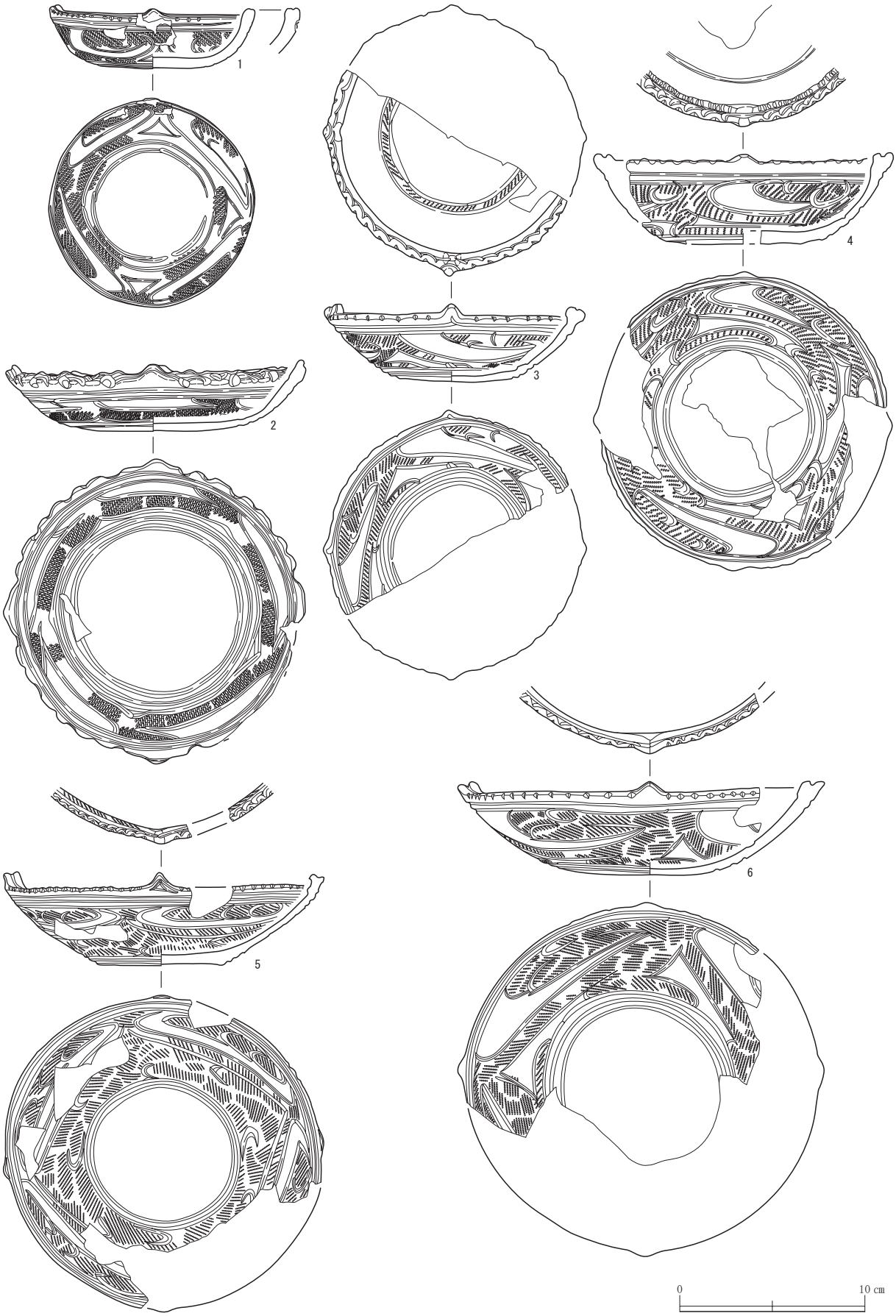


第31図　SM60出土遺物(19)



0　10 cm

第32図　SM60出土遺物(20)



第33図　SM60出土遺物(21)